

第二回 銀華文学賞発表

第二回銀華文学賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで一五二篇の作品が寄せられ、充実した作品が揃いました。全体のレベルも高く、多くの方に読んでいただきたい作品が多数集まった豊かな選考会となりました。心から御礼申し上げます。応募作の中から、選考委員／飯田章・河林満・大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査を経て、以下の通り受賞作が決定しました。ここに発表させていただきます。

なお、誌面の都合により、優秀賞の一部および奨励賞の作品は一〇号以降に順次掲載される予定です。

また第二回銀華文学賞授賞式は二〇〇六年一月二十九日午後二時より日本出版クラブ会館にて「文芸思潮」文芸講演会／富岡幸一郎氏の「批評と文学創造」および第一回現代詩賞授賞式・第一回エッセイ賞授賞式とともに行なう予定です。ぜひご参集ください。

※第三回銀華文学賞は昨年とほぼ同じ要領で行ないます。締切だけが一月繰り上がり七月三一日となります。奮ってご応募ください。お待ちしております。

選評

感動と衝撃と余韻

河林 満



今回も多数の応募作があり、まさにシルバー世代でなければ書けない実生活から出てきた作品が多いのは、当然といえば当然であろう。

坂口安吾は、かつて「ギヤアギヤアとジャズをやったりダンスをやったりするバカな奴の中に実際は人生があつてね。芸術というものはいつでもそこから出てくるんじゃないかと僕は思っていますよ。文学というものは、歴史の中ではなく、必ず生活の中にあるものです」といつているが、候補作を読んでそんな言葉を思い出した。問題は、その実生活の中からエピソードを拾い上げ、ストーリーにつむぎ作家が自分の全精力を賭して主人公の生きる息吹きを創造するかどうかである。

さて、幾つかの作品について触れてみたい。「飛べない鳥」(鈴木照夫)は、家内工業の仕事ぶりがよ

銀華文学賞

当選 「引つ越し」 中野睦夫

優秀賞

「インディアン・サマー」 一宮英郷

「最後のヤトウイングワ」 牧港誠之

「命の宴」 清松吾郎

「かけおちシンデレラ」 鈴木英夫

「遠雷の夏」 国方 勲

「人は世につれ」 浪川弘幸

奨励賞

「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」 梨場真人

「航跡——沙都子が残したもの——」 鈴木みい

「綺羅平野」 岬 魅堂

「ギフト」 つるみみつる

「送り火夢幻」 多仁ひろし

「仰向いた人形」 榎木啓子

「石に還る」 藤野秀樹

「葬儀委員長就任」 大植壽善

「蠟梅の香るとき」 前岡光明

「私の選んだ道」 福田志緒

「ジャワゆきさんの『老いらく園』」 四面田悟

「男友達」 中島美千代

「ウツの合間に」 伊藤伸太郎

「白嶺の彼方に」 諏訪崎はるえ

く書いていて、そちらの話をもっと読みたいと思ったが、ありきたりな結末になってしまった。タイトルもいささか陳腐である。この作者の別の優れた作品を読んだことがあるだけに、惜しい気がした。

「花燃えるとき」（下地芳子）は、最後は認知症になる老婦人の生涯を描いていて、青春の感傷を動員するのだが、そこが人生から実は接近しているつもりで乖離していることを知る必要があるであろう。一言でいえば、作り過ぎているのである。

「遠雷の夏」（国方勲）は、朝鮮から引き上げてきた一家の少年が主人公であるが、その少年が生き生きと描かれている。現在進行形としてあの時代が自分の目の前に展開されていると、読みながら思った。あの時代の記憶に我々の生きる時代はもっと励まされ、あるいはもっと叱咤されねばならないはずだ。ただ、始まってすぐに遠雷が来るのは、再考の余地があるだろう。

「葬儀委員長就任」（大植壽善）は、昭和三十年代のいわば風俗人情物語であるが、不思議な味わいがあり、最後に女将の悲しみが伝わってくる。言葉の重さ、貴さ、命名とこの行為が戒名という対象であってもやはり愛情表現なのだということを感じたし、感動もそこからくるのである。

「ギフト」（つるみみつる）は、長年勤めた会社を解雇されたセールスマンが古い顧客を訪ね、変わらず品物の注文

をとる話である。それは、顧客との一種の猿芝居だが、狂気に接近していて、できればそこに作者の関心が集中してほしかった。相手役の顧客が物分りが良すぎて、妙な同情を持つのも不自然である。嘘を承知で相手の芝居に乗るといふのは、やはりただならぬ関係があったのだと思うことは読者は容易に思うことである。

「インディアン・サマー」（二宮英郷）は、筆力もあり、若い主人公の体臭もよく伝わってきて、なかなか面白く読んだが、母子相姦をぬけぬけと書いていて、作者のそのあたりの倫理観がよくわからなかった。やはり読者としては、ああそうですかと素通りできぬ問題なのではないか。なぜそういうふうにならぬ特殊な、あるいは特殊といえる母子関係を前提にしなければならなかったのかわからない。再考を促したい。

このごろの文芸誌を見ると、若い人が華々しく出ているようだが、やはりこの銀華文学賞の応募作を読むと、安吾の言葉を思い出す。一口ではいえないが、何か猥雑なもの毒と熱気が人間を励ましていた時代のようなものを夢想し、実際の作品の中に表現されるのを期待する気持ちがある。本来の意味での野性を回復するのが文学の課題であることは変わらないだろう。

松本清張は、「作家とは世間に長じた詩人である」と言ったが、まさにこの詩人とは何か、が肝要である。譲れぬ

思い、自分の中で宮殿のように屹立する言葉を抱きしめつつ、しかもそれを、散文として読者に伝えていくのが小説を書くということだろう。

あるいは、黒岩重吾は言っている。「小説は感動と衝撃と余韻である」と。何でもないようだが、私はこの言葉が

好きだ。こういうものを作品で実現したいといつも思う。それが読者の願いでもあるはずだ。

シルバーパーの来年のさらなる応募を期待している。

物語への意志

小沢美智恵



今年の候補作はいずれもある水準を持っていたが、みな当選作として浮上するための決め手に欠けた。

物語への意志とでもいうのか、自分が語りたいものをいかに効果的に伝えるか、そのことに対する意識や問題の掘り下げが、もう一步あったら、と惜しまれる作品が多かった。

その中で、当選作となった中野睦夫氏の「引越し」は、ともかくにも作品世界の構築の意志がはっきりとしていた。奇妙な地下街の家への引越しが、家制度が崩壊し「家族」が弱体化した現代社会のアレゴリーになっている。カ

フカの「城」のようでありながら、中に出てくる家族のあたりがいかにも日本的であるところも面白く、一から架空の街を作り出した点が評価された。

ただ作品の核ともいえる「伯母さま」が何を意味するのか、今ひとつはつきりせず、それがこの作品の「あと一步」であるように思われた。

しかし、いかようにも読めるのは作品の「深さ」かも知れず、その意味を読者があれこれ考えることで作品が完成するともいえるかと思ひ、当選に賛成した。

優秀作の国方勲氏「遠雷の夏」は、細部の描写にすぐれ、わたしを含め二人の委員が満点をつけたが当選には至らなかった。

朝鮮から引き揚げてきた一家のひと夏が、まるで立体絵本を広げたように生き生きと立ちのぼってくる。草の色や血の匂い、そこに漂う空気や光の感触までもがくつきりと際立ち、そこで動く人物もみな生彩を放っている。溺れた子どもを助ける場面での「頭を下にして潜っている男たち

の水面を掻く足の裏が白くひらひらと見えた」という描写など、細部に真実が宿る場面が随所に見られ、読む喜びを感じさせた。

ただせっかくの人物・出来事が、風景画の点描にとどまり、有機的に絡んでこない。

たとえば、靖、美代、六車先輩を三角関係として設定すれば、それに付随して靖の父や六車の父の権力関係も浮かび上がり、ドラマが生まれたのではないか。そこに美代の弟の水難事故を配して動かせば、物語は一気に一本のうねりとなり、有機的な力を持ったのではないかと惜しまれた。

二宮英郷氏の「インディアン・サマー」も文章に力のあふ作品だが、それぞれのエピソードが有機的に結びついて、ひとつの「物語」を織りなすという所まで至っていない。

たとえ、語りたい体験があり、そのエピソードを下敷きにしても、小説にはそれらをどう組み合わせ、加工して作るかという「物語への意志」が必要なのではないか。

要するに、小説全体でひとつのことを語るといふことである。

だが、小説には筋とは関係のない面白さもある。清松吾郎氏の「命の宴」は、事業に失敗し、つましい生活を送る老年男性の日々の記録だが、貧しくとも卑しきのない男の生きざまが胸を打つ。小説としては決してうまいとは言えない。

浪川弘幸氏「人は世につれ」は、外国人労働者の実態がよくわかって興味深く、将来の労働問題にも言及して考えさせたが、外国人が社長になるというラストがはたしてよかつたかどうか。

梨場貞人氏「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」は、スキーバーダイビングで不思議な少女の霊を見る話で、謎で

カフカ的な世界

大高雅博



第二回銀華文学賞については、僕が読んだ範囲ではある水準を越えた作品が多く寄せられたというのが最初の印象だった。続けて応募された方もあったが、多くが新しい書き手であり、当然のことながら、書きたいという思いを持ち続けている人が大勢いるということであらためて認識させられた。前回は老人問題として老人に対するいじめを扱ったものも目立ったのだが、今回は、五〇代、六〇代、七〇代の異性に対する、情熱、恋愛問題をテーマにしたものがあり、若い人と変わらない意識があるという当たり前のことを思い出させてくれる。そこには前向きなエネルギー

ない素朴な筆なのだが、人生を見つめる眼の深さが感動を呼び込むのだろう。

その意味では、これも作品全体でひとつのことを語っていると言える。

奨励賞にとどまりはしたが、中島美千代氏の「男友達」はその点を満たし、過不足のない作品である。五十三歳という、もう若くはないが、「魅力的な男に会えば、燃え上がる力はまだ充分あるような気もしている」独身女性の異性観、恋愛観が、男性との心理的なかけひきとともに的確に描かれている。

文章にも無駄がなく、わたしは銀華文学賞にふさわしい作品のように思われたが、近親相姦、売買春、老人の性など、目を引く題材も多い作品群の中では、ホテルへ行き、何事もなく帰るだけという地味さがマイナスに働いたか。

同じ五十三歳の女性の心境を語るにも、賞レースにおいては、もう少し起伏に富んだ「物語への意志」が必要という点も知れない。

鈴木英夫氏の「かけおちシンデレラ」もよくまとまっております、読後感もさわやかで好評だったが、薄味すぎた。

藤野秀樹氏「石に還る」は、御霊石の伝説をうまく使い、不思議な雰囲気をもたして捨てがたい味があったが、タイトルと、伝説を最初に配したことで、オチがすぐにわかってしまうという指摘があった。

ひっぱり読ませる力を持っていたが、戦争による死者の霊であることの掘り下げが足りず、せっかくの鉱脈を生かされていない感があった。

いずれもよく書いていて、あと一步と惜しまれるのだが、その一步を踏み越えるには、結局それぞれの作者が、命を削ってつきつめていくしかないのかも知れない。

があり、いくつかの作品は文芸思潮に掲載されるだろうが、「老人」というような後ろ向きな感覚ではない、新しい文学の可能性を示しているようにも思える。その点でも「文芸思潮」という場が出来たことによる、効果があらわれ始めている感があり、この雑誌の必然性と可能性を再認識できるだろう。

当選作の「引越し」はカフカ的な世界が展開されるのだが、それは日本的な家族、家というものが根底にあり、単なる物真似ではない。永遠に続く絶望的な世界だが、最後に、空に赤い光が見える。それも、決して完全な希望ではないのだけれど、救われる思いがする。日本の現状を小説にする時にこういう方法も必要ではないかと言う点が評価された。この小説のあらゆるものの意味付けをして、つまり、全部を理解した上での評価というよりは、全体的な雰囲気を押されての当選作ということとは否めないが、この作者が長年、こういう傾向の作品を書き続けてきたとすれ

ば、それはすばらしいことだと思ふ。

優秀作の「人は世につれ」だが、八割ほどは良いのだが、最後が未完成な感じがする。引きこもりの子供が別の引きこもりの彼女を見つけ、というような面白い展開があるのにそれはそこで終わってしまった。残念な感じがする。

奨励作では、猥雑だが、どことなく品があり暖かみがある。「葬儀委員長就任」と、生まれ変わりと言うような題材だがそれ程違和感がなく子供の描写が印象的な「石に還る」に魅力を感じた。

僕は、「消えない音」が良いと思った。緊張感があり、それが最後まで持続しているだけでも、完成度の高い作品だと高く評価した。しかし、他の選者から結末等を直せばもっと良くなるという指摘も合わせて書き直しができれば、作者のためにも、作品のためにもなるのではないかとということで今回は見送り、再挑戦をしてもらうことになった。しかし書き直しが良い結果を生むとはかぎらないが、僕は期

待したい。

他にも幾つか、書き直しをした方が良い作品もみられ、それは発表に際してできるだけ、そのことを作者には知らせることになるだろう。

最後に、選には漏れてしまったが、「とりたて屋」という作品は、スパーが経営しているクレジット会社のとりたてというような現代的な魅力的な素材であったが、小説としてはその会社内部の人間関係のほうに流れてしまつて、技術的な問題もあり全体的には未完成という感じが残り念であった。もつと、とりたてのほうで話を膨らませてほしかった。この作者は小説を書き始めて間もないということ、**「文芸思潮」**を創作の向上に役立てる方向で活用するという方法もあるのではないかと考える。

全国の書き手に発表の場を提供すること、書き手の向上が、雑誌を立ち上げた当初の意図でもあったのだから、そう言う意味でも、もつと、多くの広がりが出てくることを望みたい。

テーマか

出来映えか

飯田章



技術的な不満はあっても、テーマの新鮮さをとるか、よくありがちなテーマであっても、出来映えの上手さをとるか、は判断の悩ましいところだ。今回の選考はその点で、委員の意見が割れた。結果はごらんとおりである。

「遠雷の夏」(国方勲)は、戦後朝鮮から引き揚げてきてをふんだんに駆使して緻密に描かれる。終盤に入つて、減圧症にかかつて死んだ栄泉の友人の娘である上原めぐみを描くあたりから駆け足になって収束していくのが惜しまれる。

「命の宴」(清松吾郎)は、身障者(三級)で、月十万円の年金生活者である「私」の孤独で難渋な日々の光景が描かれる。子供はなく、妻に死なれ、唯一の兄弟である心身障害者の弟にも死なれ、母は老人ホームに入っている。主人公を取り巻く不運な境遇には胸が詰まるが、「私」の唯一の生き甲斐である小説の創作に打ち込む姿に仄かな明かりがともる。

「インディアン・サマー」(二宮英郷)は、アメリカへ農業研修にきている神野幸一郎の異国人たちとの交流や性体験が描かれる。神野は中学時代に母子相姦の経験をもつツワモノで、カリフォルニアのキャンプ地でも、黒人売春婦のサラや金髪のミセス・マリーンとの性愛に耽る。文体は翻訳調で乾いており、エキゾチックで、ワイルドな官能の匂いがたちこめる作品だ。

「かけおちシンデレラ」(鈴木英夫)は、農家の三男である英作と本家筋の末娘操との恋愛を描く。二人は操の父に結婚を反対されて、駆け落ちをする。敗戦後二年目の農村が舞台になっており、少々甘たるいが、若い二人の恋愛が初々しく清潔に描かれている。操がとても可愛い。

「最後のヤトウイングワ」(牧港誠之)は、沖縄の海の潮の匂いがする男っぽい作品だ。最後のヤトウイングワ(雇い子)あたりである海人の根間栄泉を主人公に、海人としての苛酷な生活や、周辺の人々との関わりが、沖縄の方言

はあまり高くない。父の独断で、「伯母さま」が所有する

ビルの地階にある部屋に引越してくる「私」たち大家族（父母と九人の子供ノ）の困惑を描く。この部屋は一人一部屋でも余る部屋数があり、ただ同然の安い家賃で、地下道で駅につながる便利さはあるが、窓がない。つまりカフカ流の不条理な状況での生活を余儀なくされる。まことに卓抜な設定で、書ききよによっては大傑作にもなりうる性格を備えているのだが、残念ながら、長男である「私」の観念で記述されるだけで、登場人物にほとんど動きがない。

光輝く言葉

小浜清志



熟年と呼ばれる年代の人たちに賞を与えようとする出版社は皆無といってもいいだろう。しかし、人生という経験を重ねて紡ぎ出す言葉は、たとえそれが技術的に劣っていても、光り輝くものだというのを、この賞の選考にたずさわるようになって深く感じるようになった。

とはいえ、選ぶことのむずかしさは回を重ねるほどに頭を悩ませる。生命を刻みつける思いで書き上げた作品群を見渡すとまず最初に溜息が出る。次に、Aという作品を見

この異常な空間に放り込まれた家族一人一人がどんなふう
に反応し、どんな行動をとるのか、そこがまったく描けて
いないので、折角の好アイディアが設定倒れに終わっている
と私は思うのだが、どうだろう……。

他に印象に残った作品に、「仰向いた人形」「春雷」「男
友達」「パンザイクリフに沈みゆく夕陽」「送り火夢幻」
「ジャワゆきさんの『老いらく園』」「いただきさん」など
がある。

ればBが下がるのではなく、Aを見てもBを見ても基準が
曇ってくるだけで、まるで闇の中で手探りで探し物をして
いるような状態におちいることがしばしばであった。それ
でも決めなければならぬという作業は苦渋ではあったが、
秀作、名作と向き合えたという喜びはひとしおであった。
当選作の「引越し」——まずはおめでとうございます。

家族の問題を引越しという変化にぶつけてブリズムのよ
うにさまざまな色を引き出した秀作で小説の深みと広がり
を見せつけてくれた。

優秀賞の「命の宴」はゾラの「居酒屋」の日本版のよう
にも思える作品で、現実生活の重い空気を見事に描ききつ
ている。

「最後のヤトウイングワ」は私自身も小説の舞台に沖繩を
使っている。同じ八重山出身という同郷のよしみもあり、

「イトマンター」と呼ばれていた時代の匂いをこの小説で
かがせていただいた。五〇枚という分量に詰め過ぎなけれ
ばもっと完成度が得られただろう。

「かけおちシンデレラ」は、時代がどんなに暗くとも青春
とは常に明るい光を放っているという、忘れかけていた生
命の輝きを思い出させてくれた佳作だった。

「遠雷の夏」は、もはや戦後ではないという言葉がかつて
あったが、戦争を体験した者には生涯消え去ることのない
何かが残る——戦後が生きている限り続くのだ、とあらた
めて感じ入った。この作品には引揚者の吐息が伝わって
くる。

「人は世につれ」は日記体の小説である。サラリーマンの
悲哀を日を追って炙り出す手法はすばらしく、会社という
怪物が迫ってくる力に圧倒された。

「インディアン・サマー」はサラボンの唄の、腹に染み
てくる悲しみが伝わってきた。性とは、母子、父娘の壁も
突き抜ける生命の根源であるとしみじみと考えさせられた。

誌面の都合で以下は省略するが、選外で記憶に残ってい
る作品は「いただきさん」（北澤佑紀）、「落日」（海保烈）
、「春雷」（安芸遙）、「炎上」（堤君子）、「十一年目の復讐」
（来島徹）、「飛べない鳥」（鈴木照夫）、「昇格左遷」（北風

嘉己）、「堀木美佐「かえりの駄賃」だった。次回を期待し
たい。



第2回銀華文学賞 選考会風景

の行為

八覚正大



これを書くにあたってまず私がしたこと、それは第一回銀華文学賞の自分の選評を読むことであつた。「経験と熟達の輝き」と題して、「まざまざ」と年配者たちの実力を見せられ」たと書いている。さらに「言葉の一回性に賭ける文学とは、飽くなき自由の探求であり、人間性の無謀とも言える思考実験の枠なき場である」などと書いてもある。約一年経ってしまったわけである。それは私のみならず、他の選者、応募者など、あらゆる人間が、さらに一つ歳をとったということである。

そして気がつくことは、昨年度のこととは、すでに我々の脳の記憶（もちろん創刊号という物に痕跡はあるが）の中にしかなく、まだ見ぬ来年は、期待だけでなにもないということである。ならば「いま・ここで」の行為こそ、ほとんどすべてといえる。否、書くという行為そのものが、一刻一刻の時間とともに、過ぎていく知情意の行為の集積に他ならない、とするならその瞬間瞬間に最高のものを提示することこそ、不可逆的な時間の中に生きる、自分自身へ

の最高の贈り物と言えるのだろうか。

ついでに言うなら、書くという行為は「書き直す」という行為と不可分のものである。書き直す中で、新たな自分との出会いがあり、作品は立体化するものである。

しかし我々は自分では直接、自分の顔もまた外化された作品も見られないのだ（作者にとって自作とは作っていくプロセスをも内包してしまっている）。だからこのような賞への応募は、その意味でも意義のあることだと思う。とともに、選者としての私にも多くの発見や学びがあり、結果として今年も感謝せざるを得ない気持ちになっている。

おまけに選評を書かせてもらうという「いま・ここで」での行為は、外からの刺激と、いままで生きてきた内側からの自分が、外界・内界の接点で皮一枚自己を広げていくことでもあるのだ。作品は自分を離れてはあり得ない。しかし自分のものだけであつても創作ではない。それが生まれ出て認知されるのは、書き手と読み手の「いま・ここ」が作品を介してつながった瞬間からなのである。

さて、今回私は当選作に「人は世につれ」を推した。日記体の文章で、はじめは硬い感じがしたが、ニートの息子とのやり取りや労働者たちとの関わりが生きていて、なかなか臨場感があつた。主人公は、その引きこもりの息子の父親。一方、彼は会社では外国人労働者を含めた下請け労働者を動かす人事管理の立場なのだ。そのような社会的に

は前門の虎を扱い、家庭的には後門の狼を抱えた中高年の男がよく描かれている。とともに、外国人労働者たちには力があつたことがやがて分かり、「彼らこそが経営者にふさわしい」という少しSF的な、しかし近未来の日本を予測させるラストになっている。引きこもりの息子とのさらなる葛藤、外国人労働者のさらなる実態などもっと読みたかった。ラストは多少弱い感じだが、社会現象をよく実存的に捉えているので、発想とテーマを評価した。

「引越し」は、さらに発想の面白い作品ではある。仕事をやめて久しい父親、その知り合いが新しい家の家主の女性を知っていて、そこでなにか意気投合し引越しになる。

しかし、奇妙な間取りのその家を息子である主人公は「これまでの考えで家を守りつづけるのは不可能ではないのか、きのうまでは家の内と外という区分けですんだが、それ自体が外であるかのような、それでいて部屋の奥にまた部屋があるような家では、これまでとはまったく別の考え方を強いられるのではないか」と不安になる。カフカ的というか、安部公房を少し連想させたりもし、寓意に富んだ、概念的な作品である。が、多少未知数でもある。

「最後のヤトウイングワ」は、前半はその半ば身売りのような風習の、鍛えられこき使われる潜りの仕事と、沖縄の風土がじつによく描けていて、これが受賞作になるのではと思われた。丘に上がって川崎の工場に勤めるまではいい

が、その後、主人公の弟分の死からの展開が急の感があり、主人公がその娘の非行に直面していく姿勢は分かるのだが（どこか「シェーン」を連想させた）構成が乱れてしまったように思える。

「かけおちシンデレラ」は若い男女の駆け落ちの話。文章がみずみずしく、おもしろく読めた。ただラストの人称の変化は唐突。

「インディアン・サマー」は、アメリカへ留学した主人公のバイタリティーあふれる青春期。ただ、これでもかと強い面ばかり目に付き、読んでいて少し興ざめな気がした。

「遠雷の夏」は少年時代のさまざまなエピソードが、なかなかの描写によって読ませる。が、もう少しストーリー性が欲しい。

「送り火夢幻」は老人の性の話。元気の源のようところがよく描かれている。想像であつても楽しい。作者も楽しみつつ書いている。老人性愛文学の特集があれば推したい作品だ。

「男友達」中高年の男女の、性愛への今一度の思いとためらい。その淡い感覚と苦さがよく描かれている。

以下、印象に残ったものを羅列する。

「飛べない鳥」二組の夫婦の視点という構成がなかなか読ませた。しかしラストが暗く救いがない。

「かえりの駄賃」終戦の日までのこと。会話は生きている。

「黄海」ゆつたりとした文章。「個人としての付き合い」と「国家というものを背負った時」のそれとの違いのようなものが仄見える。テーマは大きい、もう少し明確化してほしい。

「葬儀委員長就任」飲み屋に集う人々の点鬼簿。男には分かる。

「ジャワゆきさんの『老いらく園』」あつけらかんとした老いらくのセックスが面白い。老人性愛特集に推したい。

「石に還る」郷里の御魂石の風習。テーマはいいが、さらなる構成を。

「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」スキューバダイビングの描写はなかなか。

「花燃えるとき」沖繩の女の一生。

巨大化する

無機質な領域

五十嵐 勉



第二回銀華文学賞は、応募数は前年を下回ったが、全体のレベルはいっそうアップしていた。第一次予選、第二次予選の通過数が多かったこともこれを物語っている。題材

で一周する姿の作品として強力に推せる作品は少なかった。

三次予選の総合点数では「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」（梨場貞人）が最もよかったが、当選作を選ぶ段階では、多数の支持が得られなかった。

私が当選作に推したのは、牧港誠之氏の「最後のヤトウイングワ」である。ここには単に美しい沖繩の海があるのではなく、命のやりとりをする闘いの相手としての沖繩の海がある。貧しさの運命によって漁民に預けられ、命を賭けて海に潜る少年の苛酷な労働の姿は、骨ばった菌ごたえのある文体に支えられて、余計な情緒を削いだ、骨太な迫真力がある。またその生と死のぎりぎりのあわいを縫って営まれる海の労働が、科学技術の発達によって時代遅れの制度と漁法となり、衰微排除されていく過程は、しっかりと描かれていて、人間が時代とともに失っていくある力の姿をありありと見せてくれる。感情や説明を極力排除した文章は、なぜ過去の同僚の娘を救いに行くのか、わかりにくくさせているかもしれないが、ここには都市化によって人間が失った力、失いつつある力に対する深い哀惜があり、それがしつかり底流に流れている。ヤトウイングワのきずなと誇りと哀惜が彼女を救いに行かせるのであって、私はそれに納得した。終わり方もいい。夜の海での死を象徴させるシーン、そしてそれを見守り、不安と予感を抱く同僚の娘の眼差しは、現代の人間の世界の行方を暗示し、最期

「落日」朝鮮人の女友達との葛藤は描けている。「仰向いた人形」妻に疎まれる葉セールスマンの悲哀と死。「ウツの合間に」うつから過去の回想、そして死を見つめる断面がいい。ただもう少し状況を描いてほしい。

「磔」発想が鋭い。そして教師だった男の自責の念にうたれる。ただ、有識者たちの手紙の返事が解説的。

「私の選んだ道」損害保険会社のひどい実態。辞めて再出発を図る主人公の姿勢に共感が湧く。

「命の宴」老いの人生を淡々と描いた秀作。

「十一年目の復讐」文章はすばらしく、時代ものとしては読ませる。ただストーリーに破綻がなさすぎる。

第三回銀華文学賞には、場外ホームランのような「激作」を期待したい。

も、老人の性やリストラ、恋愛を扱ったもののほかに、怪奇ものや、都市寓話ものなど、多様化、現代化が見られた。外国を舞台にした作品にも力作がいくつかあった。空間的にもひろがりを感じられた。

ただ、第三次予選までは、レベルアップが感じられたが、当選作を選ぶ段になると、難航した。野球で言えば、シングルヒットや二塁打、三塁打はボカスカ出ているが、ホームランがないという感じだ。裾野は広く高くなったが、頂上部の高さは突出したものがなく、単独でホームベースま

を見届ける側の心の揺れとして、現代に深く足場を得ている。多数の支持が得られなかったのは、残念だった。しかし私はこの作品に拍手を送りたい。

中野睦夫氏の「引越し」は正面から現代の不条理と取り組んでいる。我々が失いつつあるものを、象徴的に、グロテスクに描いている。具体的なものを使って生活に密着して描くのではなく、もっと抽象的に、むしろ具象を極力捨てて、問題の本質に迫っていく。カフカの「城」のような作品と共通したものがある。無機質な領域が巨大化し、人間の生物学的な力が、便利性や数値化に優先されていく現代の本質的な問題は、これまでのリアリズムといったありきたりな方法では捉え切れない。ビルの中で組織や人間関係に翻弄されている姿をいくら具体的に描いても、もともと人間の足元を崩しつつある重大な無機質化の問題には肉薄できない。こういう大胆に抽象化していく方法こそ有力であろう。中野氏がこの方法をどこまで自覚的に武器として使っているか、この一作では疑問だし、現代の文明の問題をどこまで捉えて、本格的に取り組んでいるかは、まだ未知数であり、不安は残るが、その方法の価値に賭けて、私はこれも強く推した。私とすれば、二作品の受賞が希望だったが、選考の流れはそれに傾かなかった。

二宮英郷氏の「インディアン・サマー」は、短期の滞在ではけっして書け得ないアメリカの風土が、陽光とともに

河林 満

かわばやし みつる

1950福島県生まれ
立川市役所勤務
中上健次に師事
90「渇水」文学界新人賞受賞・芥川賞候補
93「穀雨」芥川賞候補
他に「黒い水」「年譜」「塵芥のさなぎ」「海からの光」など多数
「文藝いわき」主宰

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954茨城県生まれ
千葉大人文学科卒
出版社勤務
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

大高雅博

おおたか まさひろ

1954石川県生まれ
日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

飯田 章

いいだ あきら

1935東京生まれ
58早大第二政経学部卒
74「迪子とその夫」で群像新人文学賞受賞
87「あしたの熱に身もほそり」で芥川賞候補
他に「電線」「向島へ」「初恋」「里芋の花」「墓案内人」など多数

小浜清志

こはま きよし

1950沖縄県西表島隣の由布島に生まれる
69県立八重山高校卒業と同時に上京
劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める
その後も様々な職を遍歴。
87作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める
88「風の河」で第66回文学界新人賞
「消える島」および「後生橋」で芥川賞候補
小説集『火の闇』（集英社）

八覚正大

はつかく まさひろ

1952東京都生まれ
早大理工学部・都立大仏文科卒
92「十二階」で新潮新人賞受賞
ルポ『夜行の時計』・「父のフレーム」「カウンター」など
教育と文学、心理学と精神分析などを幅広くつなぎながら文学活動を展開
指導精神対話士、学校心理士

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949山梨県生まれ
早大文芸科卒
79『流謫の島』で群像新人長編小説賞受賞
84-90タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴
「東南アジア通信」「アジアウェーブ」編集長
主著に『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』（健友館文学賞）「ノンチャン、NONGCHAN」、『微笑みの国タイ』など

句ってくる。この作者には、肉感の太い筆致がある。それがアメリカの広大な風土と溶け合って、ほとぼしる汗とはちぎれる筋肉の躍動感を醸している。周囲に気がねすことなく、肉体の中の一つの業とも呼べるパワーを全開すれば、ヘンリー・ミラーにも繋がる力感溢れる作風が形作られるだろう。今後のいつその開花を期待したい。

あと「バンザイクリフに沈みゆく夕陽」は、一つの超現実の世界を扱って迫力があつた。ここにあるリアリティは、科学や合理性の世界を越えて、現代のベールを突き破って迫ってくる。こういう世界も私は十分信じるし、大きな価値を見る。ぜひ読者に味わってほしい作品である。またこれと同じタイプの作品として「白嶺の彼方に」も、日常の現象を超えて広がる不可思議な世界を呈示している。山の遭難を未来と過去・現在の時の糸でつなぐ時空の錯綜のリアリティを、不可思議な広がりて展開する。これもひじょうに印象に残る作品だった。

鈴木みい氏の「航跡——沙都子が残したもの——」は、男の手前勝手な側面をよく描くと同時に、逆にそれによって一途な女性の思いが痛切なまでに深く出ていて、胸に響いた。タイトルはやや甘いし、結末ももう一工夫あればと弱さを感じはしたが、女性のひたむきに貫くものを描ききった作品として私は評価した。

全体にタイトルがよくない。タイトルも重要な作品の一



選考会風景

部である。読み終ってタイトルの意味がもう一つ深くわかるようなら、それは成功している作品と言っている。魅力のあるタイトルを考えてもらいたい。

次回も多彩な力作を期待している。

引っ越し

中野睦夫

引っ越して来たばかりの家へもどろうとして、ターミナル駅の長い地下道を歩いている。昨夜からの引っ越し騒ぎで疲れ切り、足を運ぶのもおっくうで、のろのろと歩いている。

それにしてもきょうの叔父たちはどうしたのだろう。いつもなら母にもてなしを強要したあげくに酔っ払ってむだ話に夢中になり、とどまることを知らない。「やはり兄さんにはかなわん。さすがは兄さんだ」などと父をおだてたり、自分たちの無能ぶりを誇張したりして、いつまでも腰を上げない。ところがきょうにかぎって道化じみた振舞いをすこしも見せず、父の前に神妙な顔をならべていた。

叔父たちばかりではない。あの胸くその悪い従兄たちもるようにして改札口へ入って行ったのだ。

叔父たちとは反対に父はひどく上機嫌だった。得意そうに家のなかを案内したあと、ほんのわずかな酒に酔い、固辞する叔父たちに酒を執拗に勧めていた。上機嫌……そうだ。私がこんな軽はずみなことをしたのも、昨夜からつづ

そうだった。私たち一家を腹のなかで馬鹿にしている叔父たちに見倣い、いや、叔父たちよりもっとたちが悪く、酔っ払っているのか、そのふりをしているだけなのか、姉や妹たちを追いまわし、彼女たちが顔を赤らめて嫌がるのもかまわず、淫らなことをささやきかけるのをやめない。そんな破廉恥な従兄たちまでがきょうはなぜか大人しくしていた。

叔父たちのきょうの変わり様はなにを意味しているのだろう。ことがあるたびに押しかけて来て、酔っ払って大騒ぎをする彼らが、母の勧める酒にほとんど手をつけず、一時間ばかりいてそそくさと帰って行った。いつもなら酔った彼らを電車に乗せるのにひと苦労するのに、私から逃げ

いている父の上機嫌がはじまりなのだ。その上機嫌に乗せられ、一家の経営をまかされて以来、どんなにのろまと言われようと、一家の方針を決めるには時間をかけ、熟慮に熟慮を重ね、あくまでも慎重でなければならぬ、という自戒をあっけなく破ってしまったのだ。

独り遊びとはいえ、書く行為には他者との関わり、つまり「私と汝」ということが根底にあるはずで、それを頼りにすれば、多くの人に読んでいただけるのは望外の喜びであることに思い至り、この希有な機会を与えてくださった『文芸思潮』のスタッフの方々、審査に当たられた方々に、いずれ身に染みて感謝することになるだろう、そう考えはじめていた。

銀華文学賞

受賞の言葉

中野睦夫

小説を書きたいと思いつづけ、実際にすこしは書いてきたつもりなのに、けっきょく、小説を書くということがどういふことなのか、自分にはよく理解できていないらしい、という結論にたどり着いた。そしてそのあとは、こうなっては、好き勝手な独り遊びに徹するしかない、と考えを変えた。独り遊びだから、どのように書くかと、誰にも文句は言わせないと、非才を棚上げにして、居直ったことになる。

ところが今回、その独り遊びに賞をくださるという。ちよつとあわててしまった。同人誌に加わらず、したがって誰かに読んでもらうこともないので、独り遊びにとっぷりはまり込んでいて、そこから出て来るものなど、客観的な目に耐え得ないだろう、そう思っていたからである。電話をいただいたときも、まず頭に浮かんだのは、あのままでいいのだろうか、という心配であった。

それでも、時間が経つにつれて、このような心配とはべつに、



なかの むつお

1936(昭和11)年 新潟県生れ
69歳
福井県若狭高校卒
会社員、古書店従業員、郵便局臨時職員など数々の職業を経る
現在は無職 神奈川県横浜市在住

どうしてこんなことになったのだろう。もちろん、一家の経営をまかされたとはいえ、できるかぎり父が望むようにしよう、それがあとを継いだ者の配慮でなければならぬ、かねてからそう心に決めていたからだ。わが家がきょうまで時代の流れに逆らって家長を中心とした家を守って来たのも、父の長年のがんばりのお陰であり、その父を蔑ろにすることなど許されない、そう考えていたからだ。しかしこんどにかぎり、父の言動を無視すべきだったのだ。すくなくとも、父のなかでなにが起こっているか、父がどのような状態にあるか、冷静に考えるべきだったのだ。そうすれば、下見もせずに引越すなどという軽率なことはしなかったはずだ。

私たち一家はいまでは珍しい大家族で、きのうまでせまい家にすし詰めになっていた。せめてもう二間か三間ある家へ移りたいというのがかねてからの願ひであり、家族のあいだでたえず繰り返される話題だった。だがそれは、いわば夢にちかひ願ひであり、これまでいちども具体的に引越しが検討されたことはなかった。いくらせまくても、私たち子供にとっては生まれ育った家であり、父や母にしてみても、住み慣れた家を見捨てて、よその土地で余生をすごすなど思いも寄らなかつたはずだ。それなのに一日が経つたいま、私たちはこうして見知らぬ町に来ている。それはこういう成り行きだった。

ならば、そこから説得しなければならぬ。そこで、荷造りをする父につきまとい、引越し先がどんなところなのか、どういう経緯でこういうことになったのか、必死で聞き出そうとした。父も隠そうとしたわけではない。荷造りに忙しいのと、興奮して十分に話がでなかつただけで、私がかろうじて知り得たのは、つぎのような経緯だった。

なんでも父のその知合いが家の持ち主である女性を知っていて、きのうたまたま紹介された。そして初対面の席なのにその女性と意気投合し、それは気の毒だ、ちよūdどよい空き家があるのでぜひ使ってくれ、ということになった。しかも大家族がひとり一室ずつ占領してもなお余るといふ部屋数、ただ同然の安い家賃、ターミナル駅に地下道でつながる便りさ、どれをとつてもこれ以上は考えられない好条件だ……。

もちろん私はそんな話をにわかには信じたわけではない。裏になにか面倒な問題があるはずだ、そう思った。だいいち紹介したその人物も、父にそんな知合いがあるなんていちども聞いたことがない。その人とその女性の繋がりもどういうものかわからない。なによりも父に、そのような女性に気に入られるとか、意気投合するとか、そんなことが起こるとはとても考えられない。

それなのになぜ私はその話を信じて引越すことに決め

仕事をやめてひさしい父は、きのうめずらしく知合いに会うと言つて外出し、夜おそく帰つて来た。そしてすこし酒に酔つていた父は、玄関に入るなり、あす引越しをするぞと宣言した。もちろん私たちは冗談だと思つた。近ごろの父はなんでも自分ひとりで決めたがるのだが、いくらなんでも引越しなどという大事なことをひとりで決めるはずがないからだ。しかし興奮している父は、引越しを宣言すると同時に、おどろいて質問を浴びせる母や私に取り合わず、自分の持ち物をまとめはじめ、私たちは呆れ返つて、そんな父をしばらく見守つていた。ところがそのうちに、父の興奮が乗り移つたみたいだに誰からもなく、家族みんなが自分の持ち物をまとめはじめたのだ。誰よりも反対してしかるべき母までもが、弟たちに手伝わせて荷造りをはじめたのだ。

これはいけないぞ。父の怪しげな言動に左右されてはとんでもないことになるぞ。私はそう思つて着くなつた。身体の衰えがそれほど目立つわけでもないのに父が仕事をやめたのは、ふだんの振舞いではわからないが、仕事の上で信じがたい間違いを犯すようになったからで、父の言動はまったく信用できないのだ。私は必死になつてやめさせようとしたが、誰も手をとめなかつた。こうなつては、引越し先がどんなところなのか、どういう経緯でこのようになったのか、父から聞き出し、ひとつひとつ疑問を

たのか。そうだ。その女性、父が「伯母さま」と呼んでゐるその女性のことを聞いたとき、私のなかでなにが狂つたのだ。家主であるその得体の知れない「伯母さま」が私を魅了したのだ。本人は気づいていないが、父がその「伯母さま」にすでに籠絡されていることがわかり、そのことが私を狂わせたのだ。つまり、私ならその女性に対してはつきりした意識でもって戦いを挑むことができる、その戦いで十分に勝算がある、そう思つたのだ。そして気がつく

と、自分でも荷造りをしてゐたのだ。なんと慌ただしい引越したつたろう。興奮したままの父は自分のことしか頭になく、母と姉は細々としたことにかかりつきり、大きな荷造りや運送屋の手配など、なにもかも私ひとりしなければならなかつた。昨夜からの騒ぎを思い返すと、気が遠くなりそう、まる一日経つたいま、こうして見知らぬ町に来ていることが信じられないくらいだ。日暮れに着く予定が夜になり、ようやく荷物を運び入れ、家のなかを見てまわり、荷を解く気力もなく坐りこんでいるところに叔父たちがやつて来た。そしていま、叔父たちを駅の改札口まで送つて、新しい家へ帰ろうとしているのだが、すでに真夜中になっている。

いま思い出したが、私はきょうみごとな日没の光景を見た。徹夜の荷造りで疲れ切り、トラックの助手席でうとうとしていたときのことだ。ふと目を開けると、トラックは

都心を横断する高速道路を走っていて、正面からつよい夕陽を浴びていた。都会の彼方へ沈む太陽は、橙色に縁どられて真っ赤に燃え、その巨大な照明が都会の広がりを超なく照らしていた。私は睡魔に呑みこまれそうになりながらも、茫然として見惚れていた。夕陽へ向かって高速道路を走りつづけるトラックは、そのまま宙へ浮き、太陽へまっしぐらに驚進して行く、そんな妄想さえ浮んだくらいだ。

さらに私は夕陽のひろがる空の一点に目をとめた。薄く桃色に染まった雲がぼっかり浮かび、その下のあたりになにかがきらきらと銀色に輝いているのだ。それは十五、六個あって、雲へ挑むようにつぎつぎに飛行を繰り返しているのだ。私は神秘的な光景を目撃しているような感動をおぼえた。軽飛行機らしいとわかって、その弾むような上下運動に胸を打たれてうっとり眺めていた。そのあいだもトラックの振動に心地よい眠りに誘われていたが、太陽や雲や飛行物体、そのすべての動きと色彩が遠い過去に眺めた記憶の光景であって、それを夢で反芻している、そしてそのおなじ夢のなかで、夕陽の輝きとその翳りに波立つ都会がいま徐々に傾き、地中へ没して行こうとしている、そんなふう思えてならなかった。

それにしても、郊外に新しくできたこの町はなんと奇妙なところだろう。荷物を積んだトラックが高速道路を降りて地下道へ滑りこんだときはじめて引つ越し先がビルなの

かにあることを知ったのだが、その家から地上へ出ることなしに長い地下道を通ってターミナル駅にたどり着ける。

そしてクモの巣のように張りめぐらされた地下の町は、真夜中なのに、どの店もあかあかと輝き、飲食店は満員の客でにぎわい、通路はごった返している。いったいこの町にどういう人たちが住んでいるのだろう。人々は真夜中の地下街をこともなげに歩きまわっていて、眠ることを忘れていた。夜と昼とを分かたず感覚が奪われたこの町の住人にとって、陽の光は想像上の存在になっている、そんな気がするくらいだ。

それだけではない。なんとも奇妙なのは、巨大な地下ターミナル駅と、まわりの地下街だけで成り立つ町であることだ。着いたときすでに陽が落ちたあとなので確かめたわけではないが、駅の周辺は区画整理が完了しながらも、町ができる順序が従来とは異なり、この地域一帯はまだ荒れた畑のままなのだ。ところが住民のいないはずのこの町は、真夜中になってもこの賑わいだ。まだ二、三本の地下道しか知らないが、左右の店はどこも人でいっぱい、通路もごった返している。若い人たちだけでなく、あらゆる年代の人たちが、まるで外国へ旅立つために空港にいるみたいに、異様な熱気で地下の町を徘徊している。

けれどもいまは、町のことをあれこれ考えている余裕はない。というのも、いま帰って行こうとしている新しい家身をやだねる覚悟をしたのだ。ただその際生じた過ちは、それが父ひとりの身の処し方であつたはずなのに、家族全員が引き入れられたことであり、私もそれに加担してしまつたことだ。

は、この町に劣らず異様なのだ。いったいあれを家といえるだろうか。きのうまでの小さな一軒家とはあまりにちがつているので、住まいについての概念を一変しなければ、とても住まいとはいえないだろう。荷物といっしょに運びこまれたとき、トラックがそのまま地下道へもぐり込んだので、ビルの外観を目にする機会はなかったが、降ろされたところはコンクリートが剥き出しのひんやりとした通路で、鉄の扉が待ち受けていて、そのなかで私たちの新しい住まいだったのだ。つまりあの家はビルの地階であつて、扉一枚でターミナル駅へ通ずる地下道につながっているのだ。

引つ越し先があのような奇妙な家であることを父は知っていたのだろうか。いや、知らなかったのだ。父は着く早々に、窓がない、窓のない家など家ではない、と騒ぎ出したが、部屋がたくさんあるということのほか、引つ越し先がどんな家なのか確かめなかったことを暴露したのだ。それなのに父は、裏切りだ、騙された、いますぐもとの家にもどる、とわめき散らし、荷物を足蹴にしたりした。

それでいて父は、騙した張本人であるはずの「伯母さま」にひと言も触れなかった。ということは、あまりに異様な家なので怒りに駆られたのだろうか、父はすでに、ここに住み着くしかない、そう腹のなかで覚悟をしているのだ。つまり、引つ越しを決めたとき、どのような運命にも

いずれにしても父が動揺したのも無理はなかった。私自身、こんなところで生活ができるだろうかかと暗然とした。庭に向かつて三方が開け放たれ、いつもどこかに陽が射しこむ家、障子や襖を開け放てばむしろ風通しが良すぎる家、そんな家に住み慣れた私たちに、窓のない家の生活など考えもおよばない。だいたい、部屋に窓がなければ、身体をどちらへ向けていいのかわからないし、入ったとたんに、もう出ることもしか考えられなくなる、そんな気がしてならない。ともかく父の動揺を静めなければならなかった。父の怒鳴り声に肝心の母はおろおろするばかりだし、小さな弟や妹たちはおびえ荷物の後ろで姉や上の妹たちに抱きかかっている。近ごろの父は母のいうことにまったく耳をかさず、動揺が長くなると、収拾がつかなくなるのだ。

ところが父の動揺はすぐおさまつたのだ。弟たちふたりが隣りの部屋から大声で呼ぶので、何事かと駆けつけると、そこはロビーのような細長い部屋で、ひろい壁一面が黒いパネルのようなものに覆われていて、弟たちはその隙間から外を覗いていた。そしてふたりは、私たちが入って行くところ、その黒いパネルのようなものをカーテンを開けるよう

に左右にひろく引いた。するとそこに庭が現れた。

私たちは目を見張って喚声を上げた。きのうまでの猫の額のような庭とは大ちがいのひろびろとした庭だ。木々が生い茂り、あいだを通して遠くまで見通せる。いろんな形の花壇に見たことのない花が咲き乱れている。だが私たちが感嘆したのは一瞬にすぎなかった。壁一面のガラス張りの向こうにある庭は、ホテルのロビーとかレストランなどによく見かける模造の庭なのだ。遠近法と照明を巧みに利用しただけの、おそらく四、五メートルしか奥行のない、ただのコンクリートの壁の隙間で、スクリーンに映し出された庭と大差ないのだ。そのことは父をはじめ家族みんなもすぐに気づいたが、誰もそれを口にしなかった。さしあたって父の機嫌がなおることが大事なのだ。父自身、感情を制御できなくなることがあつて、自分でもとまどっているのだから。

私は父の動揺がおさまってほつとした。そうでなくとも今夜じゆうにしなければならぬことがたくさんあつて、父の我儘にかまっておれないのだ。必要最小限の荷を解かなければならないし、なによりも明日の朝ここから出勤する姉とふたりの妹のために、それぞれの職場までの通勤路、電車乗り継ぎや所要時間など詳しく調べなければならぬ。それを地図にして持たせてやらなければ、彼女たちはどうして職場にたどり着けない。というのも、身体があまり丈

供のような目で見ている。私の家を訪れる人たちが、下の三人を姉が私の子供と思ひ違ひをしても、訂正しようとしていない。母も近ごろは、自分の子はこの三人だけだと言わんばかりに、ほかの子供の面倒をみようとしなない。

このようなわけで、私は自分がどれだけ多くの問題を抱えこんでいるか、そのひとつひとつをどのように処理しているのか、考えただけでも足がすくんでしまう。たとえば、すでに婚期を逸している姉、結婚に必要な若さを日に日に失い、姉とおなじように婚期を逸しつつあるふたりの妹。

彼女たちのことを考えると、胸のなかを冷たい風が吹き抜ける。間数の多い家に住むことより、彼女たちに適当な相手を見つけ、家から送り出してやるのが先決なのだ。それなのにあんな大きな家に引越してはかえって出費がかさみ、彼女たちの給料を当てにしなければならず、家にしぱりつける結果になりかねない。というのも、長男である私は軸物の表装という先祖伝来の仕事を継いでいるが、父がまったく働かなくなつたいま、ひとりではとても一家を養うだけの収入を得ることができないからだ。

といって、私が外へ働きに出るわけにはいかない。長男が一家の経営に専念するというのがわが家の掟なのだ。この世の中に家というもの以上に価値のあるものはなく、長男に生まれた者は家を守ることを唯一仕事として、それを最優先させなければならないというのが、わが家の掟なのだ。

夫でない彼女たちは、働きに出るだけで一日の体力をほとんど消耗してしまい、家では食事と睡眠を取るほかにもしない習慣が身につけているので、誰かが面倒をみてやらなければならぬのだ。ところが近ごろの母はすこしも頼りにならない。母は下の三人、小学校へ入ったばかりの妹と、やつと歩き出した双子の弟と妹にかかりきりなのだ。もちろん父に姉たちの面倒をみてもらうわけにはいかない。そこでけつきよく、それは家長としての私の仕事になっている。けれど母とふたりの妹の面倒など男の私にはひどく厄介で、いくら気持をこめても彼女たちを満足させることはできない。彼女たちも私もしばしば途方にくれてしま

う。こうした問題が生じたときいつも思うのは、父と母の家族計画はどうなっていたのかということだ。私をふくめて上の六人の子供と下の三人の子供は兄弟でないみたいで、したがって私は父からふたつの家族の経営を譲られたようなものだ。一方の家族は気儘な父と無気力な姉とふたりの妹、それに上のふたりの弟たち——中学生だからもう手はかからないが、といつても、まだ私を助けてはくれない——の六人。もう一方は、父の気儘のせいでもおどおどしている母を中心とする、まだほんの小さな生き物といった、小さな妹と双子の弟と妹の四人。実際、父は下の三人の子供を自分の子供とは思っていないらしく、よその子

だ。これは代々受け継がれてきた掟で、私の意志に関わりなく決められたことなのだ。だから、一家を守らねばならない立場の家長が、十時間以上も家を空けなければならぬ以外の仕事につくなどということは思案の外なのだ。そのようなことになれば、一家の中心である家長が外の空気に犯され、家のなかに吹きこむ隙間風が感じ取れなくなり、やがては外と内との区別する感覚が麻痺し、その結果、その家はいずれ内側から崩れ落ちてしまう、というのが先祖からすこしも変わらぬ考えなのだ。

もちろん子供のころ私はこの掟に反発した。よその家ではそんなことはまったくない。家長だつてみんな外へ働きに出ている。それなのに家は壊れてはいない。むしろ私の家のほうが異常ではないのか……。けれどいまは、一点の疑念もなく、先祖から受け継いだ掟を信じ、それを信念にしている。一家の経営に専念すればするほど、家というものがあるがどんなに多くの危険に晒されているか、したがって家を守ることがどんなにやり甲斐のある仕事であるか、これ以上になく理解している。

たとえば、表装の仕事しながらも一日じゆう家のなかを歩きまわっている私は、外から見れば遊んでいるように見えるだろう。だがそれは、すでに崩壊してしまつた見せかけの家をうまく経営していると思ひこみ、家というものの本質を理解できない人たちの目にそう映るだけのことだ。

家を守るという精神においては、私はけつして怠けてはいない。家を押しつぶそうとする外圧をつねに感じて、内側から必死で押し返している。目に見えない怪物である外圧の侵入を阻止しつづけるのは途方もない戦いであり、おなじ立場にない以上は、とても理解できることではない。

たいていの人は、観念に凝り固まっているにすぎないと押搦する。そのことは私もよく承知している。事実、自分でも観念的だと思っている。けれども、ほかのことは知らないが、家を守るということにかぎって観念的すぎるといふことはない。なぜなら、現実につきつぎに起こる細々とした問題をひとつひとつ具体的に処理しなければならぬこの仕事に情熱を燃やしつづけるには、気負いすぎているとか、偏っているとか、そうした非難を浴びるくらい観念的であってはじめてそれが可能になるからだ。もちろんそうした非難に耐えるのもこの仕事の大切な一面であることはいままでもない。

このようなわけで、姉たちの給料をまったく当てにしないというわけにはいかない。いまでは父も母も家計のことにもまるで気を配ろうとせず、私ひとりでも悩まねばならない。軸物の表装の仕事は長年のあいだ組合からまわって来るものだけを手がけてきたので、自分で仕事を取ってくることもならず、それに先祖代々、最上級の仕事をすることになっているので、複雑な仕事を請け負うわけにはいかない。

できず、まして結婚へ発展する可能性をはらんだ女性とめぐり会う機会もない。このままでは、どんな女性にも相手にされなくなる。毎晩家族が寝静まるのを待って寢床に入り、眠りにつくまでの三十分から一時間を自分だけの時間に当てているが、きまって空想するのは世間へ出て大勢の人に交わり、自分の能力にふさわしい成果をおさめるという夢だ。もちろん表装の仕事しか知らない私に世間に出て成功する能力があるとは思えない。それでも、もしかすると、その職場の人間関係のうえで抜群の能力を発揮できるのではないか、そう思うことがある。つまり、上役や同僚に囲まれたとき、その人たちひとりひとりの性格や立場や能力を細かく観察し、それにふさわしい配慮で対応できるのではないか、それを試してみたいという夢だ。

けれどもこの夢は叶えられることはない。家長にとって世間というものは、家の外の広がりであるとか、他人の人間の集まりであるとか、たんにそうしたものではなく、極端な見方をすれば、敵対するものの領域であって、そこに踏み入れることは敵に身を売ることであり、守るべき家を裏切ることなのだ。だから家長にかぎって、その誘惑に屈することは最大の罪であり、自己放棄なのだ。それでも世間に出て自分の能力を試したいという誘いはあまりに強烈なので、毎夜寢床のなかでそれを空想に押しとどめ、その誘いをねじ伏せ、窒息させるしかない。

それなのに父は姉たちに、結婚費用を全額は用意してやれない、半分は各自の給料から蓄えるがよい、などと呑気なことを言っている。実際はそれどころでなく、姉たちの給料がなければ、明日の生活にも困るありさまなのだ。姉たちは協力してくれているが、彼女たちの先々を考えると、暗澹とせずにおれない。彼女たちが虚しい労働でしかない無気力になるのではないか、そうになったら、私の家長としての務めにどんな意味があるのか、そう思わざるを得ないからだ。

これもみんな、収入の少ないかわりに、七十歳八十歳になってもできる表装という仕事を父が五十歳になるかならないかで中断したことが原因なのだ。ふたりの稼ぎを合わせてようやく生活を維持できる家計なのに、私ひとりではどうにもならない。この悩みを解決するには、かろうじて二十代にとどまっている私が、ふつうの二倍も三倍も収入のある仕事を求めて外へ働きに出るしかない。そのとき姉たちは、自分の給料を自由に使うことができ、それが彼女たちに気持の余裕を与え、結婚相手に出会う機会も生じて来るというものだ。

正直にいうと、このような家計の困窮もあって、もちろんそのためだけではないが、私は外へ働きに出ることを夢見ることがある。家に閉じこもりきりでは、友だちひとりそれにしても、身体のみならず、精神的にも姉や妹たちを職場へ駆りたてなければならぬのはやはりつらいことだ。夕方疲労で青ざめて家にたどり着く彼女たちを胸を痛めずに迎える日は一日もない。いつそのこと、自分が望んでもいることでもあり、外へ働きに出ようと決心しかかることもある。そうすることで彼女たちを苦役から解放してやり、嫁ぐ準備をさせ、その結果として子孫が枝葉にひろがるよう計るべきではないのか。家を守るとはそういうことであり、私はむしろ家長としての義務を怠っているのではないのか。私こそ家を没落させようとしているのではないのか……。

もちろんこのような考えは、私の弱さを突いて一時的に襲う迷いにすぎない。代々受け継ぎ、いま私の信念になっている家長の務めは、子孫の繁栄を目的にしているのではない。たしかに家族の日常生活がつねに無事であるようにと願い、可能なかぎりそうしようと努めている。だがそれは、家庭と称するまやかしの家を運営しようとしているのではなく、また子孫が殖えることを願ってそうしているのではない。

そうではなく、子孫の繁栄はあくまでも結果であり、二次的な問題にすぎない。家長の務めは精神の中心軸である家という概念をあくまでも守り通すことなのだ。この概念なくしてはただの家という家の脱け殻に墮ちる、そうし

た中心軸をあくまでも存続させようと日々の新たな決意をすることなのだ。この中心軸、家長がその根もとに踏み止まり、みずからの命を縛りつけておくことで見失われず、すむこの中心軸がなくなったら、どういうことになるか。

いずれはかならず必要になるはずの、そして過去へとさかのぼることでそれが可能になるはずの、真の人間性への復帰の手がかりが完全に失われてしまうのだ。そうなったら、過去とのつながりが途絶え、先へ先へと駆りたてられ、未知の領域に一変する外の世界へ投げ出されてしまうのだ。

そうならないよう、家長がその中心軸を保ちつづけていればこそ、家族は各自がそれぞれに移ろいやすい外の世界と接触でき、そうすることで生きる意味を未来につなげることができるとだ。したがって、外の世界との接触を制限されている家長自身は、生きる意味を未来につなげることが拒まれていくのだ。外の世界から断絶された内側にとどまり、中心軸を守りつづける家長は、生きていく意味を積極的に確かめることを断念しなければならず、後ろ向きのみままで未来に備えねばならないのだ。

このようなわけで、私にとって家族の現在の状況のことさら悲しんだり、家計の破綻を怖れたりすることは、本来の義務を疎かにしている証拠であり、姉と妹たちを犠牲にしているなどというのは、迷いから来る感傷にすぎない。そのような感傷におぼれて私が外へ働きに出るようなこと

この地下の町ではすべてが終焉へ向かい何倍もの速さで処理されている、そんなふうに見えるならない。いったいこの町ではどんな生活が営まれているのだろう。いや、どんな生活が営まれていようと、家という概念がなければなんの意味もない。家を失った人間の吹き溜まりにすぎない。家どころか家族さえなく、したがってどんな喜びもない労働と虚しい飲食を繰り返すしかない。つまり、いつそう早い終焉を求める人間のための町でしかない。そうでなければ、真夜中にどうして地下道をさまざましているのかわけがわからない。

ところが私たちの新しい住まいは、その異様な町にドア一枚で接しているのだ。あのドアから侵入するこの町の現象を私ひとりでは阻止できるだろうか。いかにも穏健な隣人たちに囲まれたきのうまでの家にあつてさえ、外部から侵入するものをかろうじて阻止していたのに、この町と一体化したようなあの新しい家で、それが可能だろうか。家という概念を守りつづけてきた私たちにとって、父の妄想と錯乱に乗じ誘い出されたときかいいいようのないこの引越は、いわば自滅行為ではなかったのか、そんな不吉な予感がしてならない。

こんなとき以前のように父を頼りにできたら、どんなに心強いだろう。いまの父は、まるで頼りにならないばかりか、私のいちばんの重荷なのだ。どうしてこんなことにな

になれば、保つべき家という概念の中心軸はたちまち朽ち果てるだろう。そしてその結果、家族はばらばらになって外の世界へさ迷い出したあげく、どのような庇護もなくなり、虚無の風に吹き晒しになってしまおう。

駅から遠ざかったせいか、地下道は薄暗くなり、湿っぽい感じになっている。それでもまだシヨウウィンドーに代わって、手垢のついた扉がならび、労務者ふうの男たちが盛んに入入りしている。酔っ払いが壁づたいにのろろと歩いていたり、わけのわからない声を発して地下道にひびかせている。

さつきから気になっていたのだが、叔父たちを送って行ったときこんな荒れた感じの地下道を通ったかどうか、記憶がはっきりしない。どこも見憶えがなく、路に迷ったように思われる。それなのに、あの家があるビルの名前をまだ知らないのだから道が訊ねようがない。ターミナル駅の地下道ではよくあることだが、まるでちがった方向へ向かっているような気がしてならない。だが、あまりに疲れているので、立ち止まってあたりをよく見まわす気力もない。これでは、偶然にあの家の地下道に接したドアに行き当たらないかぎり、ひと晩じゅう歩きつづければならない。それにしても、この空気はどうしてこんなに重く濁っているのだろうか。あらゆる臭気が入り混じり吐き気がする。頭がぼおーとして極端な妄想に誘われそうだ。そのせいか、

ったのか。私たちが先祖代々家という概念を守りとおして来たのは、家長を支柱にした家族の団結の成果だったのに、肝心の父に異変が生じたのだ。あれほど変化を嫌い、ものごとには慎重だった父が、二年ほどまえから思いがけない軽はずみな行動に出て、家族をおどろかすようになったのだ。たとえば、とつぜん自慢の盆栽や庭木を引っこ抜いて赤土を運び入れてのつべらぼうな庭にする、と思うと、家主の許可もなしに家の外壁を青ペンキで塗りつぶしはじめ、私たちがあわててやめさせるといふ始末だ。

そんな父を見ていると、父の頭のなかでなにが起こっているのか、見当もつかない。たしかに以前から独善的なところのある父は、急に思い立って行動へ移すことがあった。だが一方では、気の弱さもあつて家族に相談してから実行にかかるのが常だった。ところが最近はいきなり奇妙な言動に出て、私たちを面食らわせる。しかもそれは、それまでその衝動を押さえていたかのように、家長の地位を私に譲ったのと入れ代わりになつたのだ。

もちろん家長の地位を引き受けた以上、私は父を頼らず、自分の判断で家を運営しなければならない。そのことは心得ているつもりだ。けれども私が父から引き継いだのは家長の地位というだけではない。この世に残されている唯一の中心軸、家という概念であつて、その概念を守るために生涯を賭けて戦いつづければならない。それなのに、

わけのわからない欲望を満たそうとして家や家族がどうなつてもいいというような父の振舞いに出喰わすと、目の前が真っ暗になる。父の頭にはすでに家という概念がなくなり、それに代わつてなにか得体の知れない衝動が居居わつたのではないか、そう思うと、父を一室に閉じこめるのを怠っているような気持ちにさえる。

いや、それだけではない。あのような父を見てみると、私自身、いつか父とおなじ経過をたどり、おなじように気儘な思いつきや衝動に捉われるようになり、生涯を賭けて守ろうとしているものをみずから打ち壊すことになるのではないか、そんな不安に駆られる。そして、これ以上この不安を強めないためには、父の姿を見ずにすむよう彼を一室に閉じこめるべきではないのか、と思う。きのうまでの家ではそのための部屋はとも望めなかったが、あの新しい家にはそのための部屋はいくらでもある。といって、父はまだそれほど老いているわけではない。子供だつて、いちばん下の双子の弟と妹は、自分たちの父親と兄である私の区別がつかないほど幼い。それなのに、世間の一般の現象とは反対に、老いがこんなにも足早にやつて来て父に取り憑いたと思うと、私は暗然とした気持ちになる。

ところが私は、その父が外で拾つて来た引越し話にたわいもなく引きこまれてしまったのだ。せめて下見をし、家主である「伯母さま」に会い、十分に話を聴くべきであ

つたのに、それさえ怠つたのだ。家長としてこれくらい軽率なことがあるだろうか。家を守るといふことのなかには、住まいがどれほど大きな要素を占めているか、十分に承知していたはずなのに。といふことは、私のなかにもすでになにか異変が起こっているのだろうか。母までがこの引越しに反対しなかつたばかりか、自分から荷物をまとめはじめたことでも明らかのように、私たち一家は、部屋数がすくないという不満ではなく、なにかもつと根本的な原因があつて、前へ押し出されるしかなくなつていたのであろうか。だが、そうだからといって、あえてビルの地下にある住居へ引越す理由はなかつたのだ。

けれどもいまさら悔いても仕方がない。こうなつては、一刻も早くあの家に慣れるよう努力しなければならぬ。家に着きしだい家族を寝かせ、夜を徹して家のなかを隈なく調べてみなければならぬ。といふのも、ひどく厄介な家引越して来たとしか思えないからだ。たとえば、これもそのひとつだが、窓がないと騒ぎ出した父の動揺がおさまつたと思うと、母が小さな子供たちを連れてうろうろし、トイレが見つからないと泣き声で訴えはじめた。ようやくわかつてみると、家の外へ出て地下道の端にある公衆トイレを利用するのだという。それを聞いて母は坐りこんだ。小さな子供たちはそのつど連れていかなければならぬいし、姉たちも夜ひとり地下道へ出るのを恐がつている。

このようにトイレのことだけでも私の心配はやまない。

それになによりも厄介なのはあの家の広さだ。ひとりが一室ずつ占領してもまだ余りあると父は言っていたが、とてもそれどころでない。しかも廊下にそつてならんでいるとか、広間のまわりに配置されていりかなくともかく、どの部屋もそれぞれ二つも三つもあるドアだけでつながら複雑に入り組んでいる。そんな部屋のなかにいる自分に気づいて、そこから出ようとすると、どのドアを開けていいのかわからない。それらしく思えるドアを開けてつぎの部屋へ入ると、やはり見当ちがいの部屋で、おなじようにいくつもドアが待ち受けている。その結果、引き返すか、さらにつきぎのドアを開けて進むか、考えこまねばならず、そんなことを二度三度繰り返しているうちに、すっかり方向感覚を失い、あとは偶然を当てにして片っ端からドアを開けて突進するほかなくなる。

もちろん実際はそんなに多くの部屋があるわけではなく、引越して来たばかりの心細さが錯覚や戸惑いを起こさせぬのだらう。けれども、二、三時間経つても間取りが呑みこめないのは、やはり複雑に入り組んだ間取りになつていからで、すくなくとも心理的な恐怖を与えずにはおかない。げんにそのことに気づいた母や姉たちは、家のなかを歩きまわるのをやめ、一室に閉じこもつて動こうとせず、ここで固まって暮らそうと言ひ出したくらいだ。

私自身、別の意味で不安になつた。あのような奇妙な間取りの家では、これまでのような考え方で家を守りつづけるのは不可能ではないのか、きのうまでは家の内と外という区分けですんだが、それ自体が外であるかのような、それでいて部屋の奥にまた部屋があるような家では、これまでとはまったく別の考え方を強いられるのではないのか、そう思つたのだ。実際、あの家と私たち一家はあまりに不釣り合いだ。家具類に例をとれば、まさにそうだ。私たちの家具はどれもみんなこじんまりとしたもので、あのような天井の高い、がらんとした家のなかでは、ひどくみすばらしく、滑稽にさえ見える。家族のひとりひとりが自分の部屋を持つても、これまでどんなに大切にしかわからぬい持ち物が、ひろい部屋の隅に置かれると、がらくたに見える。せめて窓でもあれば、そこにカーテンを吊り、その下を居場所にきめ、持ち物の配置もそこから調和するように工夫すれば、部屋の余分の空間に徐々に馴染めるかもしれないが、その窓さえなく、目に入るのは、高い天井のほか、ひろい壁と複数のドアばかりだ。

それに、それぞれが自室で寢床についても、大きな空間のしかかり、安らかな眠りに身をゆだねることができないかもしれない。何時間もひとり目を覚ましていなければならず、そうなると、家族ひとりひとりの心にどんな異物が生ずるかかわかつたものではない。そしてその異物は、

私にとって新たな敵の出現ということになるかもしれない。いや、新たな敵である異物はすでに出現している。いちばん犯されやすい父のなかにすでに巢食っていて、猛威をふるいはじめている。

あの大きな食堂を見つけたとき、そのことがはからずも露見した。そこには二十人は席につけそうな大きなテーブルがあつて、父は、豪華な晚餐の光景でも頭に描いたのか、あすからはここで食事をすると行って大はりきりだった。きのうまで台所の板の間で小さな食卓を囲んでひと皿に盛りつけたものを小鳥みたいに突つき合っていたのに、あのような広大な食堂でどんな食事をしようというのだろうか。だいいち調理場までいくつもの部屋で隔てられ二、三度往復するだけで母は動けなくなるだろう。それにその調理場だが、そこへ踏み入れたとたんに母が絶望的な声を発したのも無理はなく、母が見たこともない立派な流し台は、小柄な母の胸より高くても使えそうにない。

それなのに父は、そんなことはおかまいなしで、母がどんなに泣いて訴えようが、また私たちがどんなに反対しようが、言い出したことはいちどは実行せずにはおかないだろう。たしかにあの家には父をこのように理解不能な考えに引き入れるあらゆる要素がそろっている。備え付けのダブルベッドを見つけたときもそうだった。母を呼ぶ父の大声にみんなで駆けつけると、寝室のまん中にすえられた大

一体になつて思えるからだ。

それにしても、着いてすぐ姿を見せたあの「伯母さま」は何者だろう。あの家のもつと下の階に住んでいてどこかにある階段を登つて現われたのだが、私はその姿を見て茫然とした。「伯母さま」は裾の長いまつ黒なガウンのようなもので堂々たる体軀をつつみ、ピンク色の素足に銀色のサンダルをはいていた。角張つた顎、くつきりとした鼻筋、大きな口と黒い目など、顔はどこもみな、異様な強靱さを見せていた。髪だろうか、左右に丸くふくらませた豊かな髪の毛との対比で、顔は白い大理石のように見えた。ところが、そうした派手な容貌にもかかわらず、すこしも華やいだところがない。むしろ陰気な印象さえ受けたくらいだ。いずれにせよ、魁偉といつていい容貌に私は茫然として見惚れたが、一方ではつよい疑問に捉われた。

この「伯母さま」がターミナル駅の地下街に接したビルの地階をそつくり、初対面の父にただ同然の家賃で提供したのは、どんなもくろみがあつてだろう。相手が父のような人間だからこそ目をつけ提供を申し出たにちがいないが、そうであるとしても、すくなくとも「伯母さま」の側では父からすでになにか担保を取りつけていると考えるほかにない。けれども、日々の生活にさえ事欠く私たち一家から、どんな利益が引き出せるというのだろうか。それともこの突然の引越は、父のあまりに早い老いと、この「伯母さ

きなベッドに父は長々と寝そべり、今夜からお母さんといつしよにここで寝ると得意そうに宣言した。そしてさらに父は、ここに来て並んで横になるよう母を手招きし、代わつて這い登ろうとする小さな弟たちを叱りつけたうえ、母が仕方なくベッドのはしに腰をおろすまで承知しなかった。以前の父なら、想像もつかないことだ。あのような我儘な振舞いに出喰わすと、これからどんな騒ぎが起ころかまつたく予想もつかず、目の前がまっ暗になる。もちろん心配なのは父だけではない。あのような内と外の区別のない家では、母や姉、すぐ下のふたりの妹たちだつて、どのような衝動に取り憑かれるかわかつたものではない。きのうまでの小さな一軒家とおなじに考えていると、ひとりが一室を占居することになるあの家では、気づいたとき、家族みんなが私の手を離れてばらばらになっているという事態だつて生じかねない。いったんそうなると、私が家族ひとりひとりの後を追つてあのひろい家のなかをドアからドアへどんなに必死で駆けまわつても、なんの役にも立たないだろう。

そうだ。どんなことをしても、家族がばらばらにならないよう、あの家の構造を一刻も早く掌握し、隅々まで支配する必要がある。それにはまず、父が「伯母さま」と呼んでいる家主の女性の正体を見極める必要がある。なぜなら、あの家の不可解な広さや複雑な間取りはあの女性の正体とま」の出現のあいだに生じた事態であつて、もつと根の深い問題が含まれている、ということだろうか。もしそうなら、私たち一家の存続に私の力ではどうにもならない決定的な転機が訪れた、そう考えるほかない。

ところで父は、昨夜、「伯母さま」に会つたのはほんどがはじめてだが、青年時代から友人を通じてよく知つていて伯母のように身近に感じつづけて来た女性だ、と言つていた。事実、青年時代とか伯母とかという父の口ぶりは親しみと懐かしさを感じられた。だがそうなると、父の青年時代にすでに「伯母さま」だつた「伯母さま」はかなり高齢でなければならぬ。それなのに、柔らかな黒い布でつんだ巨体を真つすぐ伸ばした様子は父よりも年上とはとても思えず、容姿も母よりも若く見えるくらいだ。いつても、私は四十代とか五十代とか、具体的に年齢を想定したわけではない。そうではなくて、年齢を超越した存在ではないのか、そんなふう思ったのだ。

それはともかく、「伯母さま」が出現した瞬間、私はどうしてあんなにおどろいたのだろうか。そうだ。心の底から震撼したのだ。といつて、恐怖だけを感じたのではない。恐怖を感じるとともに、幼いころいつしよに暮らしたことがあつて、いまふたたびめぐり会つた、そんな懐かしさがあつたのだ。それどころか、そばに母がいるにもかかわらず、これがほんとうの母親ではないのか、というような

考えが頭に浮かんだくらいだ。そしてその途方もない考えのせいで、その一瞬、幼い子供のような気持ちにもどつていったのだ。

「伯母さま」は挨拶も忘れて茫然と見つめる私を目の端に入れただけで完全に無視した。「伯母さま」にとつて私のような観念的な男くらい扱いよい者はなく、ほとんど取るに足らない存在と見做したのかもしいない。だが、そうであっても、簡単に引き下がるわけにはいかない。そういう意味では最初の出会いがひどく大切だったのに、間抜けな子供みたいにぼかんと見惚れていた自分が、いまになって悔やまれてならない。

その軽率さは私ひとりではなかった。なぜか父は「伯母さま」にそつけない態度を見せた。いつもは卑屈なくらい腰をかかめてくどくど挨拶する母までが押し黙ったまま、小柄な身体を反り返らせ、まるで挑むように「伯母さま」をにらんでいた。そのような父と母に対して、「伯母さま」は呆れたというように口もとにかすかな笑みを浮かべていた。つまり、父は「伯母さま」にすでに籠絡された男のかすかな抵抗を見せたのであり、母は父を籠絡した「伯母さま」に対する怒りをあらわにしていたのだ。ということは、「伯母さま」の存在はやはり青年時代から父を支配していたことになり、母もそのことはよく知っていた、ということになる。そればかりか母は、「伯母さま」が父を

こんなにも早く古いこませた原因であり、妻として自分の力でその原因を取り除くことができなかったことを知っているのかもしれない。

いづれにせよ、父と母の無礼な態度は、家長としての私の立場からすれば、いま思い出しても怒りに心が震え出すくらいだ。父と母は私たち一家の運命がすでに「伯母さま」の手に握られていることをまるで理解していないのだ。「伯母さま」の機嫌を損なうようなことになる、いつあの家から追い出されるかわからず、地上から地階へ引越した私たちは、もうどこにも行き場がない。その瞬間からこの地下道の浮浪者の仲間入りをしなければならぬ。そのことを家族によく言い聞かせておく必要がある。

いや、それくらいですまされなくてもいい。きょうのように「伯母さま」を無視したり、敵対する態度を見せたりすることが重なれば、その機会を待ち受けている「伯母さま」に格好のきっかけを与えることになり、「伯母さま」は猛然と襲いかかってくるかもしれない。なぜなら、あのような家を提供され引越して来たこと事態が、「伯母さま」の仕かけた罠に落ちたことかもしれないのだ。あの家のさらに下の階に住んでいる「伯母さま」は、同居人を餌食にする楽しみのためあの家を貸して、私たちのような餌食になりやすい家族に狙いをつけては、引き入れているのかもしれないのだ。

たしかに私たち一家は父の早すぎる老化によって世代交代が狂っている。父はわけのわからない行動に出ることがあつても、すでに意志のある人間としてはまるで意気地がなくなっている。母も姉もそのような父を支える気力をなくしている。中学生の弟たちはむろん、上のふたりの妹たちだつて頼りにならない。「伯母さま」にとつて、これくらい容易に餌食にできる家族はほかにないだろう。そう考えれば、あの入り組んだ間取りは、そのまま蟻地獄だといえるだろう。蟻地獄の底で監視している「伯母さま」は、私たちがあがき疲れてずるずる滑り落ちるのを待っている。

もちろん私はそうやすやす「伯母さま」の餌食になるつもりはない。可能なかぎりあらゆる抵抗を試み、立ち向かつて行く覚悟でいる。これからはじまる「伯母さま」との戦いを思うと、むしろ勇み立つくらいだ。当然、あのような巨体と有利な条件を持った「伯母さま」に正面から挑む力がない以上、ゲリラ的な戦法を駆使しなければならぬだろう。あの大きな身体のまわりを四六時中歩きまわったり、言い訳をしたり、泣きついたり、あるいは弱みを見せておどしたり、あらゆる攻撃を執拗に繰り返すつもりだ。場合によっては、「伯母さま」の住居である地下何階かへお

段だつて辞さない覚悟でいる。もしそうなれば、私の結婚の望みはますます遠退くが、家を守ることが私に課せられた使命である以上、尻込みするわけにはいかない。

ただ、私が恐怖に震える心を抑え切れないのは、「伯母さま」との戦いがすでに無意味になっているのではないかと、という考えだ。「伯母さま」は、これまでに私たちのような弱体化した家族をいくつも呑みこみ消化することであの巨体を保っているのであり、ますます肥大するほかに存在ではないのかということだ。もしそれが「伯母さま」の正体であるなら、私たち一家はすでに内側から崩壊していることになる。つまり「伯母さま」は、父をひと目見たとき私たち一家の末路を見極めたからこそ、私たちをあの家に入れていたのであり、いづれあの巨体のなかに回収することですでに私たちを救おうとしていることになる。もしそういうことなら、私の戦いはすでに意味を失っていることになる。最初、最初に顔を合わせたとき、「伯母さま」が私を一瞥しただけで無視したのも、私を家長としてほとんど力を残してないことをすばやく確認したからかもしれない……

私は足を止めて顔を上げた。見憶えのあるドアの前に立っていた。迷わずに新しい家にたどり着いたのだ。「伯母さま」に惹きつけられているこの身は、迷う心配など最初からなかったのだ。私はドアを押そうとして思いとどまり、

引越す

2006年度 第3回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ● 2006年7月31日現在において45歳以上

応募規定 ●

400字詰原稿用紙50枚前後（20枚くらいのもので可）。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず閉じること。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格とする）④〒住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。

予選通過者には通知し、希望者はインターネット・ホームページに掲載する。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピーも可）。

応募先 ● 〒158-0083東京都世田谷区奥沢7-15-13アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

Tel & Fax 03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ● 銀華文学賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数場合は分割）

優秀作 ■ 賞状・賞メダル・賞金5万円（数名／受賞者複数場合は分割）

奨励賞 ■ 賞状・記念品

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

11月発売の「文芸思潮」14号に予選通過者を発表する

発表 ● 受賞作は2007年1月発売の「文芸思潮」15号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」に掲載する

締切 ● 2006年7月31日（当日消印有効）

主催 ● アジア文化社

※主催者から

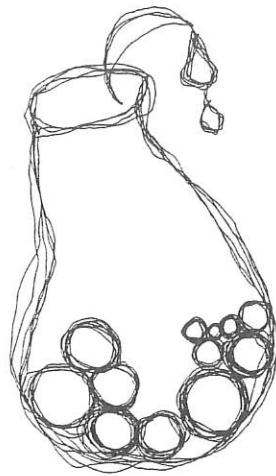
真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。



第1回銀華文学賞授賞式 受賞の言葉を語る最高齢受賞者作品「オネスト」の小沢恭さん

すこし引き返した。公衆トイレのわきに階段があるのが目に入って、町の夜景をひと目見ようと思いついたのだ。せまい急な階段を登って行くと、下から照らす地下道の明かりが届かなくなり、かろうじて見分けられる明かりになった。どこにも通じていない、行止まりのコンクリートの天井が待っているのだろうか。そう思いながらもさらに登ると、ふいに新鮮な空気が感じられた。おどろいていったん足を止めてから、こんどはゆっくりと残りの五、六段を登り、おそるおそる外へ顔を出してみた。するとマンホールから首を出すような格好で、首から上が外気に触れた。けれども町の光景どころか、街灯の明かりさえ見えな。目の前の雑草や石ころが見分けられるほかは、首をめぐらせても、ビルはおろか、どんな建物の影も見えず、荒地を闇が覆っているばかりだ。ということは、ここは地下だけの町なのだ。新しい住まいも、ビルの地階などではなく、地下壕のようなものだ。

私はしばらく茫然と夜空を仰いでいたが、われに戻る、すでに動揺は静まっていた。新しい家は異などという危険なものではないかもしれない。私たち一家をこうして地下に招き入れた「伯母さま」だって、まだ正体は知れないが、ただの世話好きの「伯母さま」なのかもしれない……。そう思いながら、暗い夜空を見上げてみると、荷物を運ぶトラックの助手席で見た光景が、遠い昔のことのように懐か



しく思い出された。夕陽にきらきらと輝きながら、桃色に染まった雲に飛びつこうとしている飛行物体、その下に徐々に傾いて地中へ没して行く大都会……。そのとき、ふと見ると、遠くの闇の空に赤い光が認められた。赤い斑点の連なりが弧を描き中空で揺れているのだ。あれはなんだろう。なにかの前兆だろうか。私はもう一段登り階段の穴から上半身を乗り出した。風だ。点滅する豆電球をつけたムカデ風が夜風に揺れているのだ。暗い夜空に挑むかのように誰かが真夜中に風上げをしているのだ。

最後のヤトウイングワ

牧港誠之

十三歳から二十歳までと期限は同じだった。同じ時期に同じ玉城親方にヤトウイングワ（雇い子）として雇われたのに、上原哲行にはB円[※]で八千円で、ヴァン（おれ）には九千円のドウスル（身の代金）の値段が付いて千円もの違いがあったのは何故だったのだろうか？ と根間栄泉がほぼ四十年もの昔のことを突然思い出したのは、左手に持った水中ライトが水深五メートルほどの海底にある、葉状の群体が幾層にも重なったウスコモンサンゴの群落を照らし出したときだった。彼は三ミリのウェットスーツに身を包み、

シュノーケルと水中眼鏡と足鰭を装備して、八重山の離島である阿喜島の真南に位置する南風見多海岸沖におよそ四百メートルの幅で東西に伸びるイノー（礁池）でひとり電灯潜りをしていたのだ。栄泉たち海人（漁師）がキャベツ

畑と呼んでいる、ウスコモンサンゴ群落の葉状の群体を縁取る紅紫色が闇のなかで鮮やかだ。

ヴァンの方が体格が良かったせいかもしれない、と栄泉は思う。あるいは、外海の深みに潜ってイーグン（鰐）で魚を突くことができる、とヴァンの伯父の根間明良さんの売り込みが上手かったせいかもしれない。いずれにしても今となつては定かではない。

* *

根間の家は宮古地方の離島の表土が薄い土地で農業を営み、兄と姉が一人、妹が二人いて、栄泉は五人兄弟姉妹の次男だった。栄泉は小学校に上がる前から朝は六時に起き、三つ上の兄と共に牛馬が食べる草刈りを命じられ、

学校から帰っても畑仕事や牛馬の世話で様々な用を言いつけられた。

強制された仕事や学校の勉強は嫌いだったが、栄泉は海が好きで、暇なときには、モンパノキを刳り貫いた、眼だけ覆う水中眼鏡のミーカーガンを点けただけの姿で年長の少年たちに従い、集落の前の防風林の先にひろがるイノーの浅瀬に出て遊んだ。見よう見真似で泳ぎや潜りを覚え、小学五年生になった頃には、外海に向かって城壁のように連なるピー（礁緑台地）によって波浪が遮られて波穏やかなイノーであれば、およそ千メートル沖のピーの内縁まで出て五、六メートルの深さを潜り、貝を獲り、竹で作ったイ

ーグンで魚を突くようになった。

小学六年生の夏休みに入ったばかりの七月下旬の午後にはひとり泳ぎ渡って、腰までの深さに海水に覆われたピーに栄泉が立っていたときだった。台地の外縁の岩盤に打ち砕けていつもは一メートル以上も上がる波が三十センチほど上がっていただけで、外海のうねりはいつになく穏やかだった。透明な海面に海底の茶褐色や緑褐色が透けて煌めき揺れているのが見えた。

ピーノフカ（礁緑台地沖の深み）は潜りの海人だけの世界と思われ、そこに出るのを学校や大人たちからも禁じられ、ピーの外縁から先に出る者は中学生でもないなかったが、

優秀賞 受賞の言葉 牧港誠之

ひとり部屋に籠りキーボードに向かっていて一番に怖れるのは、自分の文章がひとり善がり、自己満足しているだけかもしれないということ。それを他人に読んでいただいても多少なりとも評価していただければ、全くのひとり善がりではなかったんだ、と安堵します。拙作にお眼を通していただいただけで、「銀華文学賞」の選考委員の方々に感謝しております。

遙かヤマトから思うと、多様な生物が生きる八重山の珊瑚礁の美しい海がこの世のものとは思えず、かつてそこで戦っていた気高く巧みで勇敢なヤトウイングワの存在が奇跡のように思えます。

ヤトウイングワの生き様を少しでも感じていただければ幸いです。



まきみなと せいし

昭和18年生れ
本名 藤田誠之
内装業
法政大学 中退
バンドホテル フロント係
財団法人日本貨物検数協会職員
翻訳業

※ B円=1948年から10年間、米軍が発行したB型軍票

台地からあまり離れないでちよつと覗いてみるだけで、と栄泉は思った。気がつくとも海面の煌めきに惹かれたかのようには寄せた後に引く波に合せて岩盤を蹴り、身体が崖から宙に飛び出たように外海に浮いていた。ミームサ(シマハギ)の群れのただ中だ。群れは慌てふためいて散る。眼下は浅いところで茶褐色、深いところで緑褐色に煌めくテールサンゴやキクメイシサンゴやノウサンゴに覆われて緩やかな傾斜で下るハンタグワー(礁斜面)だ。魚影が濃く、ジュリグワー(クロハギ)やカタカシ(ヒメジ)やノコギリダイの群れがあちこちに見られ、ゲンナーイラブチャー(ナンヨウブダイ)が珊瑚を齧っていた。斜面には掘り込まれたような溝(縁溝)が何本も走り、その暗がりからサツパ(鮫)やナボレオンフィッシュ(メガネモチノウオ)などの大型の魚が今にも出てきそうだった。イノーよりも透明度が良く、七、八十メートル先まで見渡せ、夢見ていた世界に似たような気がした。

栄泉はその日は水深五、六メートルのハンタグワーに潜水を繰り返して、怖くてそこより沖には出なかつたが、何度目かの潜水の途中で沖の藍色の闇から体長一・五メートルほどのサツパが身をくねらせて現れたのを見てイノーに逃げ帰った。

それから栄泉は波が穏やかな日にはひとりビーノフカに出るようになった。ここに棲む、背鰭と尾鰭の先端が白いングワとは見習いの海人のことさ、と伯父は言った。憧れの海人になれるんだ、と思った栄泉にとっては胸躍るはなしだった。戦後米軍統治下になって一九四九年に人身売買としてヤトウイングワ制度が米軍布告によって禁止されてから七年後、八重山の黒島に六名のヤトウイングワの存在が明るみに出て人身売買として騒がれた一九五五年よりも一年後の、栄泉が十三歳になった、一九五六年の夏のことだった。

玉城組は、そのほんの数年前まではウエーク(權)で漕いでいたということだったが、四十馬力のエンジン付きの、船底と両の舷側を三枚の南洋樺の厚板を継ぎ合わせ、繋ぎに鉄釘を使わず、フンルーという楔形の木釘を、細部には竹の釘を使い、腐食防止のためにサツパの肝油を塗ったサバニを三隻所有している。石垣島の登野城を母港として竹富島、小浜島、黒島、阿喜島、新城、西表、鳩間島と八重山の海を巡る十人の一団だ。外海の深みに潜って高瀬貝や宝貝を獲ったり、イノーの縁辺やビーの切れ目の水道に仕掛けた網に縦糸縄を用いて追い込むチナキヤ(中型の追い込み漁)でクチナギ(ハマフエダイ)やイラブチャーを獲っていた。

栄泉は陸では掃除や炊事や運搬などの雑用を言いつけられ、そして愛用していたミーカーガンを嵌めて海で試された。イノーでは水深五、六メートルの海底で二分近く粘り、波

サツパは眠り鮫の一種のリーフホワイトチップで人を襲わない、と海人たちから聞いていたが、遠眼にはホワイトチップと人喰いのヨシキリ鮫などの他のサツパとは区別が付かず、サツパの姿を眼にすると、すぐにイノーに帰った。

だが、サツパを見ないときは自分でも知らぬうちに大胆になつて深く長く潜るようになり、夏休みが終わる頃には耳抜きを繰り返して水深十メートルを越す、ハンタグワーの際まで潜り、そこから更に七、八メートル垂直に落ち込んだ崖下の、白砂が紫色に染まって見える外洋底を飽きずに眺め、ときに何尾かのイラブチャー(ブダイ)を従えて泳ぐ丸々と肥ったミールバイ(ハタ)の姿に見惚れたのだった。

そしてその翌年の中学一年の夏には栄泉は独りで外港に出て、およそ二分の間、海中に留まり、ハンタグワーの洞窟にチブラー(魚の棲み家)を探し、ゲンナーイラブチャーやタマン(フエキダイ)などの形が良い魚を次々と仕留め、集落に売り歩いて家計の足しにするようになった。

そんな栄泉に石垣島の伊原間で砂糖黍を栽培していた伯父の根間明良から、糸満から石垣島に移住したイチマナー(糸満漁師)の子孫である玉城親方の許でヤトウイングワをやらぬか? というはなしが持ち込まれてきた。栄泉くんはうってつけの仕事だ、ナム(芋)を腹一杯、おかしは新鮮な魚を好きだけ食べられる、と言われた。口減らしの意味もあった。その意味を知らない栄泉に、ヤトウイ

穏やかな外海ではハンタグワーを十五、六メートルの深さまで潜った。

「筋がいいさあ、上等、上等よ」先輩たちは褒め、栄泉は得意だった。

だが、波が穏やかな日を選んで気儘に故郷の海で潜っていた遊びと仕事とは違った。ビーの砕波帯に打ち砕ける波が二メートル以上の高さに上がり、海面のあちこちに白波がさざくれ立った外海を見て膝を震わせていたときも、栄泉は背を押されて海に放り出された。怖くなってサバニに逃げ帰って舷縁を掴んだりすると、ヴァンたちが見守っている、溺れることはないさ、と先輩たちに怒鳴られ、頬を殴られたものだった。再び海中に向かうしかなかった。潜る深さが足りない、腹に石を括られて潜らされた。

復元力はあるものの揺れが激しいサバニによる酔いに悩まされたが、それにも馴れ、栄泉は先輩たちに叱られることとして頑張った。早く浮上して先輩たちに怒鳴られるのが怖く、頬が熱く膨らんで感じられ、頭の芯が麻痺しそうなになって息堪えに限界を覚えたが、我慢して過ぎて失神したこともあった。ベーンブイだ。水深十五、六メートルのハンタグワーの岩盤を蹴ったが、差し込む光が筋になって揺れる海中をいくらか腕と脚で水を掻いても近づかず、輝き揺れる海面が彼方に感じられた。最後の六、七メートルが特に長く、その中に含まれている酸素を求めめるかのように海

水を呑み込み、自分が海底の岩にでもなったような気持ち
がし、頭が気持ち良くなり、死ぬこととはこういうことさ
あ、と思った。栄泉は俯せになって海面に浮き、サバニに
引き上げられ頬を撲たれて意識を回復した。

近くにサバニがいなかったら、と思うと、栄泉は背筋が
冷たくなった。それからは頭の芯が麻痺しそうになる前に
浮上を始め、ベーンブイを起こすことはなかった。八重山
の海を巡る、週六日の夕ビで連日鍛えられ、栄泉は一ヶ月
もすると三十メートルの探さまで潜って貝を拾ってくるよ
うになった。

栄泉より一ヶ月ほど遅れて雇われてきたのが同じ年の上
原哲行だった。沖縄本島の山原やまもとの貧しい農家出身で、口数
少なく臆病な眼をした痩せて小柄な少年だった。潜りはで
きず、腕でやたらと海面を叩くクロールや上体の上下動が
ぎこちなく焦って息継ぎをする平泳ぎで二十メートルほど
の距離を泳ぐことができただけだった。哲行はサバニから
海に放り投げられてきちんと泳ぐことから鍛えられた。疲
れたり怖くなったたりしてサバニに帰ろうとすると、先輩た
ちが竿で哲行の頭を小突き、胸を押した。哲行が海水を飲
み込んで溺れそうになっても、先輩たちは助けようとはせ
ず、哲行が失神してから初めてサバニに引き上げた。哲行
が意識を回復すると、泣き叫ぶ哲行を海に放った。

何とか泳げるようになると、哲行は竿の先に右手首を括

ヤーに参加できた。そして外海では二十メートルほどの深
さに潜って貝を拾ってくるようになった。

陸より季節が遅れる海中では新北風が吹き始める頃は海
水温もまだ暖かかったが、水温は徐々に下がり、十二月を
過ぎた頃から急に冷たくなった。チナカキヤーでは、栄泉
たちは珊瑚礁に仕掛けた袖網のあちこちで待ち構え、袖網
に取り付けた脅し縄を使って魚を袋網へと追い込む。それ
から網を移動させたり引き上げたりするのだが、二時間か
ら三時間もの間、パンツ一枚の姿で海水に漬かって作業す
るのは辛く、栄泉は世の中を呪いたくなくなった。

それよりも辛かったのは、外海で貝を獲ることだった。
歯が小刻みに打って鳴り、肌が震える。血の巡りを良くし
ようと海中で不必要に身体を動かして酸素を消費し、目指
す海底に潜れないこともあった。海面に浮上すると、海水
よりも冷たい北風が頬や首筋を刺した。追い込み漁では近
くにサバニが浮き、人もいたのだが、貝獲りではサバニも
人の姿も見えなくなる時がある。幸い栄泉たちの一団では
事故は起きなかったが、集団で追い込み漁をやっていると
きではなく、深みに単独で潜って死んだり行方不明になっ
た海人のなしを耳にしたことがある。

栄泉は三ヶ月後に米海軍払い下げの水深計で計って三十
五メートルの深さまで潜れるようになった。だが、それか
らの進歩は遅く、ヤトウイングワに雇われておよそ八ヶ月

られて海中に沈められ、竿が引き上げられるまで潜らされ
た。先輩たちは三十秒ほどから始めて一分、一分半と日々
時間を延ばし、哲行が息を堪え切れずにもがき苦しんでい
ても、決めた時間だけは竿を上げなかった。哲行が失神す
ると、サバニに引き摺り上げ、頬を撲って意識を回復させ、
潮を吐かせ、再び右手首を竿の先に括った。哲行は泣き叫
ぶ元氣もなくなっていた。自分がどこにいるのか判らない
ような表情で空の遠くを眺めたのだった。

哲行が一分半ほどの時間海中に留まれるようになると、
腹に縄を括られて海底に落した石を拾いにいかせられた。
潜るに潜れずに浮上すると、腹部に石を括り付けられた。
辛いだろう、と眼に涙を滲ませて同情しながらも栄泉はそ
んな哲行をチビと侮り、先輩たちがいないところで、チビ
はなにをやってもグズさなあ、と面と向かって言うのが常
だった。週に一度の休みには親方から小遣いを貰って石垣
島の繁華街に映画を観に行ったものだったが、何年もの先
輩のような顔をして使い走りさせ、哲行は絶るたがように栄
泉の表情を窺って命令に従った。

身体が耐えられないだろう、あるいは海で事故を起こす
か、逃げ出すかもしれない、と栄泉は傍らで見て思ってい
たが、哲行は訓練に耐え続け、二ヶ月を過ぎたあたりから
泳ぎや潜りが急にうまくなった。三ヶ月も過ぎて新北風新北風
(中国大陸からの北の季節風)が吹く頃になるとチナカキ

が過ぎた、翌年の旧暦の三月三日の浜下りの頃に石を抱い
て体調が良いときに、やっと三十七、八メートルの深さま
で潜れるようになっただけだった。目標にしていた四十メ
ートルには届かなかった。それが限界だ、と身体が感じた。
先に四十メートルの深さに潜れるようになったのは、栄
泉が侮っていた哲行だった。哲行は栄泉と違って限界を越
えて息堪えをして何度もベーンブイを起こしながらも黙々
と仕事をこなし、イリユドウン(梅雨入り)を前にした翌
年の五月の初めの頃に栄泉が気がつく、自分と同じよう
に水深三十七、八メートルまで潜り、そしてユドウン(梅
雨)が明けて太平洋から南風が吹く六月下旬になって、四
十メートルよりも深く潜れるようになっていたのだ。

それを眼にしてから栄泉も程なく四十メートルの深みに
潜れるようになった。が、哲行はさらに深く四十二、三メ
ートルまで潜り、栄泉より自在に動いて多くの貝を獲るよ
うになっていた。チナカキヤーでも速く巧みに動き、シン
カ(仲間)の誰よりも仕事ができ、栄泉は何をやっても哲
行に適わなくなった。

だが、哲行は休日には石垣島の繁華街に出ては、陽焼けし
て黒光りがする肌と赤茶けた髪を恥ずかしがっているかの
ように身を練め、シンカ以外の人とともに口を利くこと
できず、栄泉に絶るたがような表情を見せ、哲行より仕事か
できない栄泉の方が兄貴風を吹かせていたものだった。

玉城親方は他の親方たちよりも考え方が柔軟で、栄泉たちは他の組の海人たちより早く、シュノーケルを銜え、顔面を覆う水中眼鏡を嵌め、腰に鉛のウエイトを巻いて黒いウエットスーツの着用を許された。栄泉がヤトウイングワになって三年目の冬からだつた。海面を泳ぐときの息継ぎが楽になり、海中での視界が広がり、泳ぎ潜る速度が速くなった。ウエットスーツの襟元の僅かな隙間から入った水滴が背筋を震わしたことがあったが、水滴はたちまち体温に温められた。昨年冬と較べると、ウエイトを調整して四十五メートルの深さまで潜ることができ、栄泉にとって天国で仕事しているように思えたものだった。体力も保って作業効率が上がった。

* *

ウスコモンサンゴの礁原を過ぎると、水中ライトは小さなテーパーサンゴが張り出し、エダサンゴが密生する隆起珊瑚礁の台地の崖を照らし出す。栄泉は左手首に嵌めた水中時計の蛍光塗料が塗られた針が十時五十分過ぎを指しているのを見た。サバニでイノーに乗り出してから一時間二十分が過ぎていた。馴染みのチブラーに次々と潜り、右手に持った身の丈よりも長いイーグンで、昼間は外海で泳ぎ、夕暮れどきにビーの切れ目の水道を通ってイノーに帰り、夜はチブラーで眠っていたゲンナーイラブチャーやタマン

などの形の良い魚を十六尾仕留めていた。

珊瑚礁の海で泳いだり潜ったりしていてトーガシチャ（オニヒトデ）をうっかり踏みつけた男たちのはなしを栄泉は何度か耳にしたことがある。その神経毒がある棘が足に刺さり、筋肉組織のなかで複雑に折れ、設備が整った病院でも抜き出すことができず、半年間も歩けなかった病院でも、トーガシチャは円盤状の胴体から十四、五本の腕が放射状に伸び、胴体と腕には隙間なく棘が突き出た、直径四、五十センチになる生き物だ。夜行性で通常昼間はテールサンゴの裏などに潜み、夜になると表に出て珊瑚のポリプを喰べる。同じように神経毒のある棘で全身を覆ったオニダルマオコゼも怖かった。

栄泉は水中ライトを慎重に照らして危険な生き物と生きた珊瑚がないのを確かめたあとに隆起珊瑚礁の台地の上に立った。大潮の干潮時には大氣中に頭を覗かせるが、今、中潮が満ち、台地上は一・五メートルほどの深さだった。そこから百五十メートルほど南にあるビーの碎波帯に外海から寄せて打ち砕けた波がほの白い軍勢を思わせた。一斉に立った軍勢は横列となつて十数メートル突撃し、一斉射撃に遇つて倒れ、と、次の軍勢が立ち現れるのだ。

栄泉は岸の黒い防風林の連なりを眺める。黒が一際濃いところが南風見多御嶽の森だ。防風林の内側は、石垣島の登野城や新川の集落と同じようにボタンの材料にする高瀬に残るだろうと栄泉は思っていた。が、哲行は、栄泉が働く川崎の町工場と一緒に働きたい、と言いつ出した。登野城の港の護岸内での、二十歳の誕生日が哲行より二ヶ月ほど早く、先に年季が開ける栄泉の送別の宴のことだった。「海であれだけきついことをやってきたんだ。町でもどんな仕事でもできるさ。それに工場に離島出身者が集まっているのもいいさな」哲行は言った。

哲行は栄泉に二ヶ月ほど遅れて川崎の町工場に見習工として就職した。二人は会社の寮に住み、最初の二年ほどは先輩たちに言われるままに骨身惜しまず働いたが、その内によその職場の条件が気になり出した。二十二歳で二人は一緒に町工場を辞め、それから町工場や運送会社を転々とし、やがて離ればなれになり、二人が二十四歳になり、栄泉が横浜の港湾荷役会社で働いていたときに哲行はひとり沖繩に帰った。

哲行は宮古島の佐良浜を母港とする鯨船に乗り、二十五歳で八重山の離島の阿喜島にある南風見多集落出身の宮良通子と結婚し、二十六歳の八月に娘のめぐみが生まれた。哲行から栄泉に子供の写真が送られてきたが、顔立ちが哲行に似て眼が大きな健康そうな赤ん坊だった。

栄泉は貨物船の船艙でフォークリフトに乗つたり甲板でクレーンを操縦したりして横浜の埠頭で働き続け、二十七歳で沖繩本島出身で同じ会社で事務員をしていた三つ年下

貝や広瀬貝を求めてやってきたイチマナーが移住してできた南風見多の集落がある。定住し始めたのは明治四十年代で、最盛期には七十人もの人が住んでいたが、交通や医療や教育に不自由する離島苦で過疎化が進んで今は五家族で十四人の人しか住んでいない。

* *

栄泉の年季が開ける二十歳になって父親が宮古群島の離島から迎えにき、宮古地方出身者たちが多く働く、乗用車やトラックのボディ用の鋼板を作る、川崎の町工場への就職を勧めた。栄泉は中学も卒業していなくて、一から始めなければならぬ陸での仕事に尻込みした。チナカキヤアや貝獲りでお前ほどの上等な腕があれば海でどんな仕事でもできる、と玉城親方に言われ、玉城親方の許に居残つても他の網元の許に行つてもこれからは一人前のモークワキ（配当金）が受け取れるのが判っていた。だが、宮古や八重山が日本の果てに思え、パスポートを取得して渡る日本本土が光輝いて見えた。日本からすぐに逃げ帰つてもよい、ともかく海以外での仕事を一日でも経験してみろんだ、と思ひ、栄泉は父の勧めに応じた。公立中学卒業後に漁業に従事、と郵送した履歴書には嘘を書いた。

街では身を疎める哲行のことだ、先輩の多くのヤトウイングワたちが残つたように年季が開けたら当然八重山の海

の新垣和子と結婚した。三十三歳のときに哲行から電話で、石垣島の金城組でアギヤー（深海での大型追い込み漁）をやるともりなんだ、お前もやらないか？と誘われた。

「装備が発達しているので昔のような苦労はない。昔と違って会計や幹事がいて組織がしっかりして配当が平等に分けられ、水揚げが多いときには日に二、三万の稼ぎになるさねえ。そんなに年取ってまでできる仕事じゃないが、陸で働くよりは稼げるさ。チナカキヤーで鍛えたし、お前なら推薦できる」と哲行は言った。ときにドブの臭いがする横浜港の汚れた海と違う、八重山の珊瑚が煌めく透明な海が思い出され、栄泉は浮き立つ気分になった。多くの本島人と同じように北にしか関心がなく、故郷の沖繩本島より南に位置する石垣島行きを決めた和子を説得し、栄泉は哲行の誘いに応じた。

母船と網の所有者である金城浩一が組頭として指揮を取る金城組は、玉城組と同じく石垣島の登野城を本拠地とし先島の海を巡ってアギヤーで魚を獲っていた。母船の他に八隻のサバニで構成され、サバニにはそれぞれ艫乗りという船頭と五、六人のナカヌイ（熟練した潜り手）が乗る、総勢五十人ほどの集団だ。

主にグルクン（タカサゴ）の群れを追い、母船から降ろした袋網と袖網を魚群の行く手に拡げ、袖網の入り口からナカヌイたちが一斉に飛び込み、海中で円陣を組んで進み、

ら排気泡を吐き出しながらゆっくりと潜降する。袖網によって進路を定められた魚の群れが左右にうねりながら袋網へと向かっている。二十メートル、あるいは三十メートルの薄暗い海底近くまで潜降すると、煌めき揺れる海面が彼方に見え、水圧に身を引き締められ、サバニのエンジン音も遠く、スルシカーの重しを海底にぶつける、魚を脅す音とレギュレーターからの排気音が響くが、不思議な静寂を感じる。近くにはいざとなれば互いに命を助け合う仲間たちが潜っているのだが、ひとりつきりになった心地がする。見上げると、前方の藍色の暗がりには袋網が灰白い城壁のように拡がっていて、追われ、行き場を失って逃げ惑う魚の群れが袋網に絡まる。魚群が札束に見え、海人の身体に喜びが走り、喜びの大きさは群れの大きさに比例する。

栄泉と哲行は金城組で働き続け、五年目の春に西表の南海岸の鹿川沖でグルクンの大群を袋網に追い込んでナカヌイたちが網を上げようとサバニに上がったときに哲行が口から泡を吹いて倒れた。減圧症だ。栄泉がサバニを石垣島まで操縦し、港からは無線で呼んでいた救急車で哲行を八重山中央病院に運んだ。哲行は高圧チャンパーに入れられ水深三十メートルと同じ気圧の元に置かれ、血液に溶け込んだ窒素ガスを排出するために徐々に気圧を減じられた。哲行は脊髄や中枢神経に大きな損傷はなく、日常生活に不自由しないまでに回復したが、肘や膝の関節に軽度のし

阿壇の白い花芯とおどし布と重りを付けたスルシカーで海底をつつきながら魚群を追う。袖網を徐々に絞る、魚群が袋網に追い込まれると、ナカヌイたちは船に上がって網を引く。

スキューバタンクが普及するまではナカヌイたちは素潜りで二十メートルや三十メートル、網が海底の谷間に引っかけたりすると、五十メートルの深さまで潜って仕事をしていたのだったが、その頃にはスキューバ潜水の用具を装着し、息の長さは要求されなくなっていた。だが、減圧表と相談しながら潜るレジャー潜水と違って魚の動きに併せて動くので、つい減圧時間を充分に取るのを怠り、吸気した空気中の窒素ガスが血液中に気泡となって残り脊髄や中枢神経に損傷を与える減圧症の危険と背中合わせの仕事だった。

海が荒れていて漁に出られない日もあった。魚群に当たらず、稼ぎが五千円にもならない日もあった。水揚げ高によつて分配金が左右されたが、平均すれば、哲行が言っていたようにアギヤーのナカヌイでは横浜の埠頭で働いていたときの二倍の稼ぎになった。

藍色にうねる海を疾走するサバニからスルシカーを携えて波立つ海に飛び込むのは、いつも胸躍るときだった。次の瞬間には白濁に揉まれ、暫くして崖から飛び降りて宙に浮くように透明な海水に身を包まれる。レギュレーターがびれが残り、これ以上窒素ガスが身体に蓄積されると危険だ、と診断されてスキューバ潜水はできなくなった。

上原哲行一家は石垣島から、妻の通子の出身地である、イチマナーが移住してできた阿喜島の南風見多の集落に移り、三ヶ月ほど前に離島した通子の遠縁の一家が所有していた赤い琉球瓦の家と海辺の牧場を譲り受け、夫妻は牛を飼った。その傍ら哲行は減圧症の心配がない素潜りで魚を突き、めぐみは島の小学校に編入学した。

栄泉はさらに四年間アギヤーを続け、四十一歳になった春に辞めた。年に数回は八重山中央病院の高圧チャンパーに入って身体から窒素ガスを抜き努力をしたのだったが、窒素ガスが身体に蓄積されているような気がし、連日スキューバ潜水を繰り返すのが酷な労働に感じられるようになり、ナカヌイとして限界を感じたからだだった。日本に出てフォークリフトかトラックを運転しようかとも思ったが、先島の海から離れたくなく、タダ同然に借りられる家と牧場がある、と言う哲行の誘いに応じ、阿喜島の南風見多集落に移住した。

栄泉と和子は先月に島を去ったばかりの一家の家と牧場を借り、哲行の指導を受けて牛を飼った。栄泉は廃業した海人からサバニを買い受けて阿喜島周辺の海を巡り、自分の息だけで潜った。昼間潜り、夜に潜ることもあった。もう減圧症の心配はなくなった。久しく自分の息で潜ってい

なかつたが、一ヶ月もすると、水深三十メートルまで潜り、三分間は海中に留まれるようになり、肺や心臓が十も若返つたように感じられた。ミーパイやゲンナイラブチャーやタマンなどの結で突いた獲物は阿喜島の民宿や住民に売り、稀に石垣島からやってきた仲買りに売った。海での稼ぎはアギヤーの四分の一に減つたが、誰に指図されることもなく好きな時に、専門家の眼で見れば三百種以上の珊瑚が生息し、亜熱帯に住む殆どの魚が見られる海の、好きな海域に行つたのだつた。

集落や牧場や海で哲行は四十一の年齢より老けて穏やかな表情を見せていたものだったが、八月半ばの晴れた日に素潜り漁から家に帰つた途端に、胸が苦しい、と言つて倒れた。七十二歳になる医介補が勤める診療所で応急処置を受けた後に哲行は救急のヘリコプターで石垣島の八重山中央病院に運ばれた。心筋の一部が壊疽状態になつていた。

海で無理を重ねたせいなのか？ あるいは以前に減圧症に罹つたことと関係あるのか？ と栄泉は思ったが、哲行は二ヶ月半ほど入院した後死んだ。

哲行の葬儀の四日後の十一月中旬の平日の昼下がりには栄泉は南風見多の浜辺で髪を肩まで伸ばした白いTシャツにジーンズ姿の痩せた娘に会つた。哲行より頭半分背が高くなつた、八月で十五歳の誕生日を迎えた、哲行の一人娘のめぐみだ。ピーが干出した海を眺めていためぐみは、足元

紐は前方斜め下の闇に消える。すぐに気を取り直し、闇を探つて紐に光を当てる。尾が平たくて全長が一・五メートルはある、珊瑚や岩礁の下などに眠っている小魚を求めて徘徊している、猛毒を持っているが、人を襲つたりはしないヒロオヒョウ蛇だ。眼を凝らすと、胴体の白と黒の縞模様はつきり見えた。クビグワが光から逃れてエダサンゴの林のなかに潜るまで彼は水中ライトで追い続けた。

エダサンゴの礁原を離れてから隆起珊瑚礁の崖に沿つて進む。崖に抉れた穴を見つけては頭から潜り、浮いた足鰭で平衡を保ちながら穴に光を差し込む。

黄色い魚体に黒い円が描かれたウミズキチョウウオウオが光に眼を醒まして泳ぎ出した。昼間は人の手なんかには決して触らせない、反応速く優雅に泳ぐ魚だが、眠ぼけていてのろく、方向も定まらなかつた。二度、三度と突き出した口吻を穴の壁にぶつけた。栄泉はシュノーケルに息を短く吹き出して笑い、穴から光を抜いた。

次々と覗き込んだ崖の穴に雌のゲンナイラブチャーとスサボーダ（ヒブダイ）の寝姿を見たが、いずれも形が小さなものだった。

崖沿いから隆起珊瑚礁の台地と台地の間の曲がりくねつた溝へと入る。迷路に迷い込んだようにたちまち方向が定まらなくなる。珊瑚に触れるだけで海水にふやけた皮膚が裂けてしまう怖れがあり、ウェットスーツから出た首筋や

の砂に視線を落として栄泉と顔を合わそうとしなかつた。「学校は？」栄泉はめぐみの横顔に声を掛けた。「今日は行く気しない。昨日も行つてないよ」めぐみは砂を見たまま言つた。

「学校ぐらい行く。友達と話するさな。それに来年は受験よね」栄泉は言つた。

「高校なんてどうでもいいさ」めぐみは拗ねて甘える口振りで言つた。栄泉を見る表情が幼かつた。

「そんなこと言わんさな。哲行はよ、めぐみやちゃんが高校生になるのを何よりも楽しみにしていたんだから」

「お父さんは泡盛が好きで夜はビール（酔っ払つて）うるさく、だらしなくて自分勝手なことばかりしていたけど、家の空気は重くならなかつたよね」

* *

隆起珊瑚礁台地に立つて何度かのうねりをやり過ごしたあと、栄泉は海面に腹這いになる。次のうねりに身を任せ、彼は岸に向かって一気に六、七メートル押され、水深四メートルほどのエダサンゴの礁原の上に出る。足鰭をゆつくり動かす。

栄泉は水中ライトでエダサンゴの茶褐色や緑や青、そしてピンク色を次々と照らし出す。と、彼の腹の下から光の筋のなかに長い紐が現れてくねる。彼の肩が一瞬震えた。

頬がうねりや流れに押されて珊瑚に触れないように気を配らなければならなかつた。

隆起珊瑚礁の下部が抉れてきた洞窟に六十センチほどの、頭部に突き出た瘤から雄と判る、自ら分泌した透明な膜に包まれて眠っているゲンナイラブチャーを見つける。栄泉は洞窟に上半身を入れ、イーグンを伸ばして鰓の後ろの急所を一突きにした。魚は一瞬体を震わせただけだった。

栄泉の身体に喜びが走る。眠っている間さ、夢見ている間に天国さ、と思う。イーグンで上手に突いた魚は血が抜けるので市場に出せば網で獲つた魚よりも高い値が付く、刺身にしても旨い、煮付けにすると汁に旨味や養分が溶け込んで美味しく旨い、この海で生きている魚を食べるといふことは、それまで魚が食していた海藻や海藻や珊瑚を食べ、この海そのものを身体に取り入れることさ、海が人間の血や肉になるんだ、肉料理なんか問題じゃないさな……。

一日の仕事がすっかり終わった気分になつてサバニに向かう。高校生の上原めぐみが少年たちに面白半分に弄ばれ傷つけられ、そして腐つていつて、と思ひ、めぐみが自分の娘でもないのに身が削られるような思いがしたものだつた、と栄泉がほぼ十年もの前のことを突然思い出したのはその時だつた。

* *

弄ばれ傷つけられ腐っていつているとは、阿喜島から離島航路の高速艇で四十分ほどの距離にあつて四万ほどの人が住む石垣島の繁華街の暗がりや町中の小さな公園の片隅で不良少年たちに混ざつて尖つた表情をしている少女たちの姿を見るたびに栄泉が感じていたことだつた。

人口百五十人たらずの阿喜島に高校はなく、阿喜島中学を卒業した上原めぐみは、石垣島の市街地にある、地元にも高校がない離島出身者が集まる下宿屋に下宿し、私立高校の普通科に通つた。だが、二年生になつた頃から朝に下宿を出たまま無断欠席したり、夜遊びをして無断外泊をするようになった。七月二十日から始まつた夏休みに下宿を出たが、阿喜島の母の許に帰らなかつた。めぐみが繁華街に屯する不良少年たちと付き合つていゝという噂が阿喜島の島人の耳に入るようになった。

石垣島の不良少年たちについて栄泉は、バイクで乱暴な運転をし、酒や煙草はもとより頭脳を麻痺させるシンナーやハルシオン錠などのクスリを常用し、男女の不純な行為に耽つている、と噂に聞いたことがある。農繁期に市街地から島の中部や北部の農村地帯にタクシーで乗りつけ、田や砂糖黍畑に出て無人になつた農家に空き巣に入り、待たせていたタクシーで市街地に帰る。中学生や高校生を脅かして金品を巻き上げる。対立するグループが集団で喧嘩する。彼自身もヤトウイングワの頃に泡盛を飲んだり石垣島

入ると、栄泉は冷房装置の冷気に包まれ、エレキトリック・ギターの騒音と女性歌手の英語の叫び声に皮膚を打たれる。表で思つていたよりも天井が低く狭い店だ。アルコールと煙草と炙つた肉の匂いがした。入り口の左手から奥に伸びた、スツールが三つ並べられただけのカウンターと手前の二つのテーブル席は空いていて、一番奥にある四人掛けのテーブル席に二人の少年と二人の少女が坐つていた。栄泉は扉の内に立ち、奥のテーブル席にめぐみの姿を捜す。入り口に顔を向けて坐つた少女が顔を起こしてぼんやりした表情で栄泉を見る。髪を胸まで伸ばした、顔が小さな小柄な少女だ。一見十六、七歳に見えたが、改めて見ると唇が半開きになつた表情が幼く、まだ十四、五歳にも見え、栄泉は傷ましさを覚えた。少女の右隣に坐つていた、髪を短くした十七、八歳の少年が少女の視線を追い、クスリでもやつているのか、うつとりした表情で栄泉を眺め、薄ら笑いを浮かべる。

エプロンを掛け、髪をオールバックにした三十年配の小太りの男が、厨房からカウンターに出てき、栄泉の頭から足先まで眺めた。栄泉は見返す。男は何か言いかけた声を飲み込み、怯んだ表情を見せて栄泉から視線を外す。ぶよついた肌をして柔な男が！こんな子供たちに場所を提供して汚い商売をやつてからに、と栄泉は思い、海で鍛えに鍛えた自分の身体を意識した。上体から無駄な力が抜け、

の繁華街で怪しげな場所に屯する少年たちと喧嘩したことがあつたのだが、栄泉には今時のそんな少年や少女たちが理解できない別種の人間のように思えたものだつた。

たとえ犯罪を犯してないとしても、もしめぐみがそんな連中の誰かと夜に歩いているとしたら、と栄泉は思つた。アガヤー！ヤトウイングワのシンカだつた哲行のためにも見過ごすわけにはいかないさ……。

「めぐみが下宿を飛び出してからもう二週間も経つさ。友達の所にいる、心配ない、とめぐみから電話があつたんだけど、その友達の名前も住所も言わなかつたよう。柱に縛りつける訳にもいかない、と下宿からは電話で言つてきたさ。このままでは退学処分になる、と高校からも言われたさねえ」栄泉の家から二十メートルほど西に離れた家に住むめぐみの母の通子が栄泉に泣きついてきた。

その翌日の八月三日の夕方に栄泉は独り石垣島に渡つた。栄泉があちこち捜し歩き、もう夜の十時を過ぎていた。人氣がない、アーケードに覆われた公設市場通りの外れにある「スターズ」という店の木の扉を前にして栄泉は夜の海の深みに独り向かうときのようによろめした。その前に訪れた離島棧橋近くの喫茶店が不良少年たちの溜まり場で、そこでめぐみらしき少女が入り込んでいるのを見た、と聞いていたのだ。Tシャツの下の上体に汗をかき、膝が小刻みに震え、胸が早打ちする。意を決め、扉を押して店内に

膝の震えが収まり、胸の鼓動も鎮まり、全身が熱く膨らむのを感じ、アガヤーで深海の底にいるような心地がした。

入り口に背を向けて坐つている、ストレートの髪を肩まで伸ばした少女の細っそりとした首筋と撫で肩の線がめぐみに似ている、と思ひながら栄泉は店の男を無視して奥へと歩いて彼女の左斜め前方に立つと、彼女は唇を紅く塗つためぐみだつた。今年の四月に阿喜島で最後に見たときよりも頬の肉が削げ落ち、眼に力がなく、気怠そうな表情を見せ、いっばしの不良少女に見えた。めぐみの隣に坐つて煙草を喫つていた、長髪をポニーテールにした小太りの十七、八の少年がやつく笑いを浮かべて栄泉を見上げた。

「海人！お父さんと同じ、髪が茶色の海人が来たよ！」めぐみが急に声を上げた。四月まで耳に馴染んだ、高く弾んだ友人の娘の声だ。

「めぐみ、こんなところで何してる？さあ、行くんだ」栄泉は言つた。

「栄泉さん、海人の栄泉さんよねえ。行く？どこ行くさねえ？栄泉さんはお母さんのように煩いことは言わないよう。お母さんと家で二人きりでいると空気が、重くなるよ。栄泉さんは優しいおじさんよね。ここが一番さ。楽しいよ」

栄泉は右手で脇に垂らしていためぐみの左手を握つて引く。めぐみは逆らわずに立ち、引かれた勢いで平衡を崩し、

栄泉に抱きつく。栄泉の upper にめぐみの身体は見た目以上に脆弱に感じられた。麝香製の強い香水の匂いを嗅ぎ、子供のくせに、と思う。

「おい、おじさんよ、何さなあ？」ポニーテールの少年が栄泉とめぐみを見上げて呟く。が、背をぐったりと椅子に預けたままだ。

「アキ、ビールに何入れたねえ？」髪の毛の短い少年が叫び、隣に坐っていた小柄な少女の頬を平手で撲った。

「何するさー！」少女は声を上げ、泣き声のような甲高い声を発しながら小さな両拳を握り回して少年の顔を殴った。テーブルのグラスが床に落ちて割れる。少年は両腕を上げて顔を庇い、少女の拳の振りが止まった瞬間に少女の頬に右手を飛ばした。一発目よりも力が籠った平手打ちだ。少女は椅子から立ち、テーブル席の横を走り、扉の前で振り向いた。

「城間さんに言ってるからね」少女は泣き声で言い、表に出た。

「くそっ！馬鹿が！アキの奴、いつもヴァンを馬鹿にしてるさ。油断がならん女さな。時々飲み物のなかに何かを入れてるのを知ってるんだからな。えーえ、誰に頼まれてそんなことをやってるさあ？」少年はアキという少女がまだ店内にいるのかのように叫び、椅子から立ち上がる。「それにお前もさあ。関係もないのにしつこくヴァンの前

年の細い手首の腱が今にも切れそうだった。切れてもいい、と思う。

「痛そう、痛いよねえ。栄泉さん、放してあげてよ」めぐみが場違いに間延びした口調で言った。栄泉は少年の手首を放し、少年の尻を右足で蹴った。少年は四つん這いに倒れ、仰向けになり、右手を胸に当て、手首が！手首が！と言いながら泣きじやくる。

栄泉は右手でめぐみの左手を握り、引いた。めぐみは腰を引いて動こうとはしなかった。

栄泉は左の掌でめぐみの右頬を打ち、こんなところから出るさあ、と言い、めぐみの手を強く引いて扉へと歩いた。屋外は冷房が効いた店に入る前よりも蒸し暑かった。栄泉の全身に汗が吹き出る。

「さあ、阿喜島に帰るんだ」栄泉は言う。

「もう船ないよ」

「今晚は下宿に帰り明日の船で帰るんだ」

「栄泉さんは阿喜島の珊瑚礁に吹く風の匂いがするさねえ」めぐみは言った。

* *

栄泉は左手に持っていた水中ライトを水平方向に照らしそうになって慌てて海中に向けた。黒い海面のあちこちに飛び撥ねていて、光を見ると狂乱状態になって光に向かっ

に現れるさな。城間のフラーに頼まれたねえ？」少年は言いながらロングパンツの右ポケットからサバイバルナイフを取り出し、刃渡り二十センチほどの刃を開き、右手に握り締め、腰の位置に構え、女性歌手の、ベイビー、ベイビー、の叫び声に合わせて上体を揺すりながら栄泉に詰め寄る。栄泉はめぐみを背後に突き放す。深海の底で人喰いのサツパと出くわしたことが何度もあるんだ、こんな腐ったところにいるお前なんか、と栄泉は思う。自分の頬が笑っているのが意識される。

ナイフの刃先が腹部まで五十七センチほどに迫ったときに、栄泉は脇に垂らしていた右腕を振り上げ、握り固めた右拳で少年の下顎を打った。

「ダウワアー」少年は叫び、よろけて後退し、栄泉は対のダンスのように相手に合わせて踏み込み、右手首を掴んだ。少年は抵抗しようとしたが、腕の力は弱く、足の踏ん張りも効かず、栄泉のなすがままだった。栄泉は手首の関節を逆にとつて後ろに振り上げた。ナイフが床に落ちる。

「ウグウワアー」少年は今度は声帯が潰れたかのような濁った悲鳴を上げる。

「ゴミが、お前らゴミ同士がいくら傷つけ合おうが知ったことじゃないさな。お前ら、ナイフで殺し合ってもいいさ。世の中、綺麗になるからな。だがな、めぐみに近づくのは許さん」栄泉は少年の手首の関節を捻りながら言った。少

て真っ直ぐ突っ込んでくるシジャー(ダツ)を思い出したのだ。沖縄本島の恩納海岸沖の珊瑚礁で電灯潜りの海人がシジャーの鋭く突き出た口吻で腹部を刺されて出血多量で死んだというニュースを昨夜テレビで知ったばかりだ。夜の海は怖いさ、と思つて苦笑いを浮かべる。だが、夜の海ほど面白いところは世の中にな、と思う。死ぬまで付き合うさ……。

栄泉は沖合い百メートルほどの海面に浮かぶサバニに泳ぎ帰った。腰に巻いていた六キロの鉛のウエイトを外し、ウエットスーツのジッパーを降ろして身体の締め付けを緩め、息が鎮まるのを待つてから、クーラーから出した三合瓶の泡盛をラツパ飲みする。酒精分が内臓に熱く拡がるのを感じ、ペットボトルの冷えた水を飲み、内臓への刺激を和らげる。船底に仰向けになり、空に密集する群星を眺める。何かの信号を発しているかのように瞬く頭上の一つの星に眼を凝らす。やがて眼を閉じる。

* *

その夜の十二時過ぎに崎山めぐみは外海からの波が四百メートルほど沖のビーに打ち砕ける礁鳴りで眠が醒めた。遠くで響き続けているが、風の具合でか、意外に近くで雪崩れ落ちる水の音のように聞こえるときもある。いつもは気にもならないのだが、なぜか耳に障って眠れなかった。めぐみは母の上原通子と夫の崎山隆幸とひとり娘の直美が

眠っている、赤い琉球瓦の平屋の家を出た。二十メートルほど東に離れ、自宅と同じような造りで庭にドングリ椰子が植えられ、天水だけを頼っていた時代を偲ばせるコンクリート製の水タンクが遺物のように残されている、根間栄泉と妻の和子が住んでいる家の前に来た。

二人に子供はいなかった。一番座の灯りが点いているが、人声は聞こえない。めぐみは根間の家の前から防風林に入つて通り抜け、南風見多の浜に降りた。潮が満ちたイノーの沖合百メートルほどの海面に栄泉のサバニがうねりに揺すられているのを見る。サバニにも周囲の海面にも人の姿は見えなかった。海中から湧き上がってきた水中ライトの光で海面が輝き揺れるのを見て、その下に栄泉が魚を突いている姿を思い描いてみたかったが、海面が輝いているところも見えなかった。

高校二年生の夏に栄泉が石垣島の公設市場通りの店にやつてきたときのことは、ハルシオンとビールを身体に入れて頭が朦朧としていてめぐみはよく覚えていなかった。短く刈った髪が赤茶色に焼け、皮膚が黒光りする、痩せてはいるが、腕と上体の筋肉が発達した栄泉を見た瞬間、先島の離島の海の匂いを嗅いだような気がし、海人が来た、お父さんと同じ阿喜島の海人が来た、と急に燥いだ気持ちになったことを覚えていただけだった。栄泉に頬を撲られたことも覚えていなかった。

気がつくともめぐみは、栄泉に連れ戻されて当時八家族二十三人の人が住んでいた南風見多にある母が住む家に帰っていた。

「あんな出来損ないの不良の仲間になってからに。島の人たちにも合わせる顔がないさあ」母はめぐみの人生が終わってしまったかのような口振りで叱った。めぐみは母と口を利かなかった。石垣島や那覇の高校に通っていて帰省していた中学時代の同級生たちを訪ねず、元同級生たちも訪ねてこなかった。一日の大半を二番裏座の自室に籠りロックやレゲエのCDを聴いて過ごし、夕暮れときに他に人がいないのを窺ってから南風見多の浜辺に出て西表の山に沈む夕陽を眺めた。時折栄泉がイノーの沖にサバニを浮かべて仕事をしている姿を眼にしたが、海獣であるかのように自在に浮き沈みしてイーグンの先に獲物を仕留めて浮上してくる栄泉の姿を眺めるのが好きだった。漁を終えてサバニを砂浜に引き上げる栄泉と会うと、彼は上機嫌な笑みを浮かべた。

「今日も大漁さ。チプラーさえ知ってれば次々と魚が獲れるさな」栄泉は言い、二尾か三尾の形が良い魚をめぐみに手渡した。めぐみは栄泉にもっと話してもらいたかった。叱られても良かった。が、栄泉は早足で砂浜を上がったのだった。肩幅が広く骨が太い背が毅然と伸びていた。島に帰って十一日が過ぎた日の午後石垣島の仲間から、

今阿喜島の港にいるさな、とめぐみに電話が掛かってきた。めぐみは母がタンスに隠していた三万円を盗み、自転車以南風見多から北の集落にある海に向かった。その間、子牛や牧草を積んだ二トントラックを運転する栄泉と今にも会うような気がした。どこに行くさあ？ と栄泉に問われれば、気持ち揺らいで正直に答え、自宅に引き返すような気がした。が、栄泉と会わなかった。島人の誰とも会わなかった。港の待合室では長髪をポニーテールにした少年がひとり煙草を喫っていた。

その六日後にめぐみは長髪をポニーテールにした少年が借りていた石垣島の美崎町のアパートで夏風邪を引いて寝込んだ。少年は夕方に出たきり帰ってこなかった。めぐみは深夜の二時過ぎにふらつきながらバスルームに入ったときに鏡に頬がやつれて澱んだ眼をした、二十歳過ぎにも見える女の顔を見た。南風見多のイノーで漁をする栄泉の姿が浮かび、この顔を栄泉さんだけに見られたくない、と思った。めぐみは決めた。三日後に風邪の症状が軽減するとアパートを出た。

阿喜島には帰らなかった。少年もここまでは追ってこないだろう、と思ひ、めぐみは母から盗んで隠し持っていた金で航空券を買って那覇に行き、「沖縄タイムズ」の求人広告を見て応募し、牧志にある美容院で住み込みの見習い美容師として働き始めた。

めぐみは四年後に同じ阿喜島出身で小さな建築会社で働いていた、二歳年上の崎山隆幸と知り合った。めぐみが知る同年配の誰よりも鼻息が静かな男だった。都会は好きじゃないさ、那覇にいたときは那覇で頑張るが、いつか阿喜島に帰る予定なんだ、と隆幸は言った。二人は結婚し、めぐみが二十六歳になったときにひとり娘の直美を連れて過疎化が進む阿喜島に取って帰り、母が住む家に住み、南風見多の牧場で牛を飼ったのだ。めぐみたちを迎えた栄泉は直美を抱き上げ、哲行に、お爺さんの哲行に似ているさ、ヤトウイングワになった頃の、と言った。ヤトウイングワという言葉を知らなかっためぐみが訝しげな表情を見ると、見習いの海人のことさ、と栄泉は言った。

人の気配がしないイノーの海面を眺めているうちにめぐみは、栄泉さんが遭難したのでは？ と胸騒ぎがした。波打ち際まで歩き、海面に眼を凝らした。が、依然として人の姿は見えず、海中からの光で海面が少しでも明るくなっているところも見つからなかった。いや、栄泉さんが遭難するはずがない、と思う。サバニから離れ過ぎていいのかもしれない、あるいは泡盛でも飲んでサバニの船底で寝ているのかもしれない……。そうは思ったものの胸の騒ぎは鎮まらなかった。今夜は栄泉さんが遭難していないのを確かめるまでは浜にいよう、と思った。

インディアン・サマー

二宮英郷

1

「おはよ、起きろ！
神野 今 五時だ……」

同室の料理人のアルトウロが、部屋の真ん中に端から端までロープを張り、敷布を掛けてプライバシーを確保している。反対側の彼のベッドから毎朝の寝起きの挨拶だ。

「ブエノディアス。アルトウロ」

昨晚、たしかココロテの遠吠えを三回数えた記憶はあるが、眠りに就いた覚えはない。五分前に眠った感覚だった。なんでもう朝か、もつと眠っていたかった。

「神野、ガラガラ蛇の尻尾、頼んだよ」

「はいな。いいともさ。今日こそ出てきたら、プレゼント

するよ」

アルトウロは、窓外の薄明かりを吸い取ってぶら下がっている敷布の端に人差し指を挟んで覗き込み、うつ伏せで寝ている神野に笑顔を見せると口笛を吹きながら、この農場の総勢三十八人に朝食を食べさせるため部屋を出ていった。ここは一軒屋の独立家屋で、部屋の前が玄関でその横が食堂である。段取りはすべてについている。昨晚のうちに準備してあるので暖めればいいだけだ。各自が順番に自分のプレートに好きな食べ物をセルフサービスで取る。またランチ用にはパン八枚に、イチゴ、ピーナッツ・ジャムを塗り、チーズ、ハムを挟んだ四個のサンドイッチをロール紙に包んでテーブルに揃えてある。

食堂兼住居には、アルトウロのほか、国籍はエジプト、ギリシャ、イタリア、それから台湾で、一部屋に二人ずつあてがわれていた。台湾からの留学生四人は、自国で助教

授の職を持っているにもかかわらず博士号を取得するため寸暇を惜しんで勉学に精魂込めていた。さらなる研究のためにアメリカに留学して、夏期休暇に授業料を稼ぐために

優秀賞

受賞の言葉

二宮英郷

編集長の受賞の言葉が耳に伝わり、体中がむくむく熱くなり、うれしくて飛び上がり、シャドーボクシングをした。それでも、じっとしていられずマウンテンバイクに乗って自転車散歩に出かけた。山手線の陸橋の下を走り、代官山を過ぎ、旧山手通りを走っていた。「インディアン・サマー」を歌いながら喜びをかみしめた。

褒美は幾つになっただいてもううれしい。最後に頂戴したのは六〇歳のときだ。私は海を泳ぐのが好きだ。文科省後援「初島熱海間二二キロ遠泳団体競技大会」に、我がチームは泳者・ボクサーの剣持、建設業副社長の熱田、加えて、船上から泳者に檣を飛ばす、親友の娘・保母の森元とで挑戦した。全員スタートについた。私は恐怖でおののいていた。――鯨との遭遇の決闘をイメージしながら。また、やりたいことが出来ないまま、体力の衰えで死ぬかもしれない無念を抱きながら海に飛び込んだ。

――二二キロを、船上の森元に励まされて泳者三人は完泳した。三〇組中、二七位。三時間24分42秒。私は最高齢。敢闘賞を頂いた。本当にうれしかった。いい歳下げて何故泳ぐのか？



えいごう 二宮 へのみ

1942年 栃木県生まれ 63歳
青山学院大学大学院法学研究科
博士前期課程修了
同大学院 MBA コースで学ぶ
(社)国際農業者交流協会 米国
派遣3年制
カリフォルニア農業研修生修了
駐日メキシコ大使館領事部 勤務
同メキシコ総領事館(セクレタ
リー・ジェネラル)退職
現在、青山アカデミー英語塾 主宰

…、「海には魔物が棲んでいる」としか言いようがない。

「遠泳は人生なり」と先達は言う。日本全国に何人の作家がいるかは知らないが、日々活動されている、優れた作家集団のピリに付いて、諦めないで、自らをだましだまし「文学の海」を泳いで行こうと決意した。この文学の海にもどうやら「魔物」が棲んでいるような気がする。

このたびの「優秀賞」は忘ける者の私への創作活動を鼓舞する大いなるチカラである。

昨今、こんなうれしいことはない。ありがとうございます。

死に物狂いで働いていた。人間は希望があるかどうかのように辛い仕事でも耐えることが出来る見本を、神野は目の当たりにして実感出来た。勉強しないと申し訳ない気分になり、アルトウロに彼が起きる時間に起こしてもらおうように頼み、六時半までの一時間をスペイン語の勉強に充てていた。加えて、アルトウロは英語が話せなかったたので、彼との同室は勉強になった。

労働者たちは起きたばかりで、昨日の重労働の疲労がまだ体軀に残っているのか、軽快な言葉が出てこず、もくもくと胃に朝食を押し込んでいる。オレンジジュース、スクランブルエッグ、野菜サラダ、ソーセージ、ハムと内容は決まっていた。食べ終わると、各自、コーヒーを入れた小型魔法瓶とサンドイッチをランチボックスにしまって、農作業に出るのだ。

神野は高校時代、痩せ型だが一メートル八〇センチあり、柔道の関東大会で三位になった実績がある。防衛大学校では剣道に打ち込み、道場では防具の中で汗と熱気に蒸されて練習に励んでいた。炎暑の大地での苛酷な仕事でも、汗が出過ぎて塩が肌へばり付いていた当時のことを思い出せば、別に驚くことはない。農作業の経験がなかったためアメリカに着いて一週間は、柔道と剣道で鍛えたのとは違う筋肉を使うことから、体がバリバリ痛かった。が、慣れると余裕が出て、ボンコツ車に毛布を忍ばせ全米に仕事

ある、皆がブラックマウンテンと呼んでいる地肌を現す雄大な山のあたりに視線を当てたが、朝靄で視界が開けない。サンディゴ地区は降雨が年間を通して五、六回しかない。今日は、メキシコ人たちが二百人来るのかな、と考えていると、隣のカマボコ宿舎に四人合同で住んでいるインディアンたちが入ってきて神野の顔を見た。

「ハイ、ドーン。サモライ！」とウイスキーの匂いを四方に吐き出し、神野の隣席に座った。神野は「グードモーニン、酋長。プリック、グー、赤い鷲」と四〇代後半の男に、大きな声で挨拶を交わすと、彼は破顔した。彼は常時、真っ赤なジャンパーを着ていた。レッドイーグルと呼ばれて嬉しかったのだ。

彼らは朝起きるとサケを飲む。仕事から帰ると、延々とウイスキー、バーボンを飲む。生きてるうちは酔って、気分が楽しい時間を出来る限り自分のモノにするのだ、と憑かれたように飲んだ。完全なアル中だ。ただれた眼差しでインディアンたちは話すが、神野には好意的だ。

「サモライ！ 俺らの先祖がその昔、アジアからベーリング海峡を歩いて渡って来たとき、日本人も先祖とアメリカに定住したんだよ。血の気の多いのがメキシコからブラジル、アルゼンチンへ流れていったのよ」とカマボコで酒を酌み交わし、大声で神野に吠えながら解説した。「その証拠に、『蒙古斑』がガキのころあったら」と言いなが

を求めてさすらい渡り鳥たちと対等に仕事が出来た。農場は、サンディエゴから北上、エスコンデイド方向へ四〇分ほどのランチョ・ベルナンドから、左側へ小山の上り坂を、太平洋側に二マイル入ったところにあった。神野の配属されたこの農場は、ユダヤ系アメリカ人が経営しており、およそ縦に三マイル、横二マイルの小高い丘に開発され、背骨にあたる農道の真ん中に灌漑用のパイプが走り、なだらかな傾斜に肋骨のように支線のパイプが延びている。その肋骨の間が一枚のトマト畑だ。灌漑用水はコロラド川からパイプで走り、キャンプの端に作られた用水池に溜められていた。常時、パイプから音を立てて二五メートル四方の水面に放水されていた。このキャンプはなだらかな丘の頂上をブルドーザーで地均しして出来たものだ。土が乾燥しているせいも、ブルで削った農道はコンクリートで舗装したように固かった。なおかつ日中、忙しく職長たちがピックアップで走り回るのでテカテカに光っていた。

前庭は、メキシコのテイファナから農業組合によって連れてこられる三百人の農作業に従事する労働者が、バスから降りてその日の配置が言い渡され、三〇人の小集団にまとまって現場に行くまで待機できる十分な広さがある。トマトの収穫最盛期には五百人に増えるが、日々その日の市場の需要に応じて人数が決まる。

神野はミルクを飲みながら、窓外を見た。目のまん前に、彼らは臀部を見せた。神野が同じく露わにしたら、彼らが指差して、「ヘーイ、ルック、その辺だ、マークあつたろ、兄弟」と言った。「確かにあつた。あつたよ、レッドイーグル」

カマボコの隣に、百人収容の体育館のようなプレハブが建設してあつた。そこには全米から各自、それなりの過去を背負った男たちが住んでいた。総勢で二五、六人だ。パイプ製の二段ベッドが幾何学的に整列し、緊迫感を漂わせていた。その中に親しくなった、頭には毛が一本もなかったが、その分胸毛が熊のように密集し、両肩から図太い腕が生えていた「体育館」を取り仕切っているステイブが暮らしていた。彼は幾ばくかの軍資金が貯まるとラスベガス、また、その時の仕事場が近ければ、北カリフォルニアからリノへ勝負をしに行く。彼の人生は賭博地へ回帰していた。あるとき、彼が「あいつはユーと同じ日本人だぜ。中国人だつて言ってるがな。合衆国生まれの日本人だぜ」と教えてくれた小柄な男がいた。神野がマエストロと呼んでいたその男は、仕事に出ずに日中は誰もいない体育館でバイオリン制作に耽り、皆が仕事から帰ってくると、今度は、自画自賛の鑑賞の時間に入る。完成間近なバイオリンを足先の上段ベッドの底のスプリングから吊るして就寝まで微笑を浮かべて見ていた。彼の顔には照明が届かず不気味だった。一日の食費三ドルを払えなくなると仕事に出た。

マエストロは日本語を使わなかった。話せなかったのだらう。

アメリカは農業国だ。カリフォルニアは農業州だ。巨大なシヤスタ・ダムが一九四五年に、また、オービル・ダムが一九六七年に建設され、灌漑の急速な発展にともない、粗放農業から集約的農業に発展して、大規模農業の経営が成立していった。カリフォルニアは合衆国の果実の四四パーセントを産出し、市販野菜類の三五パーセントを供給する農業の大地だ。

前庭でフォアマンがシエボレーの白いピックアップを並べて待っている。彼らは国境の米国側で育ったメキシコ系アメリカ人である。五人が五人ともサングラスをかけている。そのうちの一人は長身で頭髪は黒く、葉巻をくゆらせているが、少し前にエジプト、イタリヤ、台湾グループを現場に配置して戻ったばかりだ。朝靄の中を黄色いヘッドライトを点けてメキシコ人を乗せた四台の白いバスが到着した。フォアマンは車のハンドマイクを握ると、スペイン語で後に付いて来るように指示して、今日のトマトの収穫の畑へ誘導して行った。後続のバスが緩やかに農道を走って行く。残っているのは、キャタピラーや農機具と水周りの器具の修理を担当している白人の整備士だ。

バスが去って、その後には滑り込むようにメキシコの国境の町、ティファナから通って来る、いわば常勤の五人組が朝日を吸い取って弾けていた。左手を見上げるとトラックマウンテンの岩肌が照り映え覗き込むように農場を見下ろしている。

右手にキャンプが見える。その方角に視線を延ばすと窪地になっており、カーキ色に染まった平原の牧草が辺りの空気を払い清め、風車が回り大牧場が広がっていた。不思議と牛の姿は一匹も見えない。そこは夜な夜なココテの遠吠えが聞こえる地だ。

一枚の畑の一行に一人ずつ入り、トマトを鋏で切り木箱に詰める。箱は両手で掴むと両腕が平行になる大きさであった。九分目になるとトマトの木箱を肩に乗せ、ひよっこり胸から上だけのメキシコ人たちがすべるように緑の農場を畝の端の農道に運び、また、空箱を担いで、元のところまで戻りトマトの海に沈む。あちらこちらで彼らの胸から上の姿が浮上しては消える。

カリフォルニア州の最低賃金は時給一ドルだ。三〇人を束ねたグループから仕事の早い一人を選び、一ドル二五セントを支払い、彼に収穫のスピードを上げさせ、また遅れた者を助けるようにグループのサブリーダーに就かせて能率を上げる制度を採っている。時折、彼が「二五セント、赤だ」と全員に聞こえるように叫ぶ。今日の収穫の目安は、トマトの真ん中が赤く二五セントの大きさのものだ。

トラックの荷台に神野が乗り、下からダウンが地面に重

乗った車が二台到着した。次に、追いかけるように一番近いエスコンデイドの町の近郊に住んでいる大学生たちが、それぞれ車から降りてフォアマンに連行されて去って行く。グループはそれぞれ知ったもの同士がまとまって仕事に就きた。地元の高校生のダウンが母親の車に乗せられてやってきた。母親と軽く話して、車から降りると神野を見て挨拶し、常勤の五人組の一人、鼻のひしゃげたチャトが運転するトラックを待った。

靄が徐々に薄くなり、いずこともなく消えかかっていた。ブラックマウンテンの地肌が鮮明に現れて来た。神野はいつものように踝をしっかりと護る皮製のワーキングシューズを履き、ブルージーンに赤い長袖のシャツを着、ティファナから買ってきてもらった、西部劇のガンマンが愛用するテンガロン・ハットを被って待機していた。前庭にトラックが停止した。チャトが口ひげを舌で嘗めてウインドウに片腕を掛け挨拶した。神野は運転席に歩み寄り言った。

「チャト、月曜日の朝六時、サンディエゴのホテルYMC Aでピックアップしてくれよ」
「シーコモノー。アメリカ人の彼女、まだ見つかんないのかい」

神野はにやりと笑い、ダウンと荷台に飛び乗った。肌寒い風が襟元から入ってきた。大農場が目の前に広がる。緑色の大きな波がうねるトマト畑一枚一枚が、海原の様相で

ねられた小箱を荷台に乗せ、神野が整然と積載して行く。

箱は掴んで投げられ、気持ち良くカタカタと音を立てて積まれていく。大型トラックに満載されるまで一時間三〇分はかかる。すぐに、チャトがキャンプに戻ると、専属の運転手が市場の冷房設備のある格納庫のような大型倉庫に運搬していく。チャトが空きのトラックで戻ってくる。次はダウンが荷台で、神野が下だ。喉が渴くので、手の届く地点に携帯ウォータータンクが点在している。神野とダウンが一组で、集荷のトラックが最盛期で三台稼働し、総三台組みで一日にトラック二五台の収穫がある。

太陽は燃えている。が、汗は出ない。昼近くなると胃袋がカウントダウンする。ランチタイムだ。流れに応じて、フォアマンがグループのランチボックスをピックアップで運んでくる。

「ラン チダ」の一声でいっせいに食事に入る。それぞれユーカリの木陰や、炎天下で食べるグループとまちまちだ。ティファナ組が周辺から小枝を集めて火を焚く様は、名人としか言いようのない早さだ。すぐに、火の回りでトルティヤを焙り、その中に、「ポヨ ア ラ メヒカナ」を挟んで食べる。これはチキンが骨からポロポロと外れるまで、たまねぎ、人参、じゃがいも、トマト、チリ、りんご酢、ビールなどで煮込まれた料理だ。トマトの赤みがあるととも言えず、神野が好きな料理だ。年齢不詳と言われる

銀髪の老人が「神野、ひとつどうだい」

「グラシアス。神父」と、手を伸ばし、青トウガラシを一口で噛み、タコスを食べると口の中が火のように燃えて体の芯からしゃきつとした。涙がにじんできたころ、口から息を吐いて「何て、辛いんだ」と言った。七〇歳とも、八〇歳以上だと言う者もいた。肌は茶色で艶があった。不思議な男だ。自分でも生年月日がわからないと言う。ランチタイムは三〇分だから素早く食べて、彼らはソングレロで顔を被い地面を這ってくる風を耳と喉で受ける。残り一五分は貴重な時間だ。実際に眠る者あり、饒舌に女の話をする者あり。神野は、ここアメリカに來たことが正しかったかどうかなどを考え、かつ、母と陽子と三人で暮らした、茨城と栃木の県境の町、久下田の風景を思い出して瞑想に耽るのだった。

2

幸一郎の父親は東京の水道局で公務員として単身赴任で働いていた。昭和三三年は便所が水洗になる変遷期で、区の下水、飲み水の供給、管理など、社会基盤が確実に整備されていった。後から後から仕事が増え、声を上げて押し寄せてきた。父親は当然、地域の建設・建築会社、旅館、ホ

テルに顔が売れ、信用も出来、台東区に自分の会社を立ち上げた。顧客も増えた。その中の一つ、中堅のホテルオーナーが、女を作って出て行き、離婚した。残された女将が負債の残るホテルの建て直しに躍起になっている頃、空調を含めた保守契約を結んで行き来しているうちに相思相愛になり、子供が出来て認知した。

その後、離婚話が続いていた。幸一郎は母から事情を聞かされていた。幸一郎が中学一年になる四月一日の夜であった。父は重々しく、家族の前で口火を切った。

「お父さんとお母さんは離婚をすることになった。おまえ達は未成年だ。どちらかが親権者になる。幸一郎はお父さんと住むか、お母さんと暮すか。どっちだ」

「ようし、わかった。お母さんを護ってやってくれ。で、陽子ちゃんは何？」

妹は首をうな垂れて、考えていた。兄と、母の顔を見て泣きながら言った。

「お父さんと、東京へ行きたい」
「ようしわかった。いまからなら、東京の小学校で新学期から五年生になれる。養育費そのほかの話はお母さんと話してある。幸一郎、頼みがある。この家はお母さんに慰謝料の一部として登記する。七百坪あるから、隅にアパートを建てて生活費の足しにしてみたい。お母さんを頼んで行った。」

だぞ」登記の手続きは慣れたものだ。

幸一郎は小学一年の時からずっと同学年の番長で通っている。男気が強かった。護ってやるとも——中学へ行ったから柔道部へ入ろうと決心した。父はトラックを東京から運転してきて、商売柄手に入れた、新品だが傷物の冷蔵庫とテレビ、電気洗濯機を持って来てくれた。近所では、どこも所有している家はない。全員で引越しの準備をした。幸一郎は陽子の荷物を一つずつ作ると、幼少の時間を一個一個包装しているような気持ちになった。その品物を買ったときの情景と時間が浮かんでくる。幸一郎の思い出から、またこの世から陽子が消えるような寂しさで腕が動かかなくなった。

別れが来た。陽子は今まで可愛がってきた犬の茶子を最後に抱いて涙を浮かべていた。頬ずりして別れを告げた。と、門の外に、自転車に乗って親友の麗子が同級生四人を連れてきた。陽子は手を握り合い、健気に一人一人にお礼の言葉を述べた。「手紙書きます」唇を固く結び、意を決して背を向けトラックのドアを開けた。助手席のウィンドウから顔を出し、麗子たちに手を振ると、「お兄ちゃん」と喉が枯れるような声で叫んでいた。茶子が離れないトラックを追いかけた。仲良し五人組は体が固まったまま無言で、涙を流していた。

「帰りなさい。茶子、帰りなさい、茶子……」

茶子は死に物狂いで、陽子の乗ったトラックを追いかけて行った。

神野家に嫁に来て以来、初めて母は落ち込んでいた。離婚したことから、嫁いで来たから自分の家の先祖という意識は薄かったが、元夫が仏壇をそっくり持って行ってしまった。先祖の魂も全部連れて行かれたような気持ちと、家中に宿っていた魂がどこかに飛んでいってしまった空虚さに包まれた。同時に、母の体の中に張り詰めていた気迫が抜けてしまった。少しずつ、この家に魂を住まわせなければならぬ。少しずつ、誰かがいるような人間の温もりのある空気を作らなければならぬと考えた。

その夜、もぬけの空になっていた陽子の部屋を片付け、掃除をしていると、母は立ち止まって泣くのであった。夕食を作りながらまた泣いていた。が、冷蔵庫を開けるたびに微笑が浮かんだ。冷蔵庫、テレビ、洗濯機の「三種の神器」は母を希望に満ちた顔に変えた。新しい時代が来たのだわ、私の時間が新しくなって便利な時代が来たのだわ、と、心の中で未来に對峙していた。

いつもは夕食の手伝いをしていた陽子の話し声がない。父が擗で作った重厚な食卓で、菜の花のてんぷらと竹輪とコンニャク、人参、サトイモの煮物で夕食を済ませてから、母は仏壇のあった八畳の部屋で幸一郎に向かい両手を付い

て、「今日から幸一郎が家長です。よろしくお願いします。幸一郎の大学のお金を貯金します。これからは節約をしていきましようね。お風呂は一日おきにしましよう」と母は頭を垂れた。幸一郎は「くよくよしたって問題は解決しないよ」と言った。

母は、息子がいつの間にかこんなに成長したのか不思議で仕方なかった。

幸一郎は、夕食後九時半まで勉強して、それから風呂に入る。ドリス・デイの「ケ・セラ・セラ」を歌っていた。昨日まで湯船にいた陽子が今夜はいない。と、小さな声で後を追うように歌いながら、母が手ぬぐいで前を隠し入ってきた。幸一郎に合わせ、歌いながら体を洗っている。裸電球から放たれる傘のように円い橙色の光が母の肌の泡に弾かれ、湯船の表面で揺れ底まで差し込んでいた。湯が騒いだ。母は幸一郎に抱きつき頬を寄せ唇にキスをし「ねえ、勉強終わったの」

「おふくろ、おっぱいびつこだよ」幸一郎は、今まで母と妹と三人で風呂に入っていたので妹の手前言えなかった言葉が出た。

「そうなの、幸一郎は左のおっぱいが好きだったみたい。だからかな……」

母は自分で両の乳房を両掌で下から持ち上げて見ていた。父親が設計した五右衛門風呂は周辺が板張りで、あがり湯

りだ

「一人で寂しくない？」

「茶子がいるよ。それにしても戻ってこないね。東京へ連れていっちゃったのかな？」

茶子は秋田犬と日本犬の雑種で耳がピンと立った凛々しい犬だ。幸一郎はのぼせてきたので湯船から出て、外気に触れていた。母は幸一郎を洗い、幸一郎は母を洗ってやる。

風呂から出ると、中型のタオルで全身を拭いてくれ、それから、前を拭きながら、母は「まだ生えてこないね」と言つて、息子の体から湧き上がってくる、匂うがごとく未来に向かつて、大人になって行く男の力を感じていた。この子は将来、女を狂わせ夢中にさせる——唇が男を誇示するものに惹かれ、勢いを示すそれに軽くキスをした。

「友達もまだなの多いよ。中にはにやにやして答ええないのがあるけど。俺の息子、奥手なのかな」

母は軽く笑い交代して、幸一郎が母の体の湯を拭いてやるのだった。背骨を縦にタオルで擦るように力を入れると両脇から乳房の端が見えた。浴衣を着せると髪が襟足にまとわり付いている。ほのかに桃色に染まった襟足から、かすかに湯気が立ち上っていた。

幸一郎が家長になった日、幸一郎の布団は父の寝ていたところに敷かれた。隣から母が洗濯機の便利なことに驚き、

の小さな釜に厚手の蓋が置かれその湯は飲めるほど綺麗だった。その周辺、足場は茶色と緑色の小石がセメントに貼り付けられてあった。焚き口の残り火で、小腹が減ったとき、冬場は餅やさつま芋を焼くのだ。湯船から窓外を見ると樺の大木がある。月が見えた。枝の間から月光が差し込み、薄緑の雨滴をびっしり付けて霽っていた。幸一郎の背丈一メートル七〇センチのところから幹が三股に伸び、同級生に応援に来てもらつて樺を作った。そこで、四季折々の穫り立てのとうもろこしなどを食べながら、山川惣治・作画の宝物にしていた「少年王者」を読みふけていた。少年王者・信吾は親友のアフリカのザンバロと別れを告げ、一家は文明の国アメリカへ飛び立ったのだ。母の両眼は、幸一郎が見詰めている辺りをなぞっている。まだあの樺がこの家を護つてくれている、と確信した。

「ねえ、幸一郎、私ね、働こうと思うの。前から、女学校時代の友達の経営してるダンスホールで教師をしてくれなにかつて、頼まれてたの。火曜と木曜と土曜日なの。どう思う？ 下館しもだてなの、でも終電車で戻つてくると、一〇時三〇分になつちゃうの。週三回だから出来るかな？ と思つて」

「体を動かすことはいいいことだよ。頭で考えてたつて、ことはすすまないよ。やれよ。俺、茶子と、迎えに行くよ。行くときは自転車に乗つて駅に置いとけよ。帰りは二人乗

時代が大きく変わる喜びを喋つた。

——沈黙が続いた。母が「陽子……」と囁く声が聞こえたと嗚咽が漏れてきた。

幸一郎は「おふくろ、しつかりしろ。泣いて陽子が戻つてくるならもつと泣け」と強く言い、母の布団に滑り込み抱き締めた。母は「だって」とかすれた声で言うときと幸一郎の胸に顔を埋めて泣き続けた。右手で左の乳房を掴み、右の乳房をしゃぶりながら柔道部に入ることを報告した。母は息子の頭を、胸、腹、太腿を撫ぜんがら、抱き締めた。息子のすべすべした肌が密着して自分の肌が息子の肌に侵食されて一体になっていく快楽が、両脚の付け根周辺から湧き上がってきた。熱風が母の全裸を包み込み、それから下腹部で渦を巻き始めた。後を追いかけてくる息子の体から伝播してくる——十月十日、自らの胎内で日々成長を続け、腹の中で泳ぎ、足で蹴つていた息子を上から撫ぜん撫ぜんしてやると喜んで蹴り返してきた記憶がよみがえってきた。母が息子の脚に自分のその脚を絡めていた。息子の太い大腿が挟まっけて母の肌と自然に触れ合っていた。貝を散りばめた傘に埋もれる電燈から、橙色の弱い光が同心円を布団に放っている。電燈の裏の暗闇から、天井板の木目が見え、磨かれた樺の板張りに守護された八畳間を見下ろしている。上から何かに見つめられているようだった。

夫と将来離婚する懸念は結婚当初からあった。破局へ進

行していく予感、二人の婚禮の写真がぼけていることから始まった。焦点が定まらず、その現象はあたかも夫婦が二人で構築する希望が合致しない——と第六感を抱いた時から発したのだ。封印されていた「離婚」が、幸一郎の成長とともに少しずつ口を開いていくのを意識していたがゆえに、今日まで幸一郎を溺愛して育てて来たのかもしれない。幸一郎が一人では生きていく自信がないから、息子に頼ろうする本能から発したのだ。それだけではない。幸一郎が凛々しい男に成長していく姿に惚れていた。それにしても夫はなぜ、幸一郎の「幸」の字を自分の名からでなく妻の幸子の名から取ったのだろう。夫とは一年以上疎遠になっていたが、今、夫の肌の感覚が戻ってきた。が、すぐその記憶は空虚な思い出に変幻していく。まるで仏壇のないこの部屋のような気の抜けた思い出になつていく。

身長が母より一〇センチも大きくなった息子の胸から腹に掌を滑らして撫でている。幼少の頃、腹が痛いよと泣いたとき撫でて治してやった。寝巻きははだけ、固くなつている男根を湯室のときと同じように揉んでいると掌に威圧感が伝わってきた。——この息子は女を無我夢中にさせる恐ろしい力を持ち合せている——

耳元で「もうすぐ桜が咲くね。中学一年生だね。お母さん入学式に着物着て行くからね」と囁いた。幸一郎は授業参観の時の母の姿が浮かんで来た。皆が、特に女子が綺麗

り覚えていた。

母は腰を上げ、性毛が艶々と勢いをつけ、どろどろに充血したそこに息子の亀頭を挟み腰を沈めた。怒張感が子宮全体に充満してきた。

「おふくろ、俺の息子、ぬるぬるして最高に気持ちいい……」

「お母さんも気持ちいいわ。夢のよう……」母は静かに腰を回し続けた。息を絶え絶えに言った。「あなたはこの部屋で産まれたのよ。あの時は本当にお腹が痛かった。陣痛は三時間も続いたのよ。そうしたらね、あなたがね、お腹蹴っ飛ばして、大きな声で『おぎゃあー』って堂々と産まれて来たの。あの時、あの瞬間、頭が少しずつめりめりとして行く時、お母さん本当にうれしかった。体全体が何と表現していいか分からなくて気持ち良くて、神様と一緒に溶けてしまっただった。幸せだった。名無しの権兵衛君でも半紙に名前が書いてあったの、男だったら『幸一郎』、女だったら『陽子』って。私を『母親』にしてくれてありがたうって感謝したわ。すぐに、聞こえたわ『幸一郎君は四キロですよ』って」

母の乳首から汗がぼたぼたと幸一郎の胸に落ちていた。髪を乱して喘ぎ、幸一郎の汗ばんだ胸にキスしながら抱きつき、腰は穏やかに動いている。体が滑る。母の性器は二重、三重に幸一郎に絡まって締め付けている。快樂の渦が

だ、綺麗だと言ってくれた自分の母が自慢だった。毎回、教室の壁際に立ち、着物を着て友人の母親たちの中に交じって、じつと幸一郎の後姿を見ていた。

眠たげな眼差しを向けて嬉しい顔を浮かべた幸一郎に顔を寄せ唇を吸うと、幸一郎は母の首に両手を回し上向きになり母の体を自分の体に乗せた。白地に藍色で柄を染めた浴衣がはだけ、真紅の帯の周辺がざわざわしていた。母は帯を解いた。櫛の板張りの模様が入り乱れる部屋の中で、布が擦れる音は、意外と大きかった。母の裸身が幸一郎の体の上に重なり、高窓から月が覗いていると錯覚するほど、皓々と照されていた。母の背は反り、尻は盛り上がり銀色に光っていた。月光が差し込んできて畳の目に陣地を作つてその中へ母の首が入った。緩やかに揺れる乳房を交互に吸わせた。厚ぼつたい唇で吸われていると乳房から体全体が幸一郎の口に侵入して息子の体と一つになつていくような感じがしてきた。と、息子の男根が弾けるように股間に飛び込んできた。腰をゆすりねじり回した——この部屋で、この息子を産んだのだ。「幸ちゃん、がんばるんだよ。がんばるんだよ」と、助産婦が純白のタオルを口に銜えさせ、友達が励ましてくれる声を聞きながら幸子は唸っていた。祖父が大切にしていた高さ一メートル五〇センチの彫刻を施した柱時計が十一回鳴った。五月、窓から、櫛の若葉が昼の光に緑色に透け、自分の顔に当たっていたのをはつき

息子の男根に摩擦されている突起の下から膺の周辺に突き上げてくる。子宮が壊れる——と思った。

「ああ、幸一郎が生まれてくる。同じ、同じだわ——ああ、幸一郎が戻ってくる。お母さんの体に戻ってきた……」

幸一郎の体はまだ精液を放出できる時が来ていない。母の性器のなかで勃起したまま不動だった。柱時計が十二回鳴った——。

3

幸一郎は中学に入ると柔道に熱中した。神野家は母子家庭だから、将来を考えて極力節約して生活している。母はダンス教師として勤め始めた。幸一郎の日課は部屋と庭の掃除と、廊下の雑巾がけ、風呂の番である。火、木、土は母が帰宅してすぐに風呂に入れるよう十時までに沸かして、春夏秋冬、汽車の時刻表のように正確に、やせ衰えて帰ってきて元気になった茶子と、一緒に歩いて駅に迎えに行き、帰りは荷台に母を乗せてきた。近所の評判になった。

ダンスホールは四時開店で、夜九時三〇分まで立って指導するのは重労働だ。晩ご飯はホールから出るから、一食分助かるわ、と言っていたが、帰宅して軽く小腹の空いた足しに何か作っておくよ、という、寝る前に夜食すると

健康を害するのよ、と、断固受け付けなかった。練炭で牛乳を暖め、二人で風呂上りに飲むのが最高に美味しかった。幸一郎は、ぐったり布団にうつ伏せになっている母の背中を両膝でまたいで、一日の出来事を報告しながら肩を揉み、背筋に親指を当て、背骨全体をおさえるようにして両腕の割れ目やエクボのあたりを交互に押し、母が「そこ、そこ」とその都度教えるツボを揉んだ。ふくらはぎはとろとろして柔らかかった。両足の膝の裏側や、土ふまずには時間をかける、次は上向きになる——。指圧の真似事をし、母から疲労を取ってあげた。

陽子の親友だった麗子は、中学生になった。母のいないときに陽子の近況を幸一郎に伝えに来る。幸一郎は高校一年になり、夏休みは、柔道の後にプールでひと泳ぎして帰ると「豚」に蚊取り線香を入れ、櫓にタオルケットを敷き、とうもろこしをかじりながら寝そべって読書と昼寝をすることを常とした。「麗子、上がってこい」中学二年の麗子を櫓に招待した。「幸一郎さん、いやらしい、変態！」麗子は「こんな大きなものが私の体の中に入るのかな」と、木漏れ日を受けている幸一郎の露わな下腹部を見ながらパソツのゴムを掴むと上げてやった。「悪りかったね。麗子、子供だと思っていいたら、おまえ随分おっぱいでつかくなつたな」有無を言わず抱き締めて長い接吻をした。

明し、柔道、そのほか好きなことを経済的な理由で断念して防大を受験するのではないことを力説した。決め手は母の父、下館市議会議長をしていた祖父だった。「……幸一郎、軍隊と警察が国家の秩序を守る。それで国家が成立する。安反対してどうなる。能足りんになるよ」

その年、十二月一日、二日、自衛隊栃木地方連絡部・宇都宮地方合同庁舎で受験した。幸一郎は試験が終わり、開放感に満たされ、四日が日曜なので麗子と一里ほどの鬼怒川に自転車で行った。広大な空の下にまぶしい砂丘が点在して風紋が描かれ、砂利の山があり雲からの光を吸い取って霽っている。幸一郎と麗子は橋の端に座り両脚を垂らして辺りの景色を見ていた。

「幸一郎さん、大きな魚、魚、すごくたくさん泳いでる」麗子は心が弾んでいる。河床まで透き通って見えた。「鮭が産卵で生まれ故郷に戻って来たんだ。鮭は頭いいな、自分の生まれた所を忘れないんだ。今のあの鮭の色が『婚姻色』って言うんだ」

麗子は理解できなくて「どんな字書くの」と質した。「結婚の『婚姻の色』だ。体が濃い茶色で気持ち赤く染まっているのだろ」

麗子の心は熱くなり、幸一郎にその手を重ね鮭の大群を見詰めていた。

合格通知が来た。昭和三六年四月七日が、横須賀走水の

その頃から、麗子は母に幸一郎はこの大学に行くのか、柔道でオリンピックを目指すのかなど尋ねるようになった。母は「大学からのスカウトのお話はあるみたいよ。でも、決めかねているみたい。麗子ちゃんも跡取りだから、お医者さんになるの?」「そのつもりです」と強い意思を母に伝えていた。日曜日に幸一郎の柔道の試合が宇都宮や足利、栃木であると応援に来るようになった。おにぎり弁当を二、三人分作って差し入れた。柔道部では誰もが知ることとなり、ある時、道場で「自分は聞いてもいいですか?」主将は彼女と抜かず三発でありますか?」幸一郎は笑いながら、その後輩の背に素早く回り、抱え上げてレスリングのNWA世界チャンピオン、ルー・テーズの得意技バックドロップをお見舞いした。

昭和三五年の夏の大会が終わり、幸一郎は正座して母と対峙して切り出した。

「おふくろ、俺、防衛大学校へ行こうと思う」

母は黙って、防大の説明を聞いているうちに涙を流し始めた。母は離婚時のアパートを建てる資金があることを繰り返した。幸一郎は町営の独立一戸建てのアパートが何軒も出来ているので無駄金を使わないように、また建てる屋敷の美観が損なれるからやめるように同じく説得した。幸一郎の本心は「国防」であり、真剣に勉強したい旨を説

防衛大学校で入校式が行われる。防衛庁職員となり全寮制で月額六三〇〇円支給される。

春休み中の麗子がせかすので、四月五日に鬼怒川に花見に行った。この日は気まぐれな異常高温で二五度にもなった。白い砂丘で囲まれた中央にタオルケットを敷いて二人は真つ青な空に浮く羊雲の群を見ていた。

「幸一郎さん、明後日防衛大学へ行くんでしよう。私は二年後医学部に入ります」麗子は言った。

幸一郎は全裸になって浅瀬に歩いて行き深みに入り泳ぎ始めた。

「気持ちいいや、麗子も泳げ」

視線の彼方に、通って来た堤防にぼつんぼつんと桜が咲いて川島の下流へ延びていた。麗子は全裸になって一歩一歩砂利に滑らないように足を伸ばして近づいてきた。川底を見て、煌めく水面の流れに顔を近づけながら、「幸一郎さん、小さな魚、魚の大群」と驚いて銀鱗が水中で踊っているのを真顔で見詰めていた。

「孵化した鮭の稚魚だ。桜見時、海へ還って行くんだ」

「ええつ、桜を見ながら海に泳いで行くんだ。ロマンチック」

麗子が、河床を亀のように這いながら観察している幸一郎の背に抱きつくと、幸一郎は麗子を乗せたまま川下へ稚魚の大群を追っかけていった。二人は大ハシヤギし、幸一

郎は時々河馬を真似て川面に顔を付け鼻を鳴らした……。

幸一郎は立ち麗子を背負い自分達の「要塞」に戻り、麗子を横たえ全身の水滴を嘗め回して吸い取った。暖風が二人の冷えた裸体に触れその冷気を吸い取り流れて行った。紋白蝶の群が二人の上を飛んでいる。幸一郎は左腕に麗子の首を抱き、目を射抜くように見詰めている。麗子は皆を決して、幸一郎への万全の信頼を自らの眼力で応えている。

「麗子。おまえを俺の女にしてやる」幸一郎は力強く言った。

——日本ではインディアン・サマーを「小春日和」と言うが、現地では若干違う。ユーカリの根元で仰向けで眠っている神野の耳元へ突き上げてくる熱風が吹いてきて、体ごと、持ち上げられるような感じだった。耳が焼けるように熱く感じて、上半身を起こした。と二〇メートル離れた地元大学生グループから「Indian summer」という声が聞こえてきた。隣のダウンが同じく叫んだ。目が熱いので開けていられない。遠くコロラドから大地を嘗めながらカリフォルニアにたどりつき、目の前に延びる緑の畑に熱風を吹きつける。トマトは大地から水を吸い、インディアン・サマーと勝負をしながら、戦いの血を自らの果実に刻印する。それとも風と大地の決闘なのか。

神野は、アメリカが独立前、イギリスが植民地だった領土を拡張するための、イギリス兵士とインディアンとの戦闘と、それから独立後はアメリカ人との領地獲得戦争で、合計、二百万のインディアンが殺害された——神野が読んだ記事で判断して、インディアンたちの怒りの怨念が熱風の化身となつて、アメリカの大地を嘗め回しているのかなと考えるのだった。その日は三組で二五台を集荷した。五時きっかりにフォアマンが号令を掛ける「さあー帰ろう」

明日は日曜日で休みだ。喜びが弾け飛んでいる。神野は食堂でガラガラ蛇の胴体と鈴をアルトウロに渡した。

「オイガ、神野、一、二、三……、七年だよ。こいつは幸運だ。さて、神野、今日は土曜日だ。サンデイゴへ遊びに行くんだろ。俺、黒人女の性毛を買いに行くんだ。一緒に行ってくれよ。なあ、通訳してくれよ」

「何だと、このアメリカで性毛を売っているところがあるのか」

「サンデイゴは全米一、二の海軍基地のあるところだよ、何でも売ってるよ」

渡した包みを冷蔵庫にしまつて、アルトウロは「なあ、神野、ガラガラ蛇は一年に一個鈴を増やすんだ、七は幸運の印だろ。それでな、それを持って黒人女の性毛を財布に入れて、ベガスへ行つて一勝負よ。後片付けすると八時だ。

——地から湧き上がってくるエネルギーがトマトの木々から匂いを吐き出させ、インディアンが吹かせた風と合流して地面を這つて太平洋へ吹いていった。熱いので両手で両耳を揉んでいると、メキシコ人のなかから「ガラガラ蛇だ」と叫ぶ声が熱風の底から聞こえてきた。その瞬間、彼らは蜘蛛の子のように散った。ホルヘが立つて、蛇の現場に歩み始めた。神野はユーカリの根元にあつた細い棒を掴むと彼の後を歩いていった。かなり太い蛇はとぐろを巻き、鎌首をもたげてこちらを見ている。灌漑用水パイプの下で昼寝をしていたガラガラ蛇はゆつくり動き出した。ホルヘがナイフを出した。蛇の尻尾が鈴の音を出している。頭目掛けてナイフを投げたが、外れて後方の土に突き刺さった。神野の番だ。神野の後ろから「気をつけろ。死ぬぞ」と聞こえたが、概して暑さの中で生息する動物には敏捷さはない。一メートルの棒を構えて、無言で頭を直撃した。と頭が吹っ飛んだ。胴体がのたうち、首の切り口に砂が付く。この情景を見ながら「蜘蛛の子」が戻ってきた。神野は鈴の部分でナイフで切り離し手で持った。彼らが包围して「俺にくれよ」と言つたが、丁寧に断り、ランチョボックスのロール紙に包んでしまった。

午後からの仕事は、誰もが熱風で目が熱かった。どうしてインディアン・サマーって言うのかダウンに質したが、単に小春日和という意味を言うだけだった。

それまで待つてくれ。今晚行こう

神野は二つ返事で約束し、シャワー室へ行った。エジプトとイタリア、インディアン、それにステイブが入つてきた。

「ステイブ、悪いな。今日の運転練習はキャンセルしてくれないか。今夜はアルトウロとサンデイゴへ行つて性毛を買いに行くんだ」

「俺も若い頃、縁起かついでベガスに行ったが効能がなかったな。処女じゃないと効き目はないよ」

「本当かい。黒人の処女いるのかい？ 性毛何本欲しい？ 買つて来るから」

「ノー・サンキューウー。処女？ いるさ。おふくろの腹で処女を失つて出てくる話は聞いたことねえな。ジュニア・ハイスクールでほとんど男を知っちゃうよ。ところで、運転免許のペーパー・テスト、答案三枚、手に入れたからあげるよ。神野だったら、一発で合格だよ」

大声で話しているとインディアンとエジプトが浴び終わって出て行った。

「ところで話は別だが、神野、酋長は四十代後半だろ？ 危ないな」

「突然何だい。何が？」

「そのうちわかるよ」

アルトウロは明日の朝食の準備を終えて、片付けをし二

人は出発した。神野は実技の練習にルート一五号を南下、サンディゴの入り口までアルトウロの車を運転した。アルトウロは席を変わり、手を伸ばして神野にミッシェンビーク近くのオールドタウンにある売春宿の情報を書いた地図を渡し、神野の案内通りに運転して目的地のドライブ・スルーのファーストフードの駐車場へ到着した。来る途中、神野は一九世紀、メキシコ統治下にあった頃の保存されている古い住宅を見ることができ、何か得をした気持ちになった。

そこから神野が電話すると学生風の黒人女性が迎えにきた。神野が正確な英語を話す日本人であることで即、第一次面接試験は合格となった。彼女と隣へ歩いて行くと、古い豪華な邸宅があった。神野はなるほど安全だと感心した。駐車に心配なく、待ち時間は自動車で腹ごしらえが出来、パーキングエリアを歩いて行けば目的地は目と鼻の先だ。誰も疑うものはない。二人の黒人女が出てきた。彼女は、一瞥すると、メキシコ人は嫌いだ、ハッスルしたくない。隣の日本人ならいいわ、と話している。

「お嬢さん性毛を売ってくれないか。一本、幾ら？」

「二〇ドルよ」

「二〇ドルは高いだろう。五本で百ドルだぜ」

「ビジネスで人でも殺しに行くのかい。値切ると返り討ちされるよ」

ビジネスだから、嫌な男が来るわ、その時は高額を吹っかけてバリアするの。誰だって自分の娘可愛いじゃない。身を護っているの。あたしは、性愛セックスが好きなの。いい男と性交するの好きなの。あたしの体に値が付くの、震えちゃうわ。もつとも、サマー・バケーションの間だけよ。この街は、全米の若者が集まる海軍基地があるの。彼ら、もうすぐヴェトナムへ戦争に行くのよ。両親より先に死ぬのよ。神様に祈ってるの。兵士の恋人が全員妊娠してから順に戦場へ送ってくださって。でね、あたしは恋人いない兵士のダミーなのよ。夏が終われば、あたしは東部へ帰り、テイチング・ジョブに戻るわ」

女は握ったペニスに目を落として、「ハイ、私のジュニア、まあ、かわいい。お目目がひとつ。私の娘と仲良くしましょ？」と言いながら「ジュニアが仲良くしたいって言うてるよ。ブラザーはこの国へ何をしに来たの？」

「ここに一袋の小麦がある。これでパンを焼いて食べてしまおうと、二度と食べられない。が、農業を勉強すると、人類は永遠にパンを食べられる。日本人は凄い国民だろ。世界地図に載っている赤いトウガラシの国が、アメリカ、イギリス、中国など連合軍と戦争をしたんだぜ。結果は負けて、国家は疲弊した。骨皮筋衝門になった日本を再建するには人だよ、人。日本青年にアメリカの大規模農業を勉強させ、日本が自給自足できるようにすることが第一。そ

「ベガスに行くんだよ」そこまで話すと理解したようだ。「一時間で二〇ドル。おこぼれの性毛はやり方しだいで何本でも無償で持つて行きな」

アルトウロに通訳し終えると、彼は鼻をびくびく動かし女と部屋に消えた。

残った女が「ねえ、ブラザー」と話しかけて来て、神野の前のボタンを外し、ペニスを見てしごき「ブラザー、包茎なの？」

「日本刀は常に鞘に収めて置くんだよ。本当に切れる刀は鞘に収まっているんだよ。抜いたら切れるぞ。実戦には強いんだ」

名前を「サラ」だと名乗った。

「いい名前だね。サラ・ヴォーン。ジャズの女王かな、痺れるね。『インディアン・サマー』聴くたびに勃起するね」

「あんた、泣かせるネ。彼女はあたし達の誇りよね……」と神野を見る目が変わった。

「お嬢さん、俺ロマンがないと出来ないんだ。ジュニアが命令するんだ。お父さん、この女はよしなさい、またある時は、OKだから突撃しなよ、つて。コロンブスと同じ罪を犯したくないよ」

「あたしだって同じよ。あたしの娘ブツビ、指令するのよ。ママ、この男は身なりが良く、金持っているが問題起こすよ。辞めな、悪運憑くよ、つて。私のブッシー、スマートなの。」

これで日米両政府で条約を結んだ。そのプログラムに参加したつてわけだ。農業研修生だよ。アメリカには感謝してるよ」

「そう、市民権を取るのと違うんだ。選ばれたんだ。アメリカは農業国だよ。私たちの先祖はこの国に一六一九年に初めて、オランダ船の奴隷商人とともにやって来たの。」

二〇人、年季奉公の身分で。それから奴隷よ……南部で綿花を摘んで。鞭と銃で脅され、逃亡すると、白人が捕まえて同じブラザーの黒人に耳をそがせ、足首を切断させたのよ。でも、私たちの先輩は歌ったわ。ワークソング」

部屋はいい匂いがして、本棚やテーブル、化粧台の家具調度は高価であることを今に伝えており、歴史を感じさせた。ベッドの全景を写す古い鏡が圧巻であった。敷布が純白でクリーニングの下ろしたてだ。女には品があり、清潔な薄紫色の唇で話す。唇の裏が赤くめくれ、完璧な歯並びの真っ白な歯が見えるたびにゾクつと身震いした。女の両足首を掴み大きく開き調べた……性毛の中でいきり立つジュニアを突き刺した。

「ロマン？ 時間の無駄使いよ。待っていたら人生、終わっちゃうよ。ハニー……あたしの *sublime* ジャイナはツキを呼ぶよ」なぜか性器を多くの白人女性が使う呼称で言った。

「日本人にもハニーのような凄いのがいるんだね。ツボを攻められると気を失っちゃうよ。初めて女知ったのいつよ。」

「小学校卒業した時だよ。母と」

「ヘエー。あたしは父親と。ジュニア・ハイの二年のとき。あたし達共通項があるわね。母は黙認していたと思うの。知っていたわ。いつも、微笑んでいたわ。温かいホームだった。父とは月に一度は愛し合ったわ。今にして思えば母は恐らくピリオドだったのよ」

母との性愛の絵巻物を幸一郎は墓場まで持って行くとかたくなに思っていた。今日の今まで。と、なぜか母が寂しそうな顔をした——私たちのこと誰も知らないで、お墓の中だけで思い出に残ってるなんていやだわ。お喋りしていいわよ、私の体に幸一郎が戻ってきたことを、見ず知らずの外国人の記憶に残っているってすごいことだわ——と言っているような気がしたのだ。

「それって、理想的よね。私も母になったら息子にそうしようと思う。だって、種馬はいても子宮で子供作ったのは女よ。息子のジュニアが回帰してくるのって自然じゃない。サケだって生まれ故郷を覚えていて回帰するのよ。この国には息子と母親、娘と父親のケースが多いのよ。数ある女教師の中には一七、八歳のすべすべした学生に無理やりやられた環境を作り、巧みに『誰にも言えない』とか言っ

人持てるよ」

4

アルトウロにYMCAまで送ってもらいチェックインして、月曜日の時間までには戻ると話して別れた。幸一郎は、金で女を買う行為で精神が汚れた気がして元に戻したかった。シャワー室に飛び込み何度も体を洗った。ベッドの全景が映っている鏡の前に立った。母と麗子の顔が笑っている。と、彼女らの全裸が薄紫の混じった黒光りの裸体に変幻していった。ベッドに倒れ、鏡に浮かぶ母を思い出しながらマスターベーションをしていて途中までの記憶はあった。目覚めたのは朝五時だ。スケジュールをチェックしたが眠ってしまった。再度目覚めたのが八時であった。体中から力がみなぎっているのがわかる。で、地下のプールへ泳ぎに行くと、数人が全裸で泳いでいた。神野は気まずくなくて水泳パンツを脱いだ。泳ぎは久方ぶり、水中で肺の空気を抜きながら底に沈んでいく快感を楽しみ、尻をつけた……湯船の母を抱えて立つ時、湯の滴り落ちる音と風景が想起され、水面に顔を出し夢中で泳いだ。部屋に戻り、全裸になり鏡の母と対峙しながらアルトウロが作ってくれたサンドイッチと牛乳の入った紙袋を広げ、寝たまま朝食

涙を浮かべて、月に一回ぐらいはやられたふりしてるの多いわよ。女はメイククラブが好きなのよ。統計の影に隠された数字が潜在してるの。黙して語らず、それでうまく行ってるの。でもハニー、マスコミ、裁判官にならば、百倍、レイプされたよりひどいじゃない……」

サラはビジネスとして、幸一郎を満足させられなかったことに敗北を認め、金を取らなかつた。神野は日本刀の切れ味を理解してくれた、初めてのブラック・パーソンだと賞賛し、証拠として二〇ドルを受理してもらった。サラはベッドから立とうとしても立てない。柔道選手に体を固められ、体中のツボを攻められビジネスが出来ず、絶頂感にわなないて喘ぎ、肩で息をしている。ベッドから性毛を一本一本拾い終わると、神野の手を自分の性毛にあてがい「ツキのいいの選んでよ。ブラザー」と言い、「友達に贈呈してよ。ねえ、インディアン・サマーが来る間はいるか。もう一度、勝負しようよ……」と濡れたペニスを握り、薄紫にむくれた唇で神野の舌を包んだ。

「教え子が客として来る確率は高いな？ お嬢さん」

「男は国を護れ。女は家を護れ」ってね」

「男は泣き虫だからな。いつの世でも女が男を元氣付けるんだなあ」

「いいこと言うね。それにしても強いね、ブラザー。女二を食べた。」

「あなたは子供のときから病氣知らず。正露丸があれば一切心配なかつた。さあジルバの練習しましょう。男が女をリードするのよ。アメリカのお嬢さんをリードするのよ」と電蓄でSPレコードをかけ、ジルバを完璧に教えてくれた。

フロントで聞いて街の骨董屋を回ったら、日本刀があつた。四〇〇ドルだと親父は値を付けた。一声泣けよ、という三五〇までだという。持ち合わせがないので買えなかつた。その足でバルボアパークへ出掛けた。小高い丘にあり、青い空が広がり、スペインのコロニアル風の建物が建ち並んでいる。動物園に入り、目ぼしい女を物色したが、一人で物思いにふけっている哲学者はいなかつた。失恋して落ちこんでいそうな女もない。肥満の多い家族連れがほとんどだ。道順に従って見ていくと、園内は「アフリカ」だった。少年時代、櫓で読書にふけった日々がよみがえってきた。

四時過ぎに出て、ホテルへ帰ろうと思えばバスストップへ歩こうとしたら、金髪と赤毛の雑じる髪が揺れ、歩調に合わせて乳房が揺れる三〇手前の女が、オレンジ色の開襟のワンピースを着てこちらにやってきた。

「YMCAへは反対側のバスに乗ればいいんですか？」
「バスはほとんど乗りませんのでわかりません。日本から

ですか？」

幸一郎にいいに答えた。胸元が斜めに当る日の光を受けて淡く黄金色に染まっている。むしろぶりつきたくなつた。顔を見ると、右の瞳が青色で左が黄金色だ。左、右と見とれていると、その女性は笑みを浮かべた。

「日本はどこでも、時間が正確でも人も街も清潔ですね！」
幸一郎はその言葉に答えながら、左右の瞳に吸い付かれつつ、淡く澄んだ桃色の顔の口からT.H.の発音のたびに舌先がほんのわずかに顔を出すのを見ていると、その女性が官能的で淫乱な女に見えてきて、居ても立ってもいられなくなつた。

「私は横須賀から帰ってきたばかりです。軍は、夫の本国への休暇を戦争が近づいているので許可しません。で、ワイフが出かけるってわけですわ」

「えー、懐かしい。わたしは防衛大学校です」

「綺麗な海ですね、ハシリミズ！」

アメリカ広しといえど防大の住所「走水」を知っているものは関係者以外はいまい。幸一郎と彼女には強い信頼関係が生まれた。彼女の名前は「マリーン」であると紹介されて、「海」ですか、いい名前ですね。どなたがお付けになったのですか？」と聞くと「父です。彼はインディアンとのハーフだったので。祖母がイギリス人で民俗学の教授でした。研究中酋長の息子の子を孕んだのです」と言った。

しました。が、私の左肋骨に短刀が突き刺さり、後方の按摩のいるところへ飛ばされ、その按摩のステッキが私の手に触れたので、瞬時にステッキを構えてやくざの脳天を一撃したのです。一か月後にそいつが自死しました。警察の話だと、私の一撃が原因ではなく、組内のいざこざが原因だとは言っていました。新聞に報道され私は有名人になり、どうにも心の整理がつかず、子供の頃から憧れていたアメリカに来て見たかったのです」

それから幸一郎は左脇腹の傷跡を見せた。

「帰国したら、幹部のコースに戻るの？」とマリーンは幸一郎の顔を覗いてきた。

「それも考えていますが、修士^{マスケ}を取ろうと思つてます」

幸一郎は自分の母校には全面的に感謝をしていた。勉強は言わずもがな、宿泊、食事もついて、しかも、毎月、六三〇〇円のお金を受け取れた。ほぼ全額母の郵便貯金に残っている。米国で大学院に入る資金はある。常時、心に希望の星が輝いており、農作業していても、なんら苦にならなかつた。

マリーンの車の方角から離れ公園の内側に歩みベンチに座るとリスが遊んでいるのが見えた。——研究者になる選択は人生のコースから脱線していいことだから、いい選択であることをマリーンはまくし立てた。自分でも現在、修士に挑戦していると言つた。その間、幸一郎は両の瞳と、

マリーンと一緒に歩きながら遠泳で体育実習の八キロを泳いだ思い出や、四年間銃剣道部で明け暮れていたことを話した。

「コウイチロウはなぜ、この国に来たのです。自衛隊の幹部にならなかつたの？」

左右の瞳の色はちぐはぐながら奇妙に調和があつて、不思議な気品が漂っている。一度視線が合うと外しがたい魅力があつたがその視線を遮つてきっぱり言つた。

「人を殺したのです」

マリーンは驚く顔も見せず、幸一郎の目を熱く見ていた。幸一郎はマリーンの瞳を見ながら追想するように話し始めた。

「防衛大学校卒業間際、帰省して、母を駅に迎えに行く、駅前広場で三人の男が駐車して待っていました。母が知り合いの按摩と下車して改札口を出たところで、三人の男が近づいて絡んできました。ホールに踊りに来ていたやくざ風の男たちで、私が入つて丁重に引き下がろうとしたのですが、見物人が大勢いて相手に勢いがつき、私の胸倉を掴んでしまいました。逆手を取つて吹っ飛ばしたら、三人が短刀を抜きいきり立ちました。二人の短刀は手刀で叩き落しましたが、三人目の短刀が私の腹に刺さろうとしたとき、「駄目！」と母の叫び声が聞こえたと同時に、可愛がつっていた犬の茶子がそいつに飛びかかつて行き命拾いを

形のいい桃色の唇を見ながら、その下の乳房が息づいているのを感じていた。二人とも黙つた。夕陽が傾きかけてマリーンのオレンジ色のワンピースが映えている。黄金色の産毛が、額周辺に輝いていた。幸一郎は顔を近づけて、マリーンの唇に接吻をした。体中の細胞が騒ぎ始める。左腕を首の後ろに回し、右手を脇の下へ伸ばし、乳房を服の上から揉みながらマリーンの舌を自分の物になるまで唇を離さなかつた。右手で背中ジッパーとブラのホックを外して、掌に吸い付く乳房を鷲掴みした。母のと同じくらの大きさだが母のより固い。乳房を爪で攻めると、鼻孔から熱い息がかり喘ぎだし舌を絡めてきた。背後の白いコロニアル風の建物夕陽に焼けている。幸一郎とマリーンは、夕焼けの影の中に隠れた。幸一郎はパンティを脱ぎ取り、瞳の中へ中指と薬指を入れて愛撫を続けた。マリーンは舌と唇で羞恥なのか抵抗なのか、その意思を伝えている。恋人達の車がいつの間にか増えてきた。かまわず掌で愛撫しながら瞳の中で「ボレロ」を奏した。と、マリーンは幸一郎のバンドを外すと「本物ちようだい」と耳元で囁いた。二人は車に移つた。チェアを倒すと、野獣が鬣^{たがみ}に食らい着くようにマリーンは幸一郎の喉に食い付いてきた。肌全体にごく薄い金色の毛が密集して、臍の周辺から下腹部へ伸びて性毛につながっている。夕陽の沈む時間がウインドウに映り、刻々と光の位置が移動して行く。金色の性毛が

夕陽に映え浮かび上がっている中へ、亀頭を当て背中と首に両腕を回し悠然と待機し静かに和合した。——恥骨が激しくぶつかりあった。マリーンは猛烈に腰を回してきた。乳首を舌の中で転がし交互に噛んだ。と、急激に抱きついたらまます半身を起こして目を見開いて幸一郎の顔を覗みつけると睫毛が光った。幸一郎とマリーンが一つの影に溶け、沈もうとする夕陽と神々しく映発している。

「右はイギリス、左はインディアン？」と両掌でマリーンの額の生え際の頭髮を後ろに束ねながら両眼を見詰めて言ううと、マリーンは頷いて幸一郎の両の臀部を強く掴んで爪を立てる。離してマリーンは両手を空飛ぶ鷲の翼のように広げた。幸一郎はマリーンを背後に倒し、水平線に沈んだ太陽の残光が揺れる空の下、腰を定めてマリーンの幽艶な肉の波に乗って休息を忘れて泳ぎ続ける。

その夜、マリーンはサンデイゴのバス・デポートの裏にある「カレッジ・イン」へ男友達とダンスに行くから一緒に行こうと誘われた。その男ジエフは同性愛者で人畜無害ゆえ、マリーン自身、周囲に男がいると思わせるためのダミーであった。修士の研究に時間を割かれなかったための知恵だ。ジエフにとっても女がいることを示すことになり、同性愛者であることをカミングアウトせず、自らの秘密を守る相殺関係にあった。幸一郎はスクリュードライバーをがぶ飲みし、マリーンを独り占めした。

歩く……

幸一郎は驚愕した。ここはアメリカだぜ。突然、「良くぞ、日本やってくれたな」と心の中で叫び、嬉しくなつて涙ぐんだ。今、本当にアメリカに居るのか不思議だった。マリーンがすかさず、「コウイチロウの国の歌で『スキヤキ』でしょう」と言うのでスキヤキの説明をして、本来の意味は「LOOK UP AND WALK……」だと訳すと、「ちよつと説教調があるかな？ いい詩だね」と言った。

ジエフにマリーンの家にも送ってもらい、ミッションベイが一望できる、マリーンの写真が一堂に飾られた部屋で、彼らに見詰められながら日曜の朝まで絡まっていた。目覚めて、眼下の湾に貸しヨットがあるというので散歩がてら、一緒にデインギーに乗り、沖に出て海の香りを満喫した。手で海水を撫ぜると走水を麗子と散歩した思い出が息を吹き返してきた。マリーンが横須賀での休暇の断片を話してくれると無性に母と麗子に会いたくなつた。

麗子は高校二年になると、現役合格を目指して土曜日は学校を休み、久下田駅始発でお茶の水の駿台予備校へ通い始めた。理数系の大学教授でまん丸の金縁眼鏡を掛けた講師が「人生に一度、命を縮める勉強をして勝利するのだ」……微笑みを浮かべ激励する授業に嵌まった。相性がいい。

この円形ドームのダンスホールで海兵隊員、近郊の学生若者、恋人たち、マリーンのような明日は死ぬかもしれない夫を待ち続ける女たちがツイスト、シルバで巨大な熱気の渦を巻き上げ、汗を散らして踊り狂っていた。

閉店間際を暗示させるバラードの調べが流れると、ダンサー達は密着して互いの生きている証の鼓動を、肉を通して交流させ暗い空間で動いていた。幸一郎は酔ってよろけてしまうのでマリーンをきつく抱き締め支えられて踊っている。突如、サラ・ウォーンの「インディアン・サマー」の調べが聴こえてきた。意識が浮遊している頭の中で自分の農場を思い出していた。そして、自分勝手にこの歌は——アメリカの大地から乾燥した熱い風が大西洋を渡り、アメリカ南部の大農場や内陸のサンベルトを吹き上げながらカリフォルニアまで旅をしてくるのか——などとイメーシの断片を貼り付けていた。

皆がおの自分の席に戻ると円形のホールの板張りが脂で光り、天井の照明を吸い取っていた。剣闘士が勝負を終えて去った空虚な円形とも思え、皆が集まれば希望の生まれてくる円陣のような気もしていた。マリーンと寄り添い円陣を見ていた。と、突如、「日本語」が幸一郎の両耳へ突き刺さった。

上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 泣きながら

常時、学生ホールで寸暇を惜しんで予習、復習をして、早速で幸一郎が待つ聖橋へ向かった。防衛大学の制服を着ている幸一郎は惚れ惚れする容姿で手を握り合い定宿にしているホテルへ歩いて直行し、麗子は幸一郎を裸にして体を求めた。麗子は深い快樂で燃焼して肌が白く輝き、一層体全体が華やかに美しくなつていく予感がある。防大一年時は外泊が不可であった。「麗子。明日は『銃剣』で来られないよ」と耳元で囁くと紅潮した顔で麗子はベニスを握ってきて、幸一郎に馬乗りになり男根を自分のものにした。

幸一郎は野獣の力を腰に込めて麗子に挑み、麗子が声を荒げて呼応していると幸一郎の男根が子宮に吸い込まれている律動が幸一郎の背骨に沿って快樂の熱砂を天空から呼び寄せ弾けていった。麗子の体から一切の邪念は消え、精神は愚直に一心不乱に医学部の受験科目の征服へと全力で向けられていた。いまや麗子にとって受験は苦しみでも努力の維持でもなく、楽しみの領域にあった。日曜日、勉強に快い疲れを感じながら夕方上野駅を後にして家路に就くのだった。

防大は年間を通して二年時一回、三年時一六回、四年時二一回の外泊が許可される。麗子は医学部に合格し二年になった。——麗子。俺、アメリカへ行くぞ……」幸一郎にしがみ付いて恍惚の眼を剥いて全身が痙攣している麗子に言った。「防大の研修？」「違う。自衛隊へは入らない。

二年間だ。俺は、あのチンピラが自死したことは俺の過剰防衛が起因しているように思えてならないんだ。どうも気持ち悪いんだ」幸一郎は自分自身の体に彼の家族の憎しみや怨念が憑き物になっていることを話した……。麗子は、それは考え過ぎて、新聞の発表、家の近所はもちろんのこと、町中の噂は幸一郎を絶賛していることを力説した。

「別れようというの。幸一郎さん。憶えている？ 鬼怒川。私を婚姻色に染めたわね。あなたの精子はあの日から今日まで私の体中を泳いでいるの。これからもずうっと泳いでいるの。女は哺乳動物なの。私が別の男と結婚しても、私の体にはあなたの遺伝子が泳いでいる。私は、あなたにそっくりな子供を産むのよ……」

潮風が吹き、帆が張り、マリーンの真つ白なムームーが風を孕んで性器を陽光に曝し海を滑って行く。マリーンの解れた髪を指で梳ると薄桃色の喉が光を反射させた……。ヨットから降りて帰りに買い物をして、登り坂をゆっくり歩きながら家に戻ると、愛し合い、二人は全裸のまま料理を作り、食事をした。マリーンに腕枕をしていると「コウイチロ、あなたにとってアメリカとは何？」と聞いてきた。「アメリカは、世界の国々のガス抜き寄せ集め、つまり避難所国家だ。イギリスに居られない人達が避難所を求めて、やってきた。定住すると、次に自らの希望の構築へと

部屋で、激しく求め合った。時には一時間、マリーンは交接のまま論文の話を進めるときもあった。また、突然、「何故、インディアンの一〇代の自殺率は白人の百倍も高いのか？ 平均寿命が四三歳なのだ？」と日本人の国民性の発想を探っていると考えられるような質問を始めた。幸一郎が作ったランチを食べ、抱き合い昼寝に充てた。愛し合った後だから、吸い込まれるように眠って目覚めると、頭がすっきりし、お互い別々に午後七時まで研究に没頭する。それから一緒に風呂に入り、マリーンの体を指圧して疲労をとってやる。それでも強く幸一郎の男根とマリーンの性器は独立した生き物として穏やかに、また激しく求め合う。それが日曜の過ごし方になった。月曜の早朝にティファナ組がピックアップしてくる。

トマトの最盛期が徐々に過ぎて行くこと仕事も忙しくなくなり、ダウンは九月から大学に行くことになり別れた。学生達がいなくなり、台湾の助教授たちも去っていった。自動車の免許は、ペーパー、車持ち込み実技試験に合格して、その場で経費五ドルを収めて取得できた。

幸一郎が渡り鳥グループと食堂で、来年の東京オリンピックの紹介番組を見ているときだった。エジプトが「日本では街を裸足で歩いているのがないな」とイタリアの顔を見ながら幸一郎に話しかけてきた。とその時、アルトゥロが耳打ちしてきて部屋に戻った。「三三三〇ドル儲けた

取り掛かった。オランダ、ドイツ、フランス、日本……みんな同じ。だから、アメリカは自分の外国の親戚が困った時に、頼まれもしないのに救済に出かけるんだ。ヴェトナムが共産主義になったら人々に自由がなくなるだろう、だから、アメリカは戦争するよ。アメリカは。おせっかいではないよ」と延々と話し合った。

潮風を吸ったマリーンの髪を撫ぜながら腹が落ち着くとマリーンは幸一郎に性を求めた。幸一郎はマリーンの両眼に映っている自分の顔を見て「右がブルーでイギリス。左が黄金色でインディアン」とまた言った。マリーンは笑みを浮かべ喉を反らして、壁の祖母の写真を見ていた。その横の若き酋長の息子の精悍な顔に幸一郎は似ているなど自分で納得していた。

——キャンプでは単調な仕事が続いていた。マリーンのところへは毎週土曜の夜に通った。性愛に耽り、日曜の朝を迎える。いつしか幸一郎はマリーンとは別の部屋で国際法の勉強に熱中するようになった。午前中は顔を合わせずにマリーンは「ネイティブ・アメリカンの政府指定保留地政策における社会的行動科学と連邦政府の関与の功罪と展開の考察」と謳った論題で修士論文を書いていた。幸一郎は静かに勉強が出来ることが無性に楽しかった。一二時きっかりにマリーンがノックをして先祖の目の玉が睨んでいる

よ、感謝の気持ちだ」といって二〇〇ドルを渡された。遠慮すると、ガラガラ蛇の七年ものの鈴と性毛のおかげだ、と聞かない。ありがたく貰うことにし、急いでテレビのところへ戻ると、ステイブが入ってきた。「神野、顔、貸せ」外へ出た。肌寒くなった。「もうすぐクリスマスだな。御利益あった。ドーンと来たよ」と言っただけでも一〇〇ドルを裸で渡された。サラの性毛の半分をプレゼントしたからだ。

ステイブのように二か月前から、「クリスマス、クリスマス」と騒いでいてもいなくても、確実にクリスマスはやってくる。

十一月二日だった。その日、朝食の時、誰かが今日は何曜日だ、と質した声が聞こえた。すると、酒気を帯びた酋長が「金曜日、魔の金曜日だ」と答えた。

いつものように仕事に出掛けた。日中、ケネディ大統領暗殺のニュースを農場でフォーマンから聞かされた。仕事を終えて皆、テレビに張り付いた。銃声が鳴った。大統領の頭がガクンと倒れた。誰ももなく「今夜はコヨーテがよく鳴くな」と言った。

夕食には幸一郎の大好きな「モーレ デ オヤ」をアルトゥロが作ってくれた。骨付き肉にチレ、トウモロコシ、ポテト、ニンジン、ニンニクを、肉がポロポロになるまで煮込んだスープだ。

第2回 文芸思潮 エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の賞揚によって文芸創作エネルギーを顕彰する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格●不問

応募規定●

400字詰原稿用紙5枚～10枚。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず閉じること。

別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。

1次予選通過者には通知し、希望者はインターネット・ホームページに掲載する。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピーも可）。

応募先●〒158-0083東京都世田谷区奥沢7-15-13アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

Tel & Fax 03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金3万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金1万円

奨励賞■賞状・記念品

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

発表●予選通過作品発表は7月発売の「文芸思潮」12号、またインターネット・ホームページでも行なう。受賞作は2006年9月発売の「文芸思潮」13号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

締切●2006年4月30日（当日消印有効） 主催●アジア文化社

※主催者から

日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

ESSAY 賞

——誰もわからなかった。カマボコの後ろに立つ電柱の取手に革バンドを掛け、酋長が首を吊った。酋長はあの真っ赤なジャンパーを着ていた。左右の袖口から、トマトを支える棒を通して酋長は両手を広げ、首を伸ばし赤い驚になって天空に向かって飛んでいるようだった。

次の日、シャワーを浴びながら「サモライ」と言って呼んでくれた酋長を思い出しているとステイブが入って来て「言ったろ、彼氏は危ないって。やつら一九歳と四九歳は魔の歳なんだ。アル中で死ぬ歳が四五歳。神野、人間はなあ、人生を掛ける目標がなくなると死んじゃうんだよ。俺はギャンブルに人生掛けている。マエストロ閣下のバイオリンと同じさ。希望があるんだ。だから死ねないよ」と一本も毛のない頭に石鹸を擦り付け洗いはじめた。

クリスマスシーズンが来て、麗子から手紙が届いた。おばさんは車を買って仕事へ通っていること、茶子がおじいさんになったこと、来年は医学部の三年になり、アメリカで変な病気になったら治してやるから、私を「女」にしたことを肝に銘じて「嫁」にすること、と書いてあった。

日本刀は二〇〇ドルに値切って購入した。ついでに電話して、サラがないのはわかっていたが、ご利益があった旨を伝言してもらった。

ジェフと二人、マリオンにターキーをご馳走になった。ジェフのケネディ大統領への評価は厳しかった。日本では

人気が高いことを幸一郎は説明した。アメリカの希望の星が亡くなり二人は考えていた。マリオンはシャンペーンのコルクが飛んで、軽快な音がした。三人は月光に照らされた海原を見た。神の霊が海を被っていた。マリオンは叫んだ。

LOOK UP AND WALK



人は世につれ

浪川弘之

○月×日

私の日記を振り返ってみるに、日本で一番ありふれたサラリーマンの一人として、悲しいかな、その内容の大半は、心情も含め、仕事のことに関してである。しかし、それは無理がないとも言える。私の人生の殆どは仕事そのものであったのだから。

私が定年退職するまで、この日記はやはり仕事の記事とそれに対する悩みや迷いなどで溢れ返ることであろう。日記ではあるが、毎日つけているわけではない。関心事があった時のみ書く。それでなんとか続けられてきたのである。非エリート社員として私の出世は遅々たるものであった。二十数年間勤めてやっと今課長である。某自動車メーカーの系列の車体製造会社が私の勤務先だが、わが社に入っ

いる二十幾つの零細下請け企業の管理と彼等に対する仕事の割当（発注）が私の役目である。会社にとってかなり重要な部門のだが、泥を被らなければならない時があり、また社会的に詰め腹を切られるリスクも抱えている部署なので、重要ではあるがキャリア組のポストから外されている。おそらくこの役職が私にとって最後から二番目あたるのポストであろう。そして実権を振るうポストとしては最後のものと思われる。

○月×日

中国人女工楊桂春と李淑芳、陸恵香の三人が日本人女工達によって集団リンチを受ける。

とは本来何の関係もない。ただしそれは表向きにそうなかだけである。とにかく新聞沙汰になっては拙い。速やかにこの騒擾を密封してしまわなければならない。

当事者及び雇用者に嚴重注意すると共に下請会社の責任者を通じ全職員に速やかに箝口令を敷く。

楊桂春は二七歳、留学生の資格で来日しているが、勿論学校へなどは行っていない。生産ラインの一要員として皆

と同じく何箇所かを担当しており、作業行程の変化に応じてその持場に付いている。ただし何をやらしても一テンボずれていて全体の進行を遅らせ日本人工員達をいらいらさせてしまうという厄介な存在である。

二人の密航者、李淑芳は三二歳で元主婦、陸恵香は一九歳で農家の娘である。

前者は性格が頑固なためリンチされたと思われるが、後

優秀賞 受賞の言葉

浪川弘幸

先般偶然「文芸思潮」のバックナンバーを拝見する機会を得、そこに収録されております第一回銀華文学賞応募の諸作品の素晴らしさに驚嘆すると共に、到底自分などの作品の出る幕ではないと痛感しておりました。優秀賞の「植物葬」を題材とした作品に圧倒されたのも東の間、果ては賞を逃したらしい作品で「宇宙葬」を扱った作品の短い紹介に目が行き、そこに表現されているイメージに自分など遙かに及ばない資質の作者であることを肝に銘じさせられました。

今回もまた、この様な数多の選り抜きの作品が応募されたことと思いますが、その中から不肖私の作品が優秀作の一つに選ばれたことに驚きを感じております。同時に、顕彰を逸した極上の作品群にも思いを致しております。恐らく、一、二の欠点や書き足りない部分があつての賞漏れと思われれますが、己の

作品を一層深めるまたとない好機ととらえ、更に素晴らしい内容に仕立て上げ、自己の生涯の記念物として完成されることを念じております。

受賞の感謝と共に、皆様方のなお一層の発展と努力をお祈りする次第です。



なみかわ ひろゆき

1939年（昭和14年）大工の三男として横須賀に生まれる
金沢大にて化学、東洋大にて国文学を学ぶ
現在車輛関係の自営に従事

者の理由については日本人女工の彼氏を寝取ったためという噂がある。

被害者が密航者等でもあり、本人達が署へ垂れ込むなどの心配は勿論無いが、目撃した日本人工員の誰かの口からことが漏れる恐れがあり、その点でも再度下請会社の責任者に嚴重戒告する。

○月×日

会社お抱えの診療医の報告によると三人の被害者は全治二週間、三週間の傷だという。

顔などの痣は気になるが勤務には支障なくすぐにも職場復帰できる状態との由。

雇主に言い含め、被害者の三人の女工達に厚化粧させ、傷を目立たないようにして出勤させることを命ずる。

中国人側には今のところ不穏な動きは無い。中国人工員には男子もかなり混じっており、楽観はできない。中国人のグループに、フィリピン人、ブラジル人、タイ人、イラン人が結束すると、日本人工員を上回る大勢力となり危険な状況となる。とにかく後始末を急がなければならぬ。

○月×日

中国人女工達の雇い手たるアジア興業の出張所長、加害者の日本人女工達の雇い手であるS流通産業の支所長、同

かしそれを言っておしまいである。自分で自分の首を締めることになる。そのことになるべく触れずに両者アウンの呼吸で妥協点を探ってゆかなければならない。

氏の言葉の含みから察すると、モグリの外国人労働者達の身に触れるようなことは一切しない。その代わり自主的に住民税を納めて欲しいとの要望である。納め方がどんな形を取ろうと構わない。〃人数に見合う額〃を納めてくれればよいとの意向である。

その線に沿って必ず動くことを氏に伝え、家族への土産と、その中に寸志を添え、氏をハイヤーにて送る。

○月×日

二三歳になる息子のことで妻の催子より苦情を言われる。ほぼ四年間息子は部屋に籠り切りである。

彼の仕事はテレビを見ること、オーディオを聞くこと、大飯を食らうことの三つである。

つくづく息子の面倒を見るのが嫌になったと催子は言う。何とか出て行って欲しいのだが、亭主よりも二回りも体の大きい若者を暴言と力づくで家の外へ追いやるなどとも出来ることではない。兵糧攻めにするという方法が最初彼女の頭に浮かんだらしいが、彼女はすぐにそれを断念した。食事を与えられない報復として相手は恐らくこの家に火をつけるであろう。催子はそれを考え、兵糧攻めの方は

サンワ人材派遣の担当課長ら呼び出し三者で協議を行わせる。

被害者に対する陳謝と医療費名目の慰謝料小額と、加害者達に対する再犯防止の念書、及びそれが破られた時の報復措置の宣言などを協議し決定させる。

○月×日

市税務課職員の景浦氏から会いたいとの連絡有り。

夕方四時、小料理屋〃呑龍〃にて氏と会う。氏から、市の赤字財政補填のためわが社で働いている多数の外国人労働者の住民税をこれより徴収するとの意向を告げられる。

「景浦さん。彼等はそれなりに市の財政に貢献しています。所得税や住民税は払ってなくても、間接税は色々払ってます。彼等は市のスーパーで買い物をして、コンビニを訪れ、商店で買い物します。またタコ部屋を出てアパートを借りている者もいますし、電車やバスにも乗って運賃を払うこともしています。商店や家主や交通会社を通して税金を納めているわけです」私はやんわりとそう氏に告げる。勿論「そうか」と言つて景浦氏が引き下がるわけではない。

景浦氏を派遣した市長の意志も相当に固いことを感じ取る。

くどいが下請会社の社員はわが社の従業員ではない。し

断念したのである。次に小遣いだが、これを出し渋ることによって嫌がらせをしようとしたようだが、出刃包丁を突きつけられて彼女はこれも断念した。

どうにもこの無精で陰気な若者を我が家から追い出すことができない。

私は家内と違い、仕事のため家に戻ることは殆ど無いので、この若者の存在に痛切な苦痛を抱くという程ではない。食事など大型犬を一匹飼っていると思えば我慢できる。ただ彼の小遣いの額が私と全く同額であることが気になる。

雨のためゴルフが中止となり家に居た私に向かつて催子が長男の問題を切り出してきた。

「あのニートに何か言つて上げてよ」

催子はニートという言葉で息子を定義づけた。

ニートというのは、学力学歴技能を有さず、勉学の意志も、技芸を身に付ける意志も、職に就く意志も無く、無気力に毎日を通ぐ若者達のことを言うらしい。なるほど我が家の長男にびつたりの表現である。ニートという言葉の意味が現在一つの大集団を意味していることを同時に知り、私は力強い味方を得たように思った。我が家の息子だけが特異な存在ではなく、自分達と同じ貧乏籤を引いた親が世に沢山存在していることを知って私は大層心強さを覚えた。私が部屋に入つて行くと、畳に寝転びタバコをふかしていた若者はジロリと視線を私に向けた。

「イナオ、おまえいつ迄こうしている気だ」
私はたぶん一番下手な切り出し方で息子との対話に入っていた。

二人の間に沈黙が続く。やがて、「ほっとけよ、俺のことなんか」

そう言う若者は面倒臭そうに灰を灰皿に撒いた。冗談じゃないと思つた。

「ほっとけと言つたつておまえ、一生こうやって過ごすのか」

「そんなことは誰にも分かんねえよ」ニートは軽蔑するよ

うに私を見やつた。
「おまえ、いつか自分が『負け組』だつて言つたことがあつたな」

「ふーん……、覚えちやいねえな」

「勉強で負け組だつたなら、仕事の方でやり返せ」私は語

気を強めて言つた。
「あんた、頭おかしいんじゃないのか。勉強で負け組になつたつてことは、仕事でも負け組になつたつてことなんだ」

「負け犬のようなことを言うな！」私は怒鳴つた。

「バカヤロー、何をウジャウジャ言つてやがんだ、出てけつ！」

息子は体を起こした。

りや、製品は出来上がらない」

「その外国人労働者と一緒に働いてる日本人野郎共は、い

ずれ仕事場から追い出される、そうだろう？」

若者の瞳が冷たくなつた。彼の言う通りだつた。
「あんたはワルだよ。いや、ワルに利用されてるバカつて

ところかな」
若者は他人ごとのように言うとりモコンを使ってテレビ

のチャンネルを切り換えた。
私は腰を上げた。この次は別の切り出し方でこの若者の心に入つてゆこうと思つた。思つた程この若者がバカでないらしいと知つてその点では安堵した。

○月×日

下請工員のM、S、Kの三人と炉端焼屋で顔を合わせる。三人を近くに呼び寄せ談笑する。

教養としては共に下の部類に入る私達四人である。会社から解放された後は仕事の話は一切御法度という高尚な座右銘は通用しない。仕事に関する嘆き、不満、上司に対する悪口などで座は沸騰するのが普通である。

「おまえ達、今日は俺のおごりだ。好きなもの、注文していいぞ」

Mは私の言を聞いて信じられないという顔をしていたが、やがて間の抜けた笑みを浮かべ頭をペコリと下げた。表情

私は背筋がすーつと冷たくなるのを覚えた。腕力ではとてもかなう相手ではない。

私は逃げようとして腰を浮かした。

しかしここで逃げては女である家内と全く同じではないか。ここはポコポコにされても仕方がない。家内が踏み込めなかつた先に踏み込まなければ男ではない。

「おまえ、一労働者として働いてみないか」私は浮かして

いた腰をおさおさと下ろした。
相手は立ち上がりとしていた体を不承不承元に戻した。仰向けの姿勢で彼はタバコを取り出すとそれを不味そうにふかしはじめた。

「一労働者」この手垢に汚れた語がこのニートたる若者に意外なことに何らかの思いを引き起こしたようである。

「今は日本人も外国人も一緒になつて働いて一つの製品を仕上げてる。どうだ、単純労働だが、それでも労働に変わりはな

ない。賃金も安いが、やってみないか」

若者はタバコをふかしつつ考え込んでいた。

「明日、父さんの勤めてる工場に一緒に行こう」

その煙の行方を見やつた後ジロリと父親の方に目を向けた。

「単純労働か……」

「そうだ。単純労働だが、単純労働も必要なんだ。でなけ

の乏しい顔に窺うような笑みが浮かぶ。

「ゴツォーサンです。ではお言葉に甘えて」

Mが言い、彼は二人の仲間の方を向く。三人はひそひそと相談し合う。私は氣を揉む。

私は目を瞑るような氣持で壁に張られてあるお品書きの全てに目を通す。一品千円以上の物が無いことを確かめ胸を撫で下ろす。

「課長、焼き鳥の盛り合わせとおでんのセット、それに海老の塩焼きと決まりました」

Mが報告した。報告を受けつつ私はそれらの合計額を暗算する。三千円以内におさまるとみて私の心の波立ちは消えた。

「じゃ、こつちも焼き鳥とおでんにしよう。おでんにはツミレを三つ入れてくれ」

私は立ち働いている厨房着の若者達に向かって言葉を発した。

「トリの方は何にします？」

大きなコンロの前で焼き鳥に取り組んでいる兄さん株の男が言う。

「レバーをたれで二本、タン塩二本、シロとコブクロを一本ずつ」兄さんが私を見やる。

「そうだな。コブクロは塩、シロはたれにして」

私の言に兄さんは頷き、レバー、シロの串をザブリとた

れ壺の中に入れ、それを取り出すと網の上に並べる。次いで網に載せられたタンとコブクロには忙しく胡椒と味塩が振りかけられた。

品物が来る間に付き出しをつきつつ四人でビールを注ぎ合う。

「課長、もう少し元値を上げて下さいよ。でなきや、俺達干上がっちゃいます。ポーナス、退職金無し、昇給無しで、手取り30万そこそこんんですから」

Mが言う。酒の席だからこそ通常では全く越えられない敷居を越えて彼等はあけすけに私に仕事や生活の実態を告げてくる。いわば酒が私にとって工場に集積された常々の情報の収集源の役割を果たしている。

「うちは一人時給2千円であんた達の会社に人を依頼してる。手取り30万でえと、何%あんたの会社はピンハネしてんのかな」

「俺とSは28%ピンハネされてますが、Kの方は32%です」

「残業を入れて月ざつと50万……その7割として35万、保険料や税金その他を引かれて手取り30万か」

「そんなとこです」Mは無然として言った。

ギリギリのギリギリだな、と私は思った。ポーナス、退職金、昇給一切無しの給料30万である。日本人労働者相手にこれ以上コスト削減が出来ないことは明白だった。

うちが発注価格を40万に下げても、下請会社はなお悠々6割以上ピンハネできるのだ

かわいそうだが、MやS、Kなど日本人労働者はどう足掻いても淘汰されざるを得ない運命にある。

「おいおい、お前たち、遠慮するな。注文追加していいぞ」

私は思わず大声を上げていた。自責の念がそうさせたのであろうか。

三人が気味悪そうな目で私を見た。「いいんですか、課長」

Mが私の顔を覗き見た。ノンキャリアの、出世組でない私の立場を彼等はよく知っている。年収は彼等の2倍程だが、せいぜい月賦で家が建っただけで極めてつましい日常生活を送っていることを彼等はこの目で見ていた。これまで一緒に飲んだ場合全て割勘でやってきている。一体何が起ったのか、と彼等が怪しむのはもつともである。

「心配するな。早く注文しろ」人が変わったように私は言った。

三人は再び気味悪そうに私の顔を見やった。「課長、酔い過ぎたんじゃありませんか」

「いいから、もつと飲め。俺も飲むぞ」

そう言う私は泡の消えたビールのグラスを一気に干した。

“生かさず殺さず”これがどの大企業や元請会社も取っている下請会社への発注価格の原則である。

50万はまさにそのピツタリの価格だった。

「君達んとこに、外国人労働者は何人いたっけ？」

「うじゃうじゃ居ますよ。半分は外国人です」Mは焼き鳥を箸で食い千切った。

「外国人にも二種類ありましてね。密航してきた奴等には会社は2割しか与えてません」

「2割か。じゃ、10万だな」

「それでも奴等にや高給なんです。なにしろお国じゃ、給料は2万か3万。1万でとこも珍しくないそうですから」

「2種類って言ったが、もう一つの方は？」

「不法滞在の奴等です。こちらの方は3割与えてるそうです」

「15万か」

「そういう計算になります。15万貰って奴等はウハウハしてますよ。切りに切り詰めて月10万貯金して、3百万貯めて国に帰れば、家一軒建つそうです。日本の1万円が10万円の価値を持つ国ですから」

私はおでんの皿からツミレをつまみつつ考えた。

（50万のうち35万ピンハネしても、相手は3年後に家一軒建てるのが可能なのだ。これからはなお一層外国人労働者を使うよう下請会社を励まさないければならん。例え

その様子を見ながらMが白衣の従業員に尋ねた。そろそろ引上げ時と思っただけらしい。

「お兄さん、お茶漬やってる？」

「おにぎりなら、ありますけど」若者は包丁を使いながら答えた。

「おにぎりか……」Mは考え込んだ。

「課長さん、お酒の後はお茶漬の方がいいですよね」

Mはカウンターに腕をもたせながら私を見た。

「どっちでもいい。いや、やっぱりお茶漬の方がいいな」私は頭がガンガンしていた。勘定を済ませ私達は店を出た。

「課長、顔色悪いですよ」Mが氣遣って言った。

炉端焼屋から七、八分歩くと場末の飲食店街に行き当たる。その中の一軒に小さな構えの小料理屋があった。暖簾を

分けて四人は中に入る。

客は誰も居らず、狭い厨房でカタコト音だけが生かして、そこから高い声でいらっしやいませという女将の声が飛んで来た。

女将が前掛けで手を拭きながら笑顔で姿を現す。この肥った女は元Sボデーの女子工具で、島根の松江の出身だった。切れ長というより、閉じているかと思われる程に細長い目の持ち主で、同じ顔立ちの、動物名の四股名を持つ郷

土力士の熱烈なファンだった。今は親方となっているその力士が少年時代T大に入れるぐらいの飛び切りの秀才だったことを褒めたたえるのが彼女の口癖だった。二十年近くも工場で働いていたのが、最後まで男が付かず、それを覚悟していたのか、小まめに貯めた貯金を元にして四〇の半ばを過ぎてここに小料理屋を開いたのだった。水商売などやつたことのない女だったが、煮物やその他の小料理など将来のために心掛けていたものか、「おふくろの味」を感じさせる家庭料理が得意で、酔い疲れた後工員達が、路上で倒れ寝る代わりにここに寄り、体を横にした後、酔い覚まし飯を掻つ込んでねぐらへと向かうそういう場所になっていた。

けつきよく四人は茶漬前に徳利を四本注文した。

徳利を傾けた途端、突然若い女がお盆を手にして現れ我々をびつくりさせた。

今迄この店に居なかつた女である。年配の女がアルバイトとして雑用をこなしている姿はしばしばお目にかかったが、若い女を目にすることは初めてであった。

井の様に大きな茶碗に入った付き出しを四人の客の前に置いて女はニツと笑った。

「この娘、どこの国の子？」私は聞いた。

一七、八であろうか。色の浅黒い所を見ると、中国人ではなく、それより南の国の人間であろう。

しかし臆してはいなかった。

「わたし、サリー。よろしく、みなさん」そう言って微笑した。

「サリー君。ここでママの料理をすっかり身に付けて、将来はタイのチェンライで日本料理店、いや小料理屋を開くんだな。それまで辛抱しなよ」

言葉の意味がいくらか分かったのか、娘はにっこりと微笑し領いた。

一時間程寛いだ後私達はお茶漬を平らげ外に出た。急ぎ足になり、終電車に間に合うよう駅に向かった。

○月×日

財団連の会長をしている前田氏の発言が今朝の新聞の第一面を大きく飾っていた。

前田氏は天下の大自動車メーカーYZモーターズの社長として辣腕を振るわれた方である。不肖我が社もYZモーターズの系列の一員として後塵を拝させて貰っている。我が社は社運が傾きかけた所をYZモーターズの資本の注入を受け生き長らえた会社である。系列といっても肩身の狭い存在である。親会社のトップとして氏を雲の上の人として崇拝してはいるが、どこことなく実感が薄い。それは根っからのYZモーターズの身内ではないせいであろう。

氏の発言は――

「タイのチェンライって町の出身らしいの。体を売らせられる所だったのを、私が150万出して貰い受けたの」

「買ったのか、人間を」

「人助けよ。体売るより、ここの仕事の方がよっぽどましよ」

「それはそうだが……。給料払ってんのか」

「毎月5万上げてるわ。他に私の立替分150万に毎月5万当ててるから、給料10万でとこね。悪くないでしょ」

「朝から晩まで使ってたんだろ、おまえ」

「でも、日本料理は覚えられるし……。三食昼寝付きで家賃も要らないし。毎月5万そっくり貯金して、五年程辛抱してお国に帰れば、向こうで日本の小料理屋が開けるでしょよ」

「ふーん」

「工場なんかで、機械の代わりなんかしてるよりよっぽどましよ」

「そうかもしれんな。名は何て言うんだ」

「サリーちゃん、ね？」ママが顔を向けると、女はにっこり微笑した。

「サリー……。どつかで聞いたような名だな」

「テレビでそんな名の女の子が出てきたかも。さ、サリーちゃん、自己紹介して」

タイの娘はお盆を胸に当てながらちよつともじもじした。

外国人労働者に長年門戸の開放を渋ってきたわが国だが、出生率は下がる一方で、この先若年労働者の就業率も先細りすることは確実であり、産業の衰退を招かないためには、逡巡してきた外国人労働者の受入れをこのさい一気に押し進めるべきである。また若い外国人労働者の加入によって社会保険料を支える裾野を増やし、危機にあるその面での財政健全化を一刻も早くはかってゆかなければならない……これは財界及び有識者の総意であり、首相に強く決断を迫るものである、そういう趣旨であった。

私は原則的に氏の発言に大いに賛成である。よくぞ言ってくれたと思う。同じ仕事をさせるのに3倍も金の掛かる日本人労働者は早急に一掃しなければならぬ。そう思いつつ大いに肝を冷やしてもいる。というのは日本に労働人口が足りないというこの大嘘がちよつと頭を巡らせばすぐばれてしまうからである。実は現在わが国には労働力は有り余っている。それどころか年々リストラリストラで労働力の余剰は増える一方である。失業率4・3%、200万人の青年が職を与えられず、同じく2百万人以上の中高年齢者が毎日ハローワークに通っても就職を拒否されている。これにフリーター、アルバイト、パートなどの半失業者を加えると国内の実質失業者は空前なものになる。更にこれに就職する意志さえ奪われてしまったニートたる若者70万が加わる。外国人労働者を受入れるどころか、世界中

に向かつて就職運動を展開しなければならぬのが、わが国の実態である。この実状を政府は勿論知っており、経済界及び有識者達の「若い」、または「安い」外国人労働力の大量導入の圧力との板挟みにあって、否とも心とも態度を明らかにできず、けつきよくお手上げの妥協策として、裏口から入ってくる外国人労働者は大局的には見逃すという結果になっている。この状態こそが我々現場の人材取扱部門の理想とする所である。我々は高い外国人労働者などには要らない。もぐりの外国人労働者のみが日本人労働者の3分の1もしくは半値という格安で使えるのだ。前田氏をリーダーとする外国人労働者導入圧力が強力な圧力の内に止まり続け、それが決して実現しないことを祈るものである。

○月×日

協力会社の社長達で構成されている親睦会の慰安温泉旅行に招かれる。

外国人労働者の雇用に関し市の担当者と常々アウンの呼吸で接し、何かと穏便に処理して貰っている借りを幾分なりと返そうという気らしい。

彼等の招きを大方断つてきている私であるが、今回はそれを受けることにした。懸案の外国人労働者の「住民税」の問題がまだ最終決定に至っておらず、この機会に彼等か

彼等が一番恐れているのは外国人労働者達の所得把握にまで手が伸びることである。

それによつて芋蔓式に色々なことが暴かれて行く。

その辺を不問に付す約束を間違ひなく実行して欲しい。

税務署長と市長とでアウンの呼吸でその辺りをぼかしておくことを絶対忘れないで欲しい。

それとの取引であることを彼等はくどく私に告げる。所得税を納められるほど稼ぎのある外国人労働者はまずは居ないことを税務署長も知っており、市から一言あればそれでは済む筈と私は予想している。

私は景浦氏とうまくやることを彼等に約束し、この問題は一応落着した。市と税務署が条件を飲んだ場合均等割の住民税は下請会社側が全て被る（かぶ）ことになった。

○月×日

催子に再び厳しく言われ、長男イナオの部屋に決死の思いで踏み込む。

ニートは今日もまた仰向けの姿勢のまま天井に向かつて何やらブツブツひとりごちていた。

ノックもせず薄汚い中年男が部屋に侵入してきたことを咎めもせず、無反応である。

「イナオ、どうだ。部屋ん中に一日中くすぶってるのはもうあきただろう。明日あたりから父さんの行ってる工場で

ら最後の詰めを得て市に速やかにそれを報告しなければならぬ。

外国人労働者の中で美貌の者が五人程同伴してきており、余興としてその者達がお国自慢の歌や踊りを披露してくれた。一行は十代から二十代の娘達で、中には民族衣装を用意しての本格的演出というのもあって座は大いに盛り上がった。

「後で、一番お気に入りの娘をどうぞ」

私の耳元で囁く声があり、それは電気設備請負企業D社の社長のFであることが分かった。

私は首を横に振って断る。Fはにやにやとそれを受け流す。

外国人女性労働者の「差し入れ」の申し出は過去何度もあったが、私はその全てを断つてきている。断る度後ろ髪を引かれるような思いが残り口惜しいのだが、そういう結果をつらねている。

湯浴みの後、一人寝室に残る。

やはり後ろ髪引かれるようなやるせない気持ちでいると、踊り子達の中でも一番器量良しで且つ一番の年増でもあるラオス人の美女が湯上がり姿で忍んで来た。

私はこの度は彼女を受け入れた。

翌朝、食事後広間で会議を開く。

景浦氏の要望についての最終議論に入り、結論が出る。

働いてみないか」

イナオが怪訝な顔をしてこちらを見やった。

「こんな陰気臭い部屋で毎日過ごしてるより、単純労働でも体を動かした方がよっぽどいいぞ」

私は仰向けになって天井を睨んでいるイナオの横にしゃがみこんだ。

「オヤジ」イナオは無表情な顔をゆっくりと私に向けた。

「あんた達にオレを生んで欲しくなかった」ポツリと彼は言った。

私は不意打ちを食らって狼狽したが、言葉が陳腐だったのですぐ立ち直った。

「そういう子供みたいな言種は、小学校の時に卒業しておくんのだ」

ニートは軽蔑する様に私を見たあと、プイと天井に目を向けた。

「いいか。おまえも父さんも負け組の一員だ。だがな、負け組ってのはな、勝ち組よりずっと厳しいんだぞ。勝ち組の何倍も努力し、何倍も頭を使い、何倍も体を動かして人生を生きて行く。そうしなきゃ、生きて行けねえんだ。それが何だ。毎日、ゴロゴロと寝てばかりいて。働くことが嫌なら、死ぬ」

伝家の宝刀として、一生に一度か二度しか言っただけはないこの言葉を私はあつきり吐き出した。言っただけ

い、と思いつつ、このニートに死んで貰えればどれ程すつきりするかという思いが腹の中に詰まりに詰まっているので、ついつい口に出てしまったのだ。

ニートは薄ら笑いを浮かべながら私を見やった。

「お前たちのために死んでなんかやるもんか。オレはお前たちに取り付いた癌だ。お前たちが死ぬまで、一生お前たちを苦しめてやる。お前たちが死骸をさらすまで、オレはこういった姿でここに居座る」

私は目の前が真つ暗になった。彼のこの言葉は100%本当に違う。この陰気で危険なニートと一生このように暮らす人生を想像しただけで私は気が狂いそうになった。「ケイサツを呼ぶぞ、おまえをブタ箱にぶち込んでやる！」

私は絶望のためそう叫んでいた。

「ケイサツ？ 呼べよ、さあ、呼べ」

ニートはケータイの番号を指で押すと私に突き付けた。

私は口の前にケータイを突き付けられて後じさった。

「さあ、呼べよ。発信ボタンを押すだけでいい。ここだ。

ここを押せよ」

ニートは歪んだ笑いを浮かべながら、電話のデザインのボタンを指で示した。

私が押さないと見ると悪魔の様な顔になり、機器をゴリゴリと私の顔に押しつけてきた。

ニートは掌を動かして金を催促した。

無念さと惨めさで私はただ頭を垂れていた。

「ほれ、出しなつて。オレが大声出してもいいのさ」

ニートが苛立つて言った。私は我に返った。

「ちよつと待つてろ」

私は急いで自室に引き返し、逸りながら財布を小引出から引き出した。

「イナオ、いいな。このことは母さんに絶対黙ってるんだぞ」

そう言うとは私は財布から一万円札を一枚抜き出しそれを目の前の薄汚い掌に載せた。

掌は一万円札を載せたまま全く動かなかった。いや、それは軽く上下に動いて上乘せを要求した。

「くそ」私は渋々もう一枚財布から引き出し、それを掌の上の一万円札に重ねた。

しかし掌は引き下がらなかった。ニートはニーツとした笑みを浮かべた。そして、

「もう一枚。それでカンベンしてやるよ」そう言った。

私は悲憤この上ない思いで、残り二枚となった一万円札のうちの一枚をニートの掌の上に載せた。一万円で月の残りを過ぎなければならぬ。雨に打たれながら餌を探して歩く野良犬の姿が脳裏に浮かんだ。

いやそれはそれでよい。問題はこの「脅迫」がまだ終わ

「さあ、押せ。押すんだ、この中年ブタツ！」

恐ろしい力でケータイが私の口と鼻孔に押しつけられた。私は呼吸を止められ、恐怖のため夢中でそのケータイをもぎ取り、それを畳に叩きつけた。

「モシモシ、モシモシ、こちらケイサツです」そういう声がケータイから漏れてきた。

ニートはニヤツと笑うと赤い方の電話印を指で押し、通信を切った。

「きさま、俺をよく愚弄してくれたな」

「ふん、親面して。親が聞いて呆れるよ。この間ラオスの女を抱いたのは誰だよ」

ニートは勝ち誇った様な笑みを頬に浮かべた。

私は一瞬ドアの向こうに目をやった。髪の毛が逆立つ思いだった。催子の耳にでも入ったら、この家を叩き出されるだろう。

それにしても、このニートめ、どこからそんな私事を聞き込んだのか。

きつとあのメールとかいう胸のむかつく通信手段でこの情報を手に入れたに違いない。

ニートが手を差し出した。「ほら、出せよ。口止め料だ」私は自分のよりは優に一回りは大きい掌を呆然と眺めた。

「立場を振りかざして弱い女を手籠めにしたんだ。あんたは最低の人間だよ」

つてはいないということだ。それは永久的な有効期限を持つ。このニートを消すか、催子を消すかしかその解決策は無い。

私の人生は真つ暗闇になってしまった。

「おまえ、男だな。金貰ったからには、決して口外するなよ。もう一つ言っておくが、口止め料は一回限りだ。いいな」

私は決死の思いで言ったが、予想通りニートはニーツと笑みを浮かべただけだった。

(くそ、こいつ)

私は前途を全く閉ざされ、重い足取りで部屋に戻った。

○月×日

M、K、Sの三人が私の自宅へ面会を求めてやってきた。「外注課の課長さんに、是非とも聞いて貰いたい話がある。て」

応対に出た家内が訪問の理由を尋ねると彼等はこう答えた。

同じ屋根の下で毎日仕事に取り組んでいる仲とはいえ、彼等が私の自宅を訪れたのは今回が初めてである。何かあると感じ私は家内に彼等をすぐ中に入れるよう指示した。

「突然お邪魔してすみません」

野暮ったい三人は心から恐縮しており、体を縮めながら

部屋に入ってきた。

「どうぞ、何にもお構いなく」

コーヒーがお茶かと聞く家内に彼等はしきりに頭を下げながらそう答えた。

「じゃ、両方入れてきます」

面倒臭くなつたか家内がそう言うのと彼等は慌てて手を振り、

「いえ、お茶にして下さい」

とMが言い、僅かにためらつた後KとSもそれに同調した。

「課長さん、うちの若え衆達がまた三人クビになりました」

Mがベそをかいた様な顔になった。彼は元機械工だが、Sボデーのラインで働くようになってからは、機械工としての技術など殆ど要らなかつた。主要部分はオートメ化されておき、彼でなくても大方は勤まつた。Kは元電工、Sは塗装工出身だが、作業は単純化されており、見習い工員達が僅かな期間で彼等の代わりが勤まる程になつてしまふのだった。

勿論年に一度か二度、又は何年かに一度、熟練工でなければ対処できないトラブルが発生し彼等が晴れ舞台を演ずることがあるが、そんな時のために会社が彼等を大事にするということとはなかつた。いざとなつた時は検査部や技術

開発部、研修センター等に連絡を取れば、その道のエリート修理マンがかけつけてきてトラブルを解消してくれるからだった。

下請会社には二種類あり職種を限つて人を入れる会社とそうでない会社がある。M、S、Kの入っている会社は後者に属していたが、機械修理と電気関係の経験者が多かつた。

「後釜には色の浅黒え奴等がやって来ました。フィリピンのタガログ島出身だそうです」

「で、彼等で仕事に支障は無いのかね」

「後釜達が受け持たされた部署はそう易しくはない所なんですがね。くやしいことに、この三人が全く手先の器用な奴等で。その上頭が機敏ときてます。このあつしでさえ、下手すると奴等に負けちまうぐれえで」

Mは申し訳なさそうに言つた。

(それじゃあ、勝負にならないじゃないか)

と私は思つた。三人は何を言いに私の所に来たのか。

「このフィリピン人達はいずれ、私共よりも使い物になることは確かですが、そうなつた時会社はまちがひなく私共をクビにするでしょう」

Mの語調には悟つた様な響きがあり、覚悟を決めている様子が伝わってきた。

「私共はこの際思い切つて、大手のボデー屋さんが緊急に

れよ」

「一生懸命やります」

「頑張ります」

三人は目を潤ませながら帰つていった。

自分は事業を立ち上げたことは無い、と私は思つた。し

かし、小さな会社を起こした者の姿は頻繁に見てきている。皆不安はあつても、希望に満ちてことを起こす。だがいざ

その渦中に入つてみると全てが茨の道と言つていい。あの三人も、事業を起こすまでが花であろう。仕事はくれてやるが、彼等にとつてそれが儲からないことの方が殆どなのだ。採算が合わないからこそこちらは発注するのだ。その

現実には直面した時、彼等は呆然と立ちすくむであろう。その先の厳しい人生の行方は誰にも分からない。いざれにしても彼等には今、前門の狼として外国人労働者の存在があり、後門の虎として、赤字の仕事しか受注させて貰えない零細企業者としての道がある。ただそのことを彼等ははつきりとは知っていない。知らない者には狼や虎の恐ろしささえ乗り超えてしまつた1%の幸運も存在する。その幸運を彼等が掴むのを祈るばかりだと私は思つた。

○月×日

外注課長の辞令を受けてから五年が経つた。

ニートたるわが息子も今や二七歳である。いつまでこの

発する外注、それを当て込んだ修理板金塗装、その他何でも屋の町工場を立ち上げることにしました。納期が間に合わなかつたり、突発事故で予定から外れたブツを、課長さんともよく外部に回してますよね」

私は頷いた。

「そんな仕事を私共に下げて欲しいんです」Mは畳に両手をつき深々と頭を下げた。

「お願いします」「お願いします」

SとKも、Mを横目で見ながらそれになつた。

私がお茶を口を持っていった。何か条件を付けてくれてやろうと思つたが何も浮かばなかつた。

「分かつた。どこへ出しても一緒だ。お前たちの所にも一部回す。会社を立ち上げた時点でまた話をしよう」私は言つた。

「ありがとうございます」

「よろしくお願いします」三人は感激の余り声を詰まらせた。

「御恩は必ずお返しします」Mがその言葉を付け加えた。

「おいおい、大袈裟なことを言うなよ」

私は後ろめたさを覚えつつMの肩に手を添えた。

「事業を起こすつてことは、小さくても大変なことだ。アマゾンで土地を切り拓くより大変かも知れん。しかし人に使われては得られない悦びがきつとあるだろう。頑張

ニート生活を続けるのか、健全なバラサイトシングルを持つ親達が雲の上の人の様に羨ましい。

このニート、最近隣町のニート娘とねんごろになり、両者は両家の間を往き来している。

ほぼ三カ月毎にどちらかの家に同棲するという形態を彼等は取っている。ニート娘の所にうちのニートが三カ月暮らすと、次にはニート娘共々息子が我が家に帰ってきて三カ月暮らすという風である。ただニート娘が乗り込んで来るその三カ月は、意外にもこの娘が我が家の台所を使つて二人分の食事を作るので、その点では家内を大いに喜ばせている。

しかし我々にとってはこのニート娘に我が家が気に入つて貰つては困るのである。今まで一人であつた居候を二人抱え込むことになる。大食いの二人である。食費、光熱費の負担も馬鹿にならない。しかし家内にオニババ的迫害のできるわけも無い。ここは運に任せるしかない。しかし手をこまねいているわけにもいかない。現に向こうの母親は先手を打つて攻勢をかけてきている。間を置いてはこのニート娘のことをよろしくとの電話がかかってくる。厄介なお荷物をこちらに押しつけてしまおうとの意図が明白である。猫撫で声で歯の浮く様なお世辞を交えつつ三カ月交替のサイクルをこちらで止めてしまおうと謀略を逞しくしている。向こうの戦術を受け止めつつそうはさせないという

が本当は自然なんだよね」

「違います、違います、違うんです」

Mは慌てて否定した。SとKもそれに合わせ手を激しく振る。

「まあ、お上がんさい」

私は猿に衣装を着せた様な三人の中に入るよう促した。

「お邪魔させて頂きます」

三人は照れ笑いを浮かべながらしきりに背広を気にしつつ靴を脱いだ。そのあと背を丸めつつ私に従つて居間に入った。

お茶を運んできた家内が目丸くして三人を見やる。三人はおどおどして体を縮めた。

「実は私共、このたび営業の方を担当することになりました。実は私共、このたび営業の方を担当することになりました

早く楽になりたいと思つてか、Mが急ぎ込んで言った。

「君等は経営陣なんだから。君等の行動はつきつめれば全

て営業行為さ」

「違います、違います」またMが慌てて言った。

「私共は経営者でなくなりました」

私はMと同僚二人の顔を代わる代わる見つめた。

私の顔の曇りを見て、

「違います、違います」またもやMが否定した。

「課長さんのお陰で事故車とか、不具合車とか、納期に間

のが家内の決意であり私も同様である。対抗手段をあれこれと巡らしているが、決定打は出ない。息子が向こうの家に滞在する三カ月前こちらも全く同じ球を投げ返すという千日手を繰り返している。

わがニート息子も向こうの家では猫を被り従順に振る舞っているらしく、その点では向こうの両親の心証は良いようである。果たしてどちら側に軍配が上がるか、目が離せない状況が続いている。

○月×日

土曜日の午後、驚いたことに山出しの工員姿以外見かけなかったMが打つて変わつてバリツとした背広姿、黒皮の鞄という出で立ちで我が家に現れた。

零細企業のベテラン工員らしく、出勤も下勤も、勤務中も、恐らく家庭でも、葉っぱ服姿が薄汚れたジャンパー服姿で通し続けた人間がこれは一体どうしたことがか。

後ろに同様の姿でSとKがもじもじしている。

彼等はひどくその服装を意識しており、第一回目のお披露目をSポデーで演ずる勇気が無く、私たち二人の目にも耐えて、それによつて免疫力を得たいと思つたに違いない。

「珍しいね、そういう服装は」私は微笑しながら言った。

「いや、それなりに社長さんと重役さんなんだから。これ

に合わない車の塗装とか、その都度回して貰つておりますので、仕事が少ない倒産ということはありません」

Mが何度も頭を下げ、SとKもそれを真似た。

「では、どうした？」

「課長さん、会社を辞める前に私共三人、課長さんの所へお伺いしたことがありますよね」

「うん、よく覚えてる。あの後君達は会社を興したんだからな」

「あの時、三人のフィリピン人の話をしたと思います」私は顔に笑みを浮かべた。「目端が利いて、飲み込みが早くて。手も君達ベテランよりも器用だつて。そういう話だったな」

「そうです、そうです。あの三人のフィリピン人、名はコルテス、フィリオ、ガルシアと言います。私共は会社を興してから暫くして彼等を引き抜きました」

「そうだったのか」

「見込んだ通り、とても能力のある連中でした。ビジネスの素質がある上に、我々とは比べ物にならないハングリー精神の持主達です。作業は人の何倍もこなす。朝早くから夜遅くまで働いても不平一つ言わない。言葉が使える様になつてからは営業を任せてみたんですが、おどろいたことに、あつという間に受注を5割方増やしました。特にコルテスは特別はしこく、色が黒くて、小さくて、太閤さんて

のはこんな男じゃなかったかと思わせる程私達を感じさせました」

「凄いいりピン人達だね」

「このたび、私共は彼等三人を経営陣のトップに据えることに致しました」

「ほほう。じゃ君達は黒幕としてそのフリーピン人達三人を陰で操る役になったわけだね」

「ともでもございませぬ。そんな芸などできませんものか。」

私共はただ創業者というだけのものに過ぎませぬ。昔お世話になった会社の課長さんのお情けで回して貰っている仕事をただこなしているだけの存在です。こんなことでは目端の利く競争相手が現れた場合、ひとたまりもありません。中小企業、零細企業のトップはお飾りなんか構えていたら命取りです。本当の能力家がトップにならなければいけません。私共はコルテス、フリーオ、ガルシアの三人に会社を託し、社員として使って貰うことにしました」

「ほう、主客転倒したわけだね」

「いえ、これが本当の形です。社長の能力のある者が社長の位につき、並の頭しかない者は並の地位の仕事をする。

当然のことです。我々にとつてもその方がずっと楽です。

われわれは会社の頭脳になれる人間ではありません。いえ、片腕になれる人間でさえありません。上からの指示を受け、その通りに働く。そのように生まれついた者達です。社長

や重役の座を彼等に譲って気が晴れ晴れました」

「で、そのフリーピン人の経営陣が君達に営業をやれと言ったのかね」

「そうです。我々は必要に応じ技術の指導もしますが、ふだんは営業マンとして働くことになりました。S車体の外注課長とのパイプは何と言つてもわが社の生命線ですし、今の何倍もその繋がりを強くすべしというのが、コルテス社長の意向です。つきましては課長」

「何だね」

「このたびS車体製造さんでは、今までのラインの他に新たに7つラインを増設する予定と聞きましたが」

「よく知ってるな。まあそういうことだ。他の者には話すなよ」

「そのラインに付く人間が新しく必要になりますよね」

「当然そうなる」

「その要員を我々の会社に請け負わせていただけませんかしょうか」

「……」

「お願いします」

「全部は無理だな。お前んとこと私が癒着していると見られる」

「課長さんの立場が保てる範囲で何とか」

「分かった。人員の50%をおまえのところに任せる」

私は殆どためらいを覚えずにそう告げた。

三人は畳に顔をこすりつけては礼を言った。

「なかなか営業マンとしてもやるじゃないか」

三人の頭に向け私はニヤニヤしながら言った。根っからの口下手なのに、彼等が必死に営業マンの役を演じているのがなんとも微笑ましかった。これもコルテス、フリーオ、ガルシア三人の感化であろうか。

「君達はコルテス社長とその右腕左腕が心から気に入っている様だね」

「その通りです。腹の底から尊敬し慕っています。100%彼等についてゆくつもりです。営業など考えてもみなかった自分達ですが、不思議と苦になりませぬ」

「そうか。コルテス社長は本物だな。君達をそこまで惚れさせるんだからな。君達の会社はきつと大きくなるぞ」

Mはにっこりとして領いた。

「日本で生まれた日本人だからといって、我々がここで主人面する時代は去りました。地球はどんどん狭くなっています。我々は宇宙船地球号の一員です。国籍はもはや関係ありません。自分共はコルテス社長の下、一丸となって働き、会社を隆盛に導き、自分達も繁栄し、地球の発展にも寄与したいと思えます」

「地球の発展か。そこまで話が行くのか。君も大層能弁になったな」

「コルテス社長が私に乗り移ってそう言ってるのかもしれない」

「おいおい、狐つきみたいなことを言うなよ」

我々は顔を見合わせると大笑いした。

三人は帰っていった。

一人になり、ふつと寂寥が身に沈んできた。

そうだ。コルテス社長に限らず、あの中国人密航女子工員の子供達が、将来出世してSボデーの幹部や重役、はては社長になることが無いとは言えない。そしてわがニートたる息子が、将来、広い中国のどこかの工場か農地で、最下層の労働者や作業員として働くことだって有り得るのだ。私の中の寂寥感がいつしか明るさをもなったあきらめに変わっていった。

そう。そのことを悲しむことは何ら無い。それでよい。世は移り変わって行くものなのだから。

私は窓を開け視線を空に向けた。

宇宙船地球号を取り巻く光の層、青空がどこまでも広がっていた。